

平成11年度，12年度

障害のある子どもの教育指導の改善に関する調査普及事業

全国小・中学校肢体不自由特殊学級実態調査報告書

平成13年3月

国立特殊教育総合研究所
肢体不自由教育研究部

序 文

21世紀を迎え、我が国の政治、経済、行政あるいは教育の分野において、それらの在り方が大きく変わりつつあるという動きを感じないわけにはいきません。

特殊教育の分野においても、そのような動きを背景としつつ、先般、21世紀の特殊教育の在り方に関する調査研究協力者会議から「21世紀の特殊教育の在り方について～一人一人のニーズに応じた特別な支援の在り方について～」の最終報告書が出され、21世紀における我が国の障害がある子どもたちに対する基本的な教育の在り方が示されたところです。そして、この最終報告書における「特殊学級、通級による指導の今後の在り方について」によれば、「特殊学級の教育の充実を図るため、小・中学校においては、特殊学級担任教員だけではなく、学校の職員全体で支援するとともに・・・」、「・・・学校の職員全体の理解を得るとともに・・・」等の記述のごとく、学校全体の職員集団による子どもへの支援の必要性が強調されています。

すなわち、今後特殊学級（特殊教育の分野）と通常学級（通常教育の分野）が一つの学校という枠組みを基盤として連携・協力を行い、子どもたちのためにどのように充実した教育が展開できるのかについて、理念とそれに基づく具体的な体制や活動を作り上げていくことが特殊学級設置校における重要な課題となるでしょう。

本報告書は、このような状況に鑑み、全国の肢体不自由特殊学級に対して特に肢体不自由特殊学級と通常学級における児童生徒、教職員及び保護者等の「人と人との豊かな交わり」という観点から実態調査を行い、それについてまとめたものです。

本報告書が、学校における日々の教育実践のみならず関係諸氏の情報交換の際の有効な資料として活用していただければ幸いに存じます。

なお、多忙な業務の中で本調査にご協力いただいた各関係機関ならびに教職員の方々に対し、深く感謝いたします。

平成13年3月

肢体不自由教育研究部長

笹 本 健

目 次

序 文

I 調査の目的	1
II 調査の方法	1
III 調査の結果	2
I 学校・学級の概要について	3
II 肢体不自由特殊学級に在籍する児童生徒の状況について	5
III 肢体不自由特殊学級にかかわる教師等について	7
IV 人と人との交わりを豊かにする工夫等について	
IV-1 <小学校の部>	9
IV-2 <中学校の部>	35
IV 全体考察 ～今後の課題を中心に～	59

調 査 票

I 調査の目的

肢体に不自由がある児童生徒が教育を受けている場合は、特殊教育諸学校や特殊学級、さらには通常学級です。このように、多様な場で教育を受けている子どもに対する教育的な支援を充実させていくためには、子ども同士や子どもと教師の豊かな交わりを中核とし、さらには地域社会や保護者も視野に入れながら、それぞれの場の教育特性に照らし合わせた支援が行われる必要があります。

本調査は、どのような教育の場においても活動の基本となる、人と人との豊かな交わりに関して、どのような工夫が行われているか、あるいは課題があるかについてを調査し、今後それぞれの教育の場において行われるべき教育的支援の在り方に関する手がかりを得ようとするものです。

調査の対象となる教育の場を特に肢体不自由特殊学級としたのは、

- ① 通常の学校に設置され、その規模も小さいことから、物理的・心理的に特殊教育の分野と通常教育の分野の連携・協力という観点からさまざまな工夫や課題に関する実際的な資料が得られる
- ② 地域社会を視野に入れた教育的支援を検討していく上で今後、学区内の子どもたちが在籍する特殊学級が、特殊教育と通常教育の連携・協力に関して重要な役割を果たす

以上のように考えられるからです。

II 調査の方法

1. 調査対象

全国の肢体不自由特殊学級設置小・中学校（平成12年1月現在）について、アンケート形式による悉皆調査を行いました。

記述対象者は、原則として肢体不自由特殊学級の担任としました。

2. 調査項目

本調査においては、その調査内容を主として学級内、学校全体、学校－地域社会という視野から、児童生徒や教職員、保護者等に関することから①学校・学級の概要について、②肢体不自由特殊学級に在籍する児童生徒の状況について、③肢体不自由特殊学級に関わる教師等について、④人と人との交わりを豊かにする工夫等について等、それぞれの観点に大別し、記入式と記述式による回答より、資料の収集を行いました。

3. 調査手続き

本調査の対象校は、全国特殊学級設置学校名簿資料（全国特殊学級設置学校長協会）に基づき、上記1.の対象校に対し調査用紙を郵送、回収し、資料の収集を行いました。調査期間は、平成12年1月中旬～同年2月下旬

4. 調査集計・分析の手続き

小学校群、中学校群別にそれぞれを集計・分析しました。

記述式回答に関しては、回答の内容から最も強調されている個々の要素を抽出し、関連するカテゴリーにまとめました。

Ⅲ 調査の結果

肢体不自由特殊学級設置小学校 448 校（回収率 49.6% 448/903）、肢体不自由特殊学級設置中学校 185 校（回収率 54.5% 185/341）から調査用紙の回答を得ました。

その集計結果および分析結果について調査票の項目ごとに、以下のとおりまとめました。

- Ⅲ－Ⅰ 学校・学級の概要について
- Ⅲ－Ⅱ 肢体不自由特殊学級に在籍する児童生徒の状況について
- Ⅲ－Ⅲ 肢体不自由特殊学級にかかわる教師等について
- Ⅲ－Ⅳ 人と人との交わりを豊かにする工夫等について
 - Ⅲ－Ⅳ－1 <小学校の部>
 - Ⅲ－Ⅳ－2 <中学校の部>

Ⅲ 調査の結果

I 学校・学級の概要について

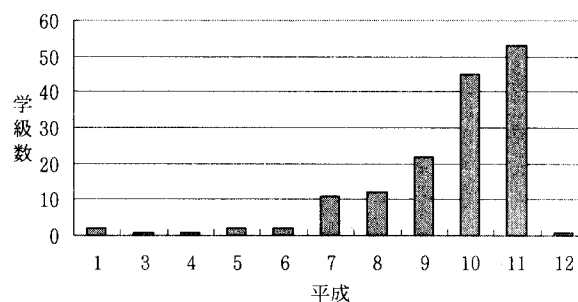
I 学校・学級の概要について

1. 通常の学級の設置学級数および在籍児童生徒数

本設問に関する結果は以下のようになります。

	最大学級数	最小学級数	平均学級数	最大児童生徒数	最小児童生徒数	平均児童生徒数
小学校	39	6	14.2	1317	24	453.2
中学校	36	6	14.1	978	72	472.4

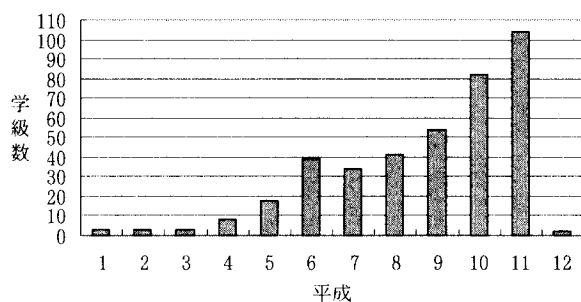
中学校・肢体不自由特殊学級開設年（平成）



2. 肢体不自由特殊学級の開設年

小学校特殊学級、中学校特殊学級ともに、平成元年以降の開設学級数の変化については以下のようになります。

小学校・肢体不自由特殊学級開設年（平成）



3. 肢体不自由特殊学級の在籍児童生徒数

本設問に関する結果は以下のようになります。

	最大学級数	最小学級数	平均学級数	最大児童生徒数	最小児童生徒数	平均児童生徒数
小学校	3	1	1.01	17	1	1.71
中学校	3	1	1.02	9	1	1.52

Ⅲ 調査の結果

Ⅱ 肢体不自由特殊学級に在籍する児童生徒の状況について

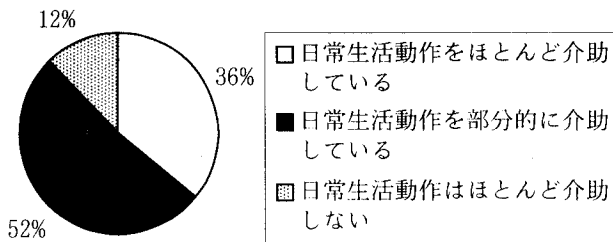
Ⅱ 肢体不自由特殊学級に在籍する児童生徒の状況について

1. 肢体不自由特殊学級に在籍する児童生徒の障害の状態

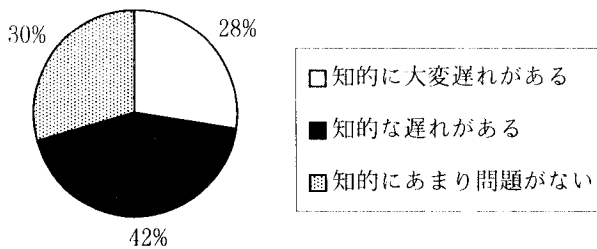
小学校および中学校の肢体不自由特殊学級に在籍する児童生徒の障害の状態について、日常生活動作、知的発達、情緒的発達、健康上の配慮、以上4項目について、それぞれ3段階の程度によって回答されたものをまとめると以下ようになります。

<小学校>

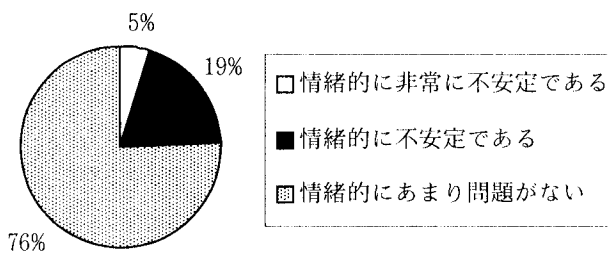
(1) 日常生活動作について



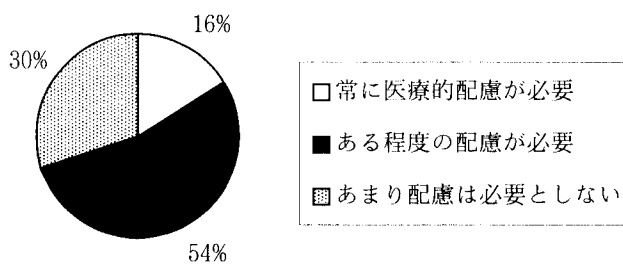
(2) 知的発達について



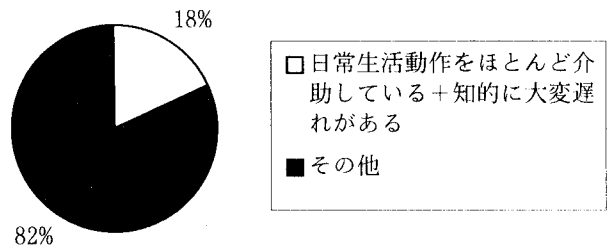
(3) 情緒的発達について



(4) 健康上の配慮について

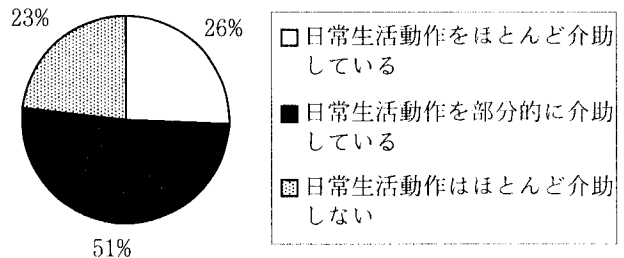


(5) 日常生活動作と知的発達が重度の子どもについて

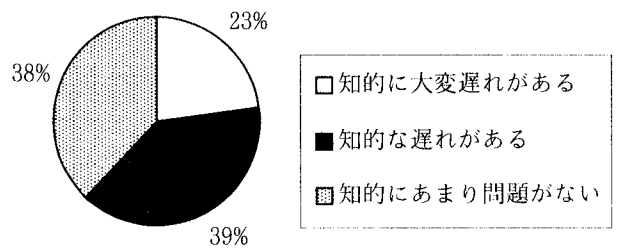


<中学校>

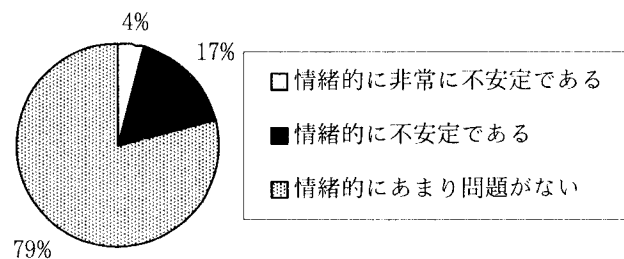
(1) 日常生活動作について



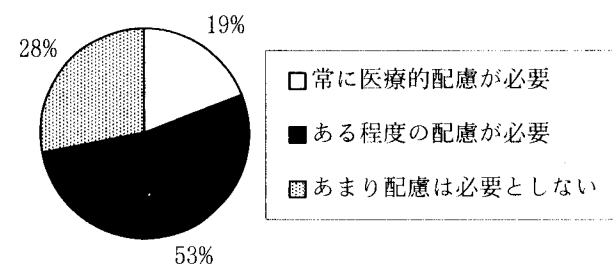
(2) 知的発達について



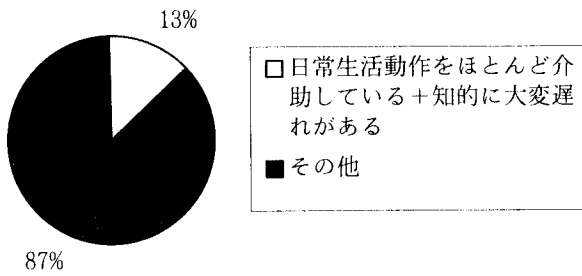
(3) 情緒的発達について



(4) 健康上の配慮について



(5) 日常生活動作と知的発達が重度の子どもについて

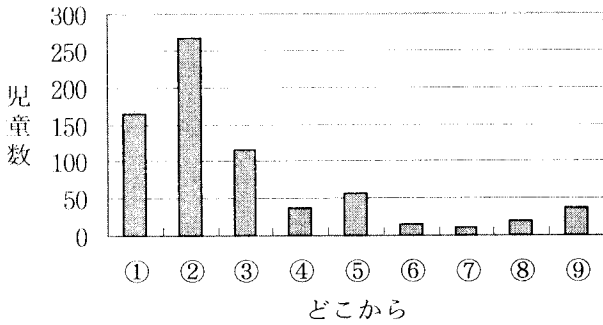


2. 肢体不自由特殊学級への転入学の状況

肢体不自由特殊学級に「どこから」、「いつ」転入学在籍したかについて、小学校・中学校別にまとめたのが、以下のグラフです。

<小学校>

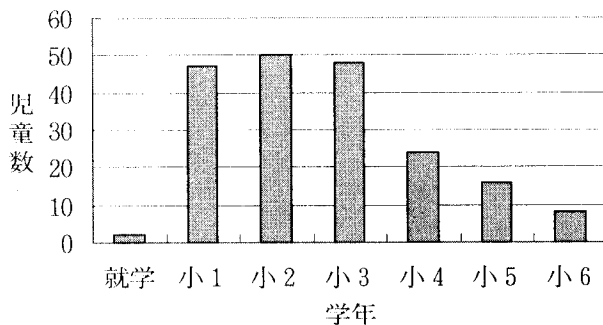
「どこから」



(グラフ X 軸上の要素)

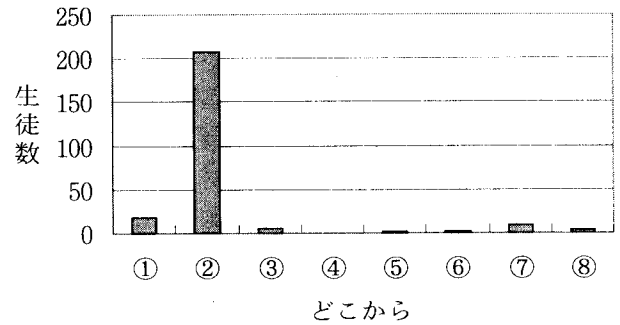
- ① 幼稚園から就学
- ② 保育園から就学
- ③ 通園施設から就学
- ④ 在宅のままで直接就学
- ⑤ 同小学校通常学級から転級
- ⑥ 同小学校他の特殊学級から転級
- ⑦ 他の小学校通常学級から転学
- ⑧ 他の小学校特殊学級から転学
- ⑨ その他

「いつ」



<中学校>

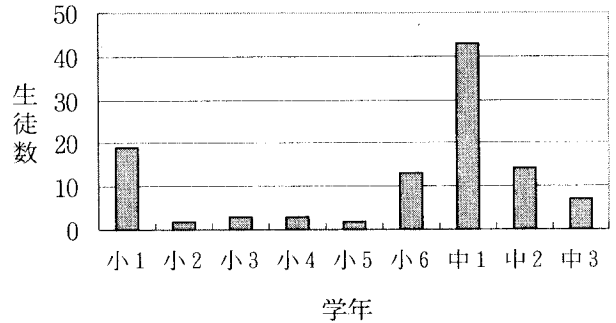
「どこから」



(グラフ X 軸上の要素)

- ① 小学校通常学級から就学
- ② 小学校特殊学級から就学
- ③ 同中学校通常学級から転級
- ④ 同中学校他の特殊学級から転級
- ⑤ 他の中学校通常学級から転学
- ⑥ 他の中学校特殊学級から転学
- ⑦ 養護学校中学部から転学
- ⑧ その他

「いつ」



Ⅲ 調査の結果

Ⅲ 肢体不自由特殊学級にかかわる教師等について

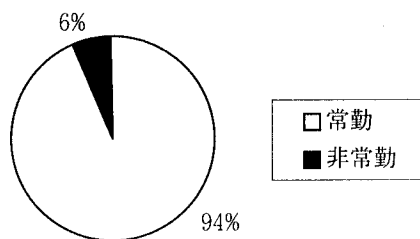
Ⅲ 肢体不自由特殊学級にかかわる教師等について

1. 肢体不自由特殊学級に関わる教師について

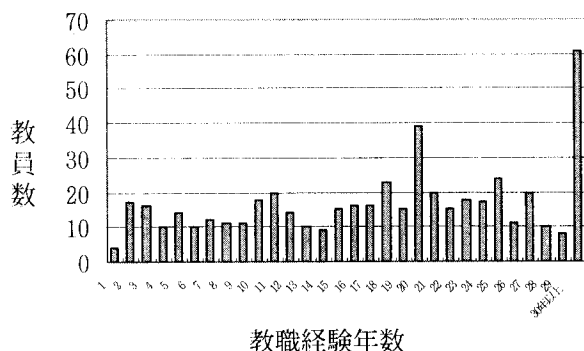
肢体不自由特殊学級を担当している教師について、「常勤・非常勤の割合」「教職経験年数」「特殊教育経験年数」以上の3項目に関する結果を、小学校・中学校別にみると、以下ようになります。

<小学校>

(1) 常勤・非常勤の割合



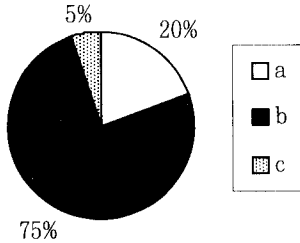
(2) 教職経験年数



(3) 補助を行う人の活動内容

- a : 直接に指導を行う (養護・訓練や担任の学習の補助等)
- b : 直接指導はしない (日常生活動作や食事排便の介助等)
- c : その他

以上のように分類し、結果を以下のグラフに表しました。



<中学校>

正式には、「介助員」や「非常勤嘱託員」等と呼ばれて配置されています。学級内では～先生、～(名前)さんと呼称されています。

(1) 補助の役割を行う人がいる学級数

学級数 46 学級 (25.6%)

1 学級あたりの平均人数 2.2 名

(2) 補助の役割を行う人の週平均勤務時間

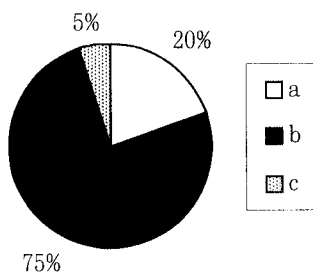
月～金 12.8 時間

上 3.7 時間

(3) 補助を行う人の活動内容

- a : 直接に指導を行う (訓練や教科指導等)
- b : 直接指導はしない (生活全般の介助や女子生徒のトイレ介助等)
- c : その他

以上のように分類し、結果を以下のグラフに表しました。



3. ボランティアについて

ボランティアとして特殊学級の補助の役割を行う人々について、「その人数」「どのような人々か」の回答については、以下のような結果となっています。

<小学校>

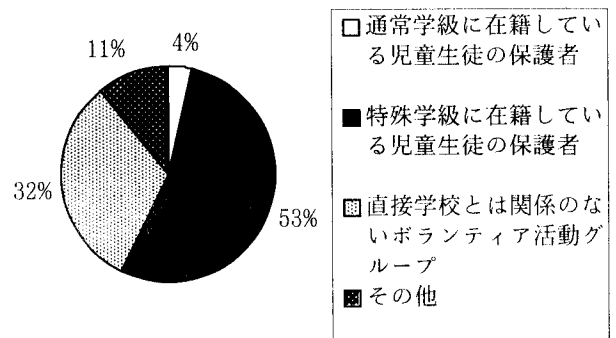
(1) ボランティアがいる学級数

学級数 26 学級 (5.8%)

1 学級あたりの平均人数 2.4 名

(2) ボランティアの内訳

ボランティアとして特殊学級の補助を行っている人々は、「特殊学級に在籍する児童の保護者」「通常学級に在籍する児童の保護者」「学校とは無関係のボランティア活動グループ」「その他」、以上のように分類されました。その割合については以下になりました。



<中学校>

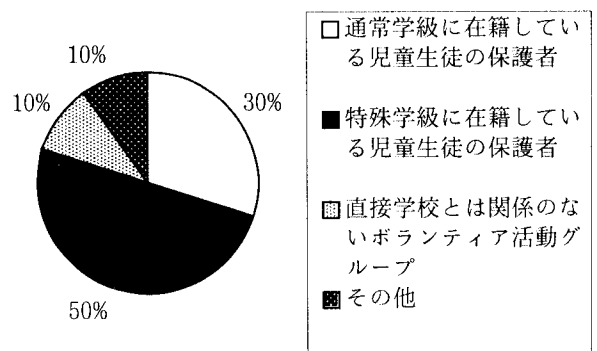
(1) ボランティアがいる学級数

学級数 9 学級 (5%)

1 学級あたりの平均人数 1.3 名

(2) ボランティアの内訳

ボランティアとして特殊学級の補助を行っている人々は、「特殊学級に在籍する児童の保護者」「通常学級に在籍する児童の保護者」「学校とは無関係のボランティア活動グループ」「その他」、以上のように分類されました。その割合については以下になりました。



Ⅲ 調査の結果

Ⅳ—1 人と人との交わりを豊かにする工夫等について

(小学校の部)

IV-1 人と人との交わりを豊かにする工夫等について（小学校の部）

<特殊学級内の視点から>

「教師と児童生徒あるいは児童生徒同士のつながりを豊かにするための工夫等」について

1. 設問について

本設問は、肢体不自由特殊学級が単独で設置されている場合と、その他の特殊学級が併設されている場合に分類し、それぞれ現在行われている「教師と児童生徒あるいは児童生徒同士のつながりを豊かにするための工夫等」について重要と思われるものから順に上位3位まで自由記述形式で回答するものです。

2. 結果

— 肢体不自由特殊学級が単独で設置されている場合 —

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級が単独で設置されているアンケート回答校総数(121校)の内、上記設問に関して、何らかの回答を行った学(級)校数の割合。

① 重要度第1位	141校(学級)	117%
② 重要度第2位	125校(学級)	103%
③ 重要度第3位	108校(学級)	89%

※ 上記回答率が100%を上回っているのは、他の障害種別特殊学級併設校の場合の回答が混入されている可能性があります。

したがって、この結果に関しては必ずしも、真の状況を表現しているとは言えません。

(2) 記述内容の要素

重要度第1位～第3位の記述回答内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎の一つ選択しました。すなわち、上記それぞれの重要度順位におけるアンケート回答校総数=記述回答(要素)総数です。

その結果、それぞれの要素は、

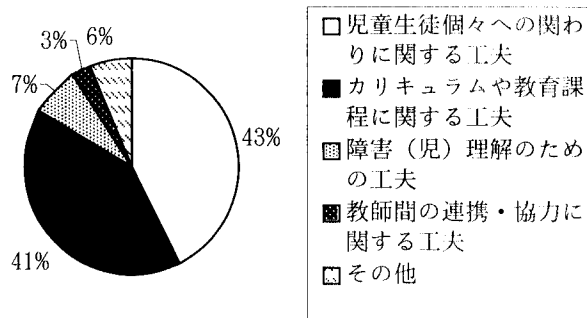
- ① 児童生徒個々への関わりに関する工夫
例：会話やスキンシップ等
- ② カリキュラムや教育課程に関する工夫
例：通常級との交流推進、特殊学級の解放等
- ③ 障害(児)理解のための工夫
例：特殊学級からの情報発信等
- ④ 教師間の連携・協力に関する工夫
例：交流級担任との連絡調整や話し合い等
- ⑤ その他

以上のカテゴリーに分類することができました。

※ このカテゴリー分類は他の障害種別特殊学級が併設されている肢体不自由特殊学級の場合も同様です。

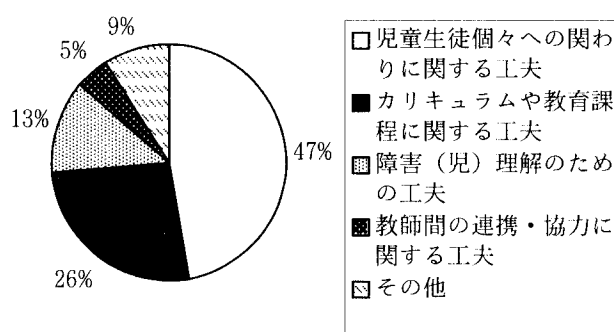
(3) 要素集計の結果

重要度第1位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 141)



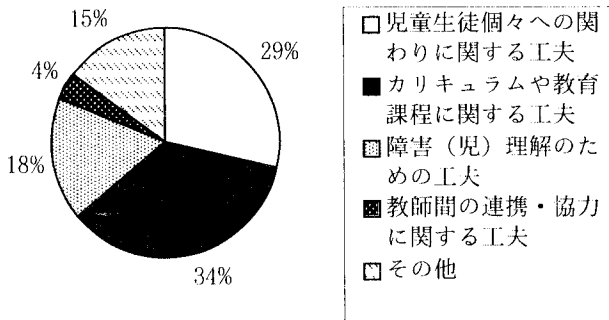
① 児童生徒個々への関わりに関する工夫	60要素	43%
② カリキュラムや教育課程に関する工夫	58要素	41%
③ 障害(児)理解のための工夫	10要素	7%
④ 教師間の連携・協力に関する工夫	4要素	3%
⑤ その他	9要素	6%

重要度第2位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 125)



① 児童生徒個々への関わりに関する工夫	59要素	47%
② カリキュラムや教育課程に関する工夫	33要素	26%
③ 障害(児)理解のための工夫	16要素	13%
④ 教師間の連携・協力に関する工夫	6要素	5%
⑤ その他	11要素	9%

重要度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 108)



- ① 児童生徒個々への関わりに関する工夫
31要素 29%
- ② カリキュラムや教育課程に関する工夫
38要素 34%
- ③ 障害(児)理解のための工夫
19要素 18%
- ④ 教師間の連携・協力に関する工夫
4要素 4%
- ⑤ その他
16要素 15%

(4) 要素集計結果のまとめ

重要度ランク第1位とランク第3位において順位が逆転しているものの、「教師と児童生徒あるいは児童生徒同士のつながりを豊かにするための工夫等」においては、カテゴリー「児童生徒個々への関わりに関する工夫」が重要と考え、実行しているところが多いとの結果を得ました。

以下、カテゴリー「カリキュラムや教育課程に関する工夫」「障害(児)理解のための工夫」「教師間の連携・協力に関する工夫」と続きますが、これらカテゴリー間の順位は、重要度第1位～第3位ランクまで不変でした。

最も重要と考えられているカテゴリー「児童生徒個々への関わりに関する工夫」における具体的な要素の記述内容の傾向は、①担任が児童生徒や児童生徒同士のコミュニケーションの充実を図ること、②人間的な触れあいやスキンシップを多くとること、等でした。

カテゴリー「カリキュラムや教育課程に関する工夫」における具体的な要素の記述内容は、①通常学級との交流、②休み時間、その他の時間帯における学級解放、等が圧倒的な多数を占めていました。

カテゴリー「障害(児)理解のための工夫」における具体的な要素記述内容の傾向は、①全校児童生徒や教師を対象に学級(児童生徒)の紹介を行っている、②特殊学級担任が障害(児)理解のための授業を行う、等でした。

カテゴリー「教師間の連携・協力に関する工夫」における具体的な要素記述内容の傾向は、①親学級あるいは通常学級(交流級)の担任との話し合い、複数担任の場合では、②それぞれの教師の指導に関する共通理解、でした。

「その他」における具体的な要素記述内容は、①保護者

との連携・協力、②特殊学級内の装飾の工夫(物理的な雰囲気作り)、等でした。

— 他の障害種別特殊学級が併設されている場合 —

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級が他の障害種別特殊学級と併設で設置されているアンケート回答校総数(327校)の内、上記設問に関して、何らかの回答を行った学(級)校数の割合。

- ① 重要度第1位 299校(学級) 91%
- ② 重要度第2位 286校(学級) 87%
- ③ 重要度第3位 219校(学級) 67%

(2) 記述内容の要素

肢体不自由特殊学級単独設置校の場合と同様重要度第1位～第3位の記述回答内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。

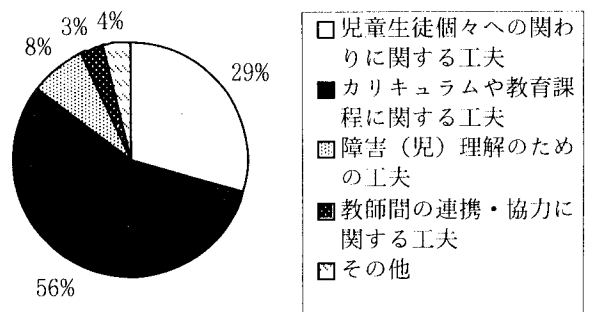
その結果、それぞれの要素は、肢体不自由特殊学級が単独で設置されている場合と同様に、

- ① 児童生徒個々への関わりに関する工夫
例：会話やスキンシップ等
- ② カリキュラムや教育課程に関する工夫
例：通常級との交流推進、特殊学級の解放等
- ③ 障害(児)理解のための工夫
例：特殊学級からの情報発信等
- ④ 教師間の連携・協力に関する工夫
例：交流級担任との連絡調整や話し合い等
- ⑤ その他

以上のカテゴリーに分類することができました。

(3) 要素集計の結果

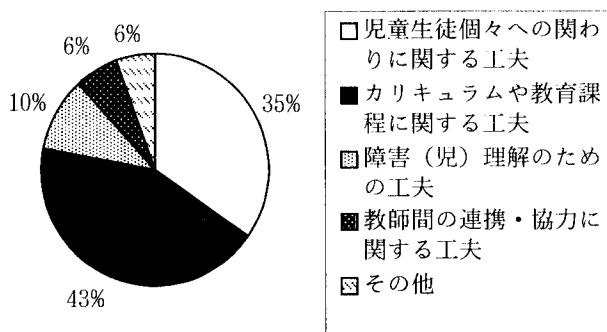
重要度第1位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 299)



- ① 児童生徒個々への関わりに関する工夫
88要素 29%
- ② カリキュラムや教育課程に関する工夫
167要素 56%

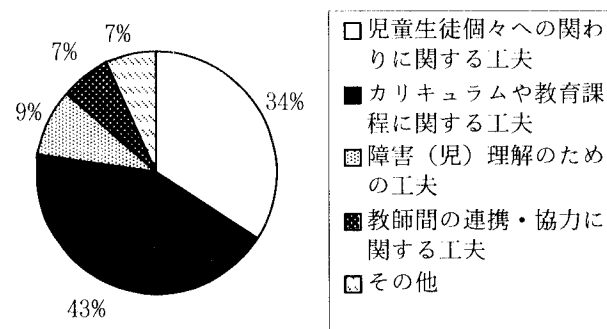
③ 障害(児)理解のための工夫	23要素	8%
④ 教師間の連携・協力に関する工夫	10要素	3%
⑤ その他	11要素	4%

重要度第2位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 286)



① 児童生徒個々への関わりに関する工夫	99要素	35%
② カリキュラムや教育課程に関する工夫	124要素	43%
③ 障害(児)理解のための工夫	30要素	10%
④ 教師間の連携・協力に関する工夫	17要素	6%
⑤ その他	16要素	6%

重要度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 219)



① 児童生徒個々への関わりに関する工夫	75要素	34%
② カリキュラムや教育課程に関する工夫	95要素	43%
③ 障害(児)理解のための工夫	19要素	9%
④ 教師間の連携・協力に関する工夫	15要素	7%
⑤ その他	15要素	7%

(4) 要素集計結果のまとめ

肢体不自由特殊学級単独の場合とは異なり、重要度ランク第1位のカテゴリーは「カリキュラムや教育課程に関する工夫」となっています。

以下、「児童生徒個々への関わりに関する工夫」「障害

(児)理解のための工夫」「教師間の連携・協力に関する工夫」と続きますが、これらカテゴリー間の順位は、重要度第1位～第3位ランクまで不変でした。

最も重要と考えられているカテゴリー「カリキュラムや教育課程に関する工夫」における具体的な要素の記述内容は、①他の障害種別特殊学級との合同学習(特殊学級同士の交流)②通常学級との交流、であり単独で設置されている場合において多数を占めていた要素「休み時間、その他の時間帯における学級解放」が極端に減少していました。

カテゴリー「児童生徒個々への関わりに関する工夫」における具体的な要素の記述内容の傾向は、①担任が児童生徒や児童生徒同士のコミュニケーションの充実を図ること、②人間的な触れあいやスキンシップを多くとること、等でしたがとりわけ声かけやあいさつを行う、という具体的な表現が多くありました。

カテゴリー「障害(児)理解のための工夫」における具体的な要素記述内容の傾向は、①全校児童生徒や教師を対象に学級(児童生徒)の紹介を行っている、②特殊学級担任自身がよりよく障害(児)を理解していく、等でした。

カテゴリー「教師間の連携・協力に関する工夫」における具体的な要素記述内容の傾向は、①他の障害種別特殊学級担任あるいは通常学級(交流級)の担任との話し合い、でした。

「その他」における具体的な要素記述内容は、①保護者との連携・協力、②教材・学習素材の開発、等でした。

「上記の工夫等がさらに充実するために必要なこと」について

1. 設問について

本設問は、肢体不自由特殊学級が単独で設置されている場合と、その他の特殊学級が併設されている場合に分類し、それぞれ現在行われている「教師と児童生徒あるいは児童生徒同士のつながりを豊かにする工夫等」がさらに充実していくために必要なことがらを重要度順に上位3位まで自由記述形式で回答するものです。

2. 結果

一 肢体不自由特殊学級が単独で設置されている場合

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級が単独で設置されているアンケート回答校総数(121校)の内、上記設問に関して、何らかの回答を行った学(級)校数の割合。

① 重要度第1位	120校(学級)	99%
② 重要度第2位	105校(学級)	87%
③ 重要度第3位	83校(学級)	69%

※ 上記重要度第1位の回答率はほぼ100%ですが、前記のように本設問が肢体不自由特殊学級単独設置校と他の障害種別特殊学級との併設校の場合に分類されていますが、設問が複雑であったため併設校の場合の回答も混入されている可能性が考えられます。

そのため、さらに重要度第2位、第3位の数値についても、真の状況を表現しているとは言えない可能性もあります。しかしながら、上記の結果から、設問「教師と児童生徒あるいは児童生徒同士のつながりを豊かにする工夫等」に対する回答よりも、設問「上記の工夫がさらに充実していくために必要なこと」に対する回答総数が少なかったことが分かります。

(2) 記述内容の要素

重要度第1位～第3位の記述回答内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。すなわち、上記それぞれの重要度順位におけるアンケート回答校総数＝記述回答(要素)総数です。

その結果、

① 指導者側のこと(指導的・人的側面)

<①に関する構成要素>

- ①-1 カリキュラムや教育課程のこと
- ①-2 教師の関わり方のこと
- ①-3 教師間の連携・協力のこと
- ①-4 障害(児)理解のこと

② 物理的・時間的なこと

例：情報交換する時間の確保、安全設備の充実等

③ 制度上的こと

例：指導者の数的確保、補助教員の配置等

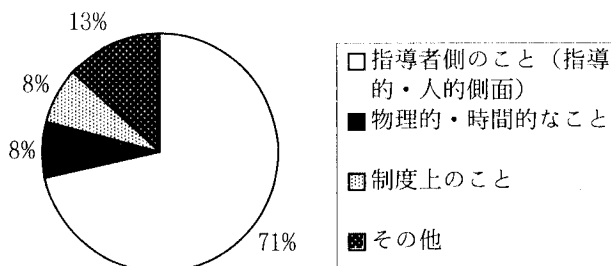
④ その他

以上のカテゴリーに分類することができました。

※ このカテゴリー分類は他の障害種別特殊学級が併設されている肢体不自由特殊学級の場合も同様です。

(3) 要素集計の結果

重要度第1位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 120)



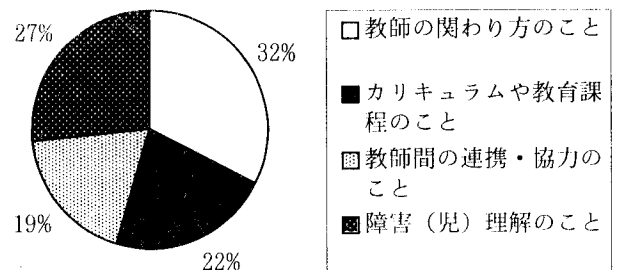
① 指導者側のこと(指導的・人的側面)

86要素 71%

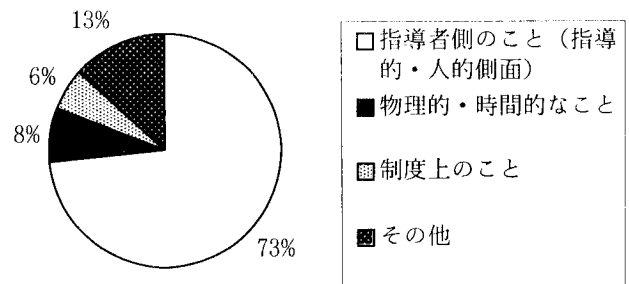
<カテゴリー①に関する構成要素>

- ①-1 教師の関わり方のこと (28/86要素 32%)
- ①-2 カリキュラムや教育課程のこと (19/86要素 22%)
- ①-3 教師間の連携・協力のこと (16/86要素 19%)
- ①-4 障害(児)理解のこと (23/86要素 27%)
- ② 物理的・時間的なこと 9要素 8%
- ③ 制度上的こと 9要素 8%
- ④ その他 16要素 13%

※ 上記カテゴリー①に関する構成要素のグラフ化



重要度第2位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 105)



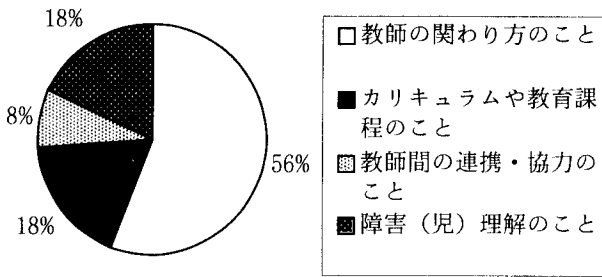
① 指導者側のこと(指導的・人的側面)

77要素 73%

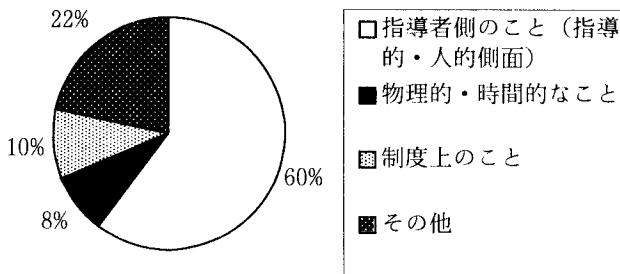
<カテゴリー①に関する構成要素>

- ①-1 教師の関わり方のこと (43/77要素 56%)
- ①-2 カリキュラムや教育課程のこと (14/77要素 18%)
- ①-3 教師間の連携・協力のこと (6/77要素 8%)
- ①-4 障害(児)理解のこと (14/77要素 18%)
- ② 物理的・時間的なこと 8要素 8%

- ③ 制度上的こと 6要素 6%
 - ④ その他 14要素 13%
- ※ 上記カテゴリー①に関する構成要素のグラフ化



重要度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 83)

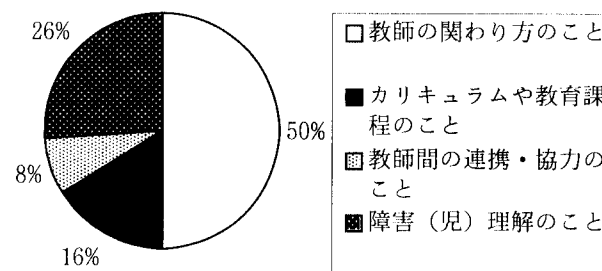


- ① 指導者側のこと(指導的・人的側面) 50要素 60%

<カテゴリー①に関する構成要素>

- ①-1 教師の関わり方のこと (25/50要素 50%)
- ①-2 カリキュラムや教育課程のこと (8/50要素 16%)
- ①-3 教師間の連携・協力のこと (4/50要素 8%)
- ①-4 障害(児)理解のこと (13/50要素 26%)
- ② 物理的・時間的なこと 7要素 8%
- ③ 制度上的こと 8要素 10%
- ④ その他 18要素 22%

※ 上記カテゴリー①に関する構成要素のグラフ化



(4) 要素集計結果のまとめ

重要度ランク第1位~第3位まで「指導者側のこと(指導的・人的側面)」のカテゴリーが圧倒的多数を占めていました。このカテゴリーを構成している要素をさらに詳しく、

- ①-1 教師の関わり方のこと
- ①-2 カリキュラムや教育課程のこと
- ①-3 教師間の連携・協力のこと
- ①-4 障害(児)理解のこと

以上のように分類しましたが、上記構成要素は、重要度第1位~第3位ともに、「教師の関わり方のこと」「障害(児)理解のこと」「カリキュラムや教育課程のこと」「教師間の連携・協力のこと」という順番でした。

他のカテゴリーである「物理的・時間的なこと」「制度上的こと」については重要度第1位~第3位まで要素数、パーセンテージともに両カテゴリー間での違いはありませんでした。

カテゴリー「物理的・時間的なこと」における具体的な要素の記述内容の傾向は、①学校内外の施設の充実、②時間的なゆとり、等でした。

カテゴリー「制度上的こと」における具体的な要素の記述内容の傾向は、①教員定数の改善、②管理職や教育委員会の理解、等でした。

「その他」では、①十分な研修、②保護者との連携、③関係諸機関との連携、等が取り上げられていました。

— 他の障害種別特殊学級が併設されている場合 —

(1) 設問回答率

他の障害種別特殊学級が併設されている場合の回答校総数(327校)の内、上記設問に関して、何らかの回答を行った学(級)校数の割合。

- ① 重要度第1位 304校(学級) 93%
- ② 重要度第2位 227校(学級) 69%
- ③ 重要度第3位 176校(学級) 54%

(2) 記述内容の要素

重要度第1位~第3位の記述回答内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。すなわち、上記それぞれの重要度順位におけるアンケート回答校総数=記述回答(要素)総数です。

その結果、

- ① 指導者側のこと(指導的・人的側面)

<①に関する構成要素>

- ①-1 カリキュラムや教育課程のこと
- ①-2 教師の関わり方のこと

①-3 教師間の連携・協力のこと

①-4 障害(児)理解のこと

② 物理的・時間的なこと

例：情報交換する時間の確保、安全設備の充実等

③ 制度上的こと

例：指導者の数的確保、補助教員の配置等

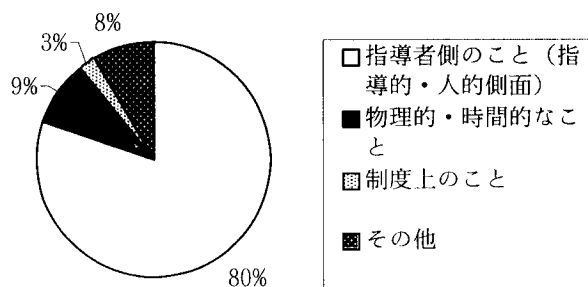
④ その他

以上のカテゴリーに分類することができました。

(3) 要素集計の結果

重要度第1位にランクされた各カテゴリー

(要素総数 304)



① 指導者側のこと (指導的・人的側面)

244要素 80%

<カテゴリー①に関する構成要素>

①-1 教師の関わり方のこと (75/244要素 31%)

①-2 カリキュラムや教育課程のこと (61/244要素 25%)

①-3 教師間の連携・協力のこと (56/244要素 23%)

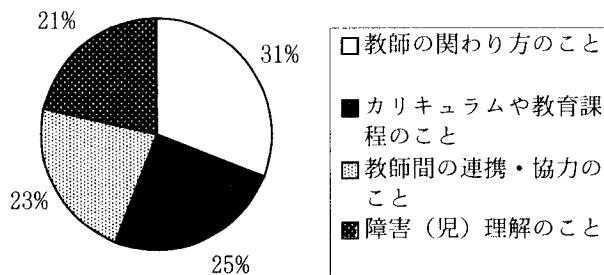
①-4 障害(児)理解のこと (52/244要素 21%)

② 物理的・時間的なこと 27要素 9%

③ 制度上的こと 8要素 3%

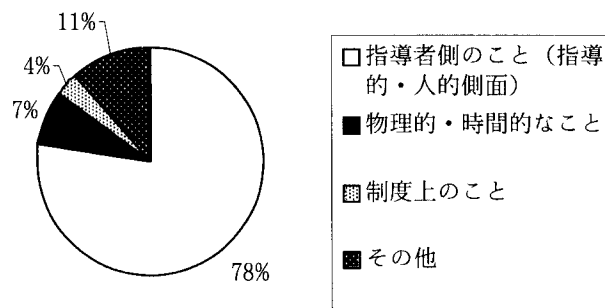
④ その他 25要素 8%

※ 上記カテゴリー①に関する構成要素のグラフ化



重要度第2位にランクされた各カテゴリー

(要素総数 227)



① 指導者側のこと (指導的・人的側面)

176要素 78%

<カテゴリー①に関する構成要素>

①-1 教師の関わり方のこと (61/176要素 35%)

①-2 カリキュラムや教育課程のこと (52/176要素 30%)

①-3 教師間の連携・協力のこと (36/176要素 20%)

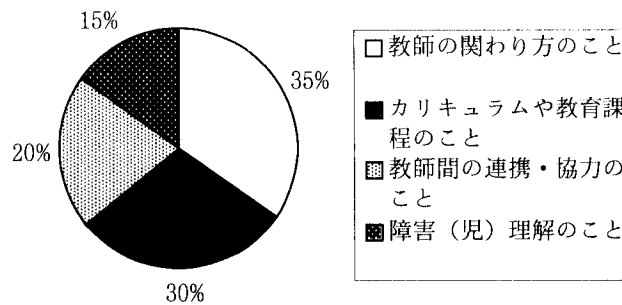
①-4 障害(児)理解のこと (27/176要素 15%)

② 物理的・時間的なこと 17要素 7%

③ 制度上的こと 8要素 4%

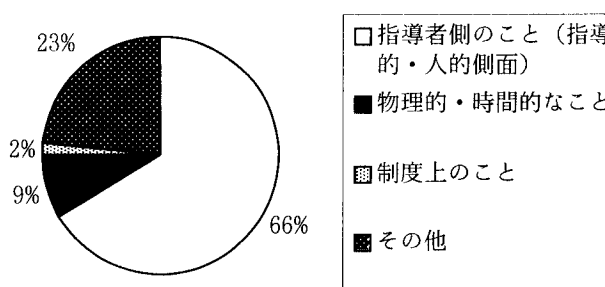
④ その他 26要素 11%

※ 上記カテゴリー①に関する構成要素のグラフ化



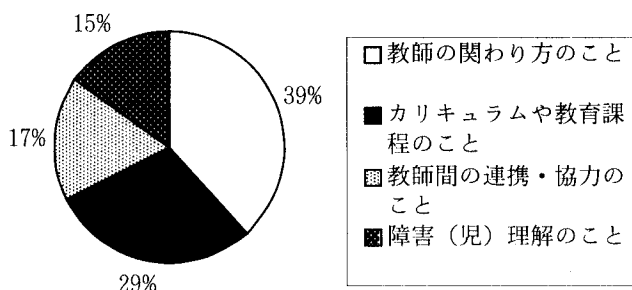
重要度第3位にランクされた各カテゴリー

(要素総数 176)



① 指導者側のこと（指導的・人的側面）	117要素	66%
＜カテゴリ①に関する構成要素＞		
①-1 教師の関わり方のこと	(45/117要素)	39%
①-2 カリキュラムや教育課程のこと	(34/117要素)	29%
①-3 教師間の連携・協力のこと	(20/117要素)	17%
①-4 障害（児）理解のこと	(18/117要素)	15%
② 物理的・時間的なこと	15要素	9%
③ 制度上のこと	3要素	2%
④ その他	41要素	23%

※ 上記カテゴリ①に関する構成要素のグラフ化



（4）要素集計結果のまとめ

肢体不自由特殊学級が単独で併設されている場合と同様に、重要度ランク第1位～第3位まで「指導者側のこと（指導的・人的側面）」のカテゴリが圧倒的多数を占めていました。このカテゴリを構成している要素をさらに詳しく、

- ①-1 教師の関わり方のこと
- ①-2 カリキュラムや教育課程のこと
- ①-3 教師間の連携・協力のこと
- ①-4 障害（児）理解のこと

以上のように分類しましたが、重要度第1位～第3位ともに要素数（カテゴリに占める割合）は、「教師の関わり方のこと」「カリキュラムや教育課程のこと」「教師間の連携・協力のこと」「障害（児）理解のこと」という順番でした。この順番は、肢体不自由特殊学級が単独で併設されている場合（「教師の関わり方のこと」「障害（児）理解のこと」「カリキュラムや教育課程のこと」「教師間の連携・協力のこと」とは異なっています。

他のカテゴリである「物理的・時間的なこと」「制度上のこと」については重要度第1位～第3位ともに「物理的・時間的なこと」が「制度上のこと」を数値的に大きく（2倍～3倍）上回っていました。

カテゴリ「物理的・時間的なこと」における具体的な要素の記述内容の傾向は、①学校内外の施設の充実、②時間的なゆとり、等でした。

カテゴリ「制度上のこと」における具体的な要素の記述内容の傾向は、①教員定数の改善、②管理職や教育委員会の理解に関すること、等でした。

「その他」では、①十分な研修、②保護者との連携、③関係諸機関との連携、等が取り上げられていました。

3. 部分考察

本設問に関する回答数は、『併設の場合における「工夫等が充実するために必要なこと」』の場合を除く全てに、アンケート回答校（学級）数を上回るという結果がでました。

このことは、設問方式が特殊学級が単独の場合と、他の障害種別特殊学級が併設されている場合とに分割して回答することになっていたため、回答手続きが複雑となり、それぞれの場合の回答が重複して存在したのではないかと推測されます。

（1）「教師と児童、あるいは児童同士のつながりを豊にするための工夫等」について

- ・肢体不自由特殊学級が単独で設置されている場合には、児童個々への関わりに対する工夫がカリキュラムや教育課程に関する工夫よりも多く行われていますが、これは特殊学級間の活動に関する工夫が行われない分、クラスの子どもたちへの工夫がなされていないのではないかと推測されます。他の障害種別が併設されている場合には、この逆のことが推測されます。
- ・カリキュラムや教育課程に関する工夫の中で、単独設置の場合には、通常学級との交流が盛んに行われています。また、学級解放が圧倒的多数を占めており、これに比べて併設の場合には、学級間の合同学習の工夫が行われています。このことは、単独併設の場合、交わりの対象が通常学級の児童であるのに対し、併設の場合には、その対象が特殊学級間の児童が多いという傾向を示しています。
- ・特殊学級単独設置、併設の場合ともに教師間の連携・協力に関する活動が少ないようです。

（2）「上記の工夫等がさらに充実するために必要なこと」について

- ・単独設置、併設の場合ともに、教師（学校）側の努力や工夫が必要と考えられています。また、その中でも特に教師の児童への関わりに関する必要があると考えられています。

これらのことより、多くの教師は、課題解決の重要な

要素は教師自身であると考えていることが、推測されます。

- ・単独設置の場合、教師（学校）側の努力や工夫に関して、障害理解に関することが必要とされていますが、これは、普段の交流対象が通常学級の児童や教師であるということが大きな要因であると推測されます。
- ・併設の場合、教師の連携・協力のことが必要とされていますが、対象となる教師集団が、通常学級と他の障害種別特殊学級担任ということが要因であろう、と思われま

「保護者とのつながりを豊かにするための工夫」について

1. 設問について

本設問は、特殊学級内の視点から、保護者との日常的な情報交換や連絡の方法について、頻度の高いものから順に上位3位までを自由記述形式で回答するものです。

2. 結果

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級アンケート回答校総数(448校)のうち、上記設問に関して、何らかの回答を行った学(級)校数の割合。

① 頻度第1位	443校(学級)	98%
② 頻度第2位	418校(学級)	93%
③ 頻度第3位	389校(学級)	87%

(2) 記述内容の要素

頻度第1位～第3位の記述内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。

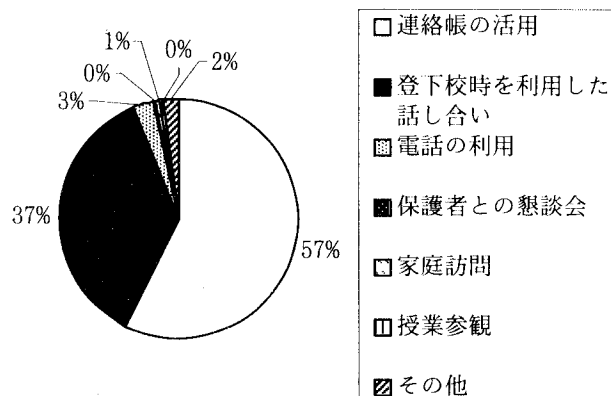
その結果、

- ① 連絡帳の活用（頻度の少ない学級通信等もこのカテゴリーに含めました）
 - ② 登下校時を利用した話し合い
 - ③ 電話の利用
 - ④ 保護者との懇談会
 - ⑤ 家庭訪問
 - ⑥ 授業参観
 - ⑦ その他
- 以上のカテゴリーに分類することができました。

(3) 要素集計の結果

頻度第1位にランクされた各カテゴリー

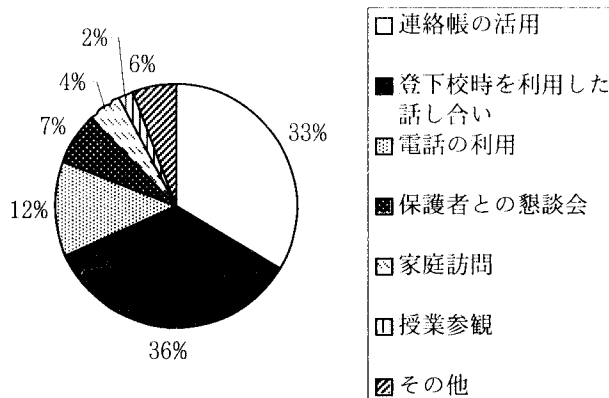
(要素総数 443)



① 連絡帳の活用	253要素	57%
② 登下校時を利用した話し合い	163要素	37%
③ 電話の利用	12要素	3%
④ 保護者との懇談会	1要素	1%未満
⑤ 家庭訪問	3要素	1%未満
⑥ 授業参観	2要素	1%未満
⑦ その他	9要素	2%

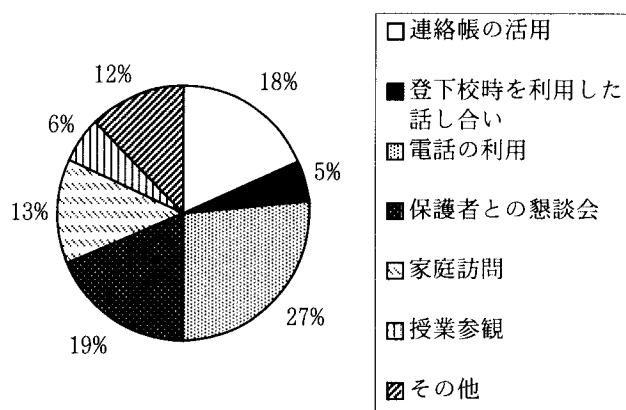
頻度第2位にランクされた各カテゴリー

(要素総数 418)



① 連絡帳の活用	140要素	34%
② 登下校時を利用した話し合い	146要素	36%
③ 電話の利用	52要素	12%
④ 保護者との懇談会	29要素	7%
⑤ 家庭訪問	18要素	4%
⑥ 授業参観	9要素	2%
⑦ その他	24要素	6%

頻度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 389)



順位	カテゴリー	要素数	割合
①	連絡帳の活用	70要素	18%
②	登下校時を利用した話し合い	20要素	5%
③	電話の利用	100要素	27%
④	保護者との懇談会	71要素	19%
⑤	家庭訪問	50要素	13%
⑥	授業参観	23要素	6%
⑦	その他	46要素	12%

(4) 要素集計結果のまとめ

頻度第1位～第2位では、カテゴリー「連絡帳の活用」と「登下校時を利用した話し合い」が大多数を占めています。

*頻度第2位以下では、カテゴリー「電話の利用」「保護者との懇談」「家庭訪問」「授業参観」の順で頻度が急激に増加しています。特に、カテゴリー「電話の利用」に関しては、頻度第3位では要素数が最多でした。

「その他」では、例えば医師やリハビリ専門家を交えた話し合いを行ったり、施設見学を一緒にしたり、肢体不自由時父母会への参加等のような校外での活動を一緒に行う活動が多くありました。

3. 部分考察

- ・ほぼ、全ての学級(学校)が保護者とのつながりについて、何らかの活動や工夫を行っています。その方法に関し、頻度の多かったものは当然のことながら、日々の連絡帳や登下校時を活用した話し合いでした。
- ・頻度第3位の結果から、家庭訪問や懇談会がよく行われていることが伺えます。
- ・電話の利用がかなり多くありましたが、地域性や緊急連絡等に関する活用との関連が考えられます。

「保護者とのつながりがなかなか計れない場合」について

1. 設問について

本設問は、保護者との豊かなつながりがなかなか計れないという場合について、切実と思われるものから順に上位3位までを自由記述形式で回答するものです。

2. 結果

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級アンケート回答校総数(448校)のうち、上記設問に関して、何らかの回答を行った学(級)校数の割合。

重要度	校数	学級数	割合
① 重要度第1位	256校	(学級)	57%
② 重要度第2位	182校	(学級)	41%
③ 重要度第3位	102校	(学級)	23%

(2) 記述内容の要素

重要度第1位～第3位の記述内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。

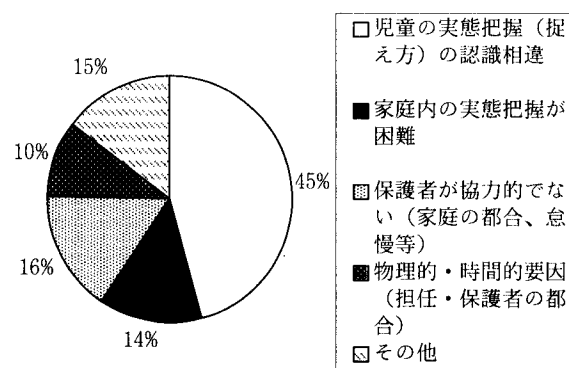
その結果、

- ① 児童生徒の実態把握(捉え方)の認識相違
例：保護者の願いと学級(学校)の方針の齟齬等
- ② 家庭内の実態把握が困難
例：家庭での問題に入っていけない等
- ③ 保護者が協力的でない(家庭の都合、怠慢等)
例：学級の話聞いてもらえない、連絡が一方通行等
- ④ 物理的・時間的要因(担任・保護者の都合)
例：双方に時間的余裕がない、話し合うための校内の体制が整っていない等
- ⑤ その他

以上のカテゴリーに分類することができました。

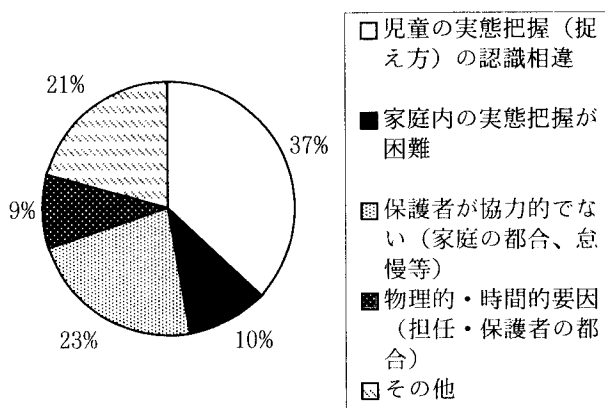
(3) 要素集計の結果

重要度第1位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 256)



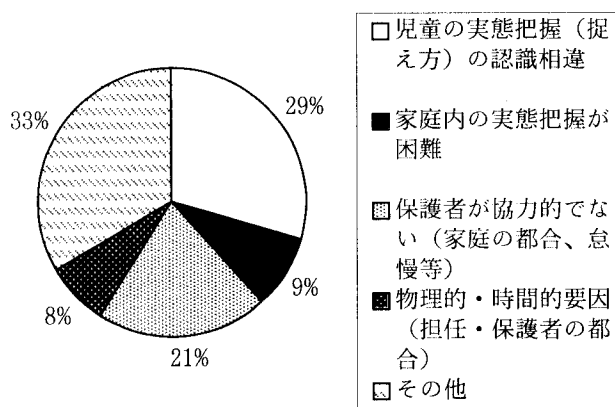
① 児童の実態把握（捉え方）の認識相違	117要素	45%
② 家庭内の実態把握が困難	35要素	14%
③ 保護者が協力的でない（家庭の都合、怠慢等）	41要素	16%
④ 物理的・時間的要因（担任・保護者の都合）	25要素	10%
⑤ その他	38要素	15%

重要度第2位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 182)



① 児童の実態把握（捉え方）の認識相違	68要素	37%
② 家庭内の実態把握が困難	19要素	10%
③ 保護者が協力的でない（家庭の都合、怠慢等）	42要素	23%
④ 物理的・時間的要因（担任・保護者の都合）	17要素	9%
⑤ その他	38要素	21%

重要度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 102)



① 児童の実態把握（捉え方）の認識相違	30要素	29%
② 家庭内の実態把握が困難	9要素	9%

③ 保護者が協力的でない（家庭の都合、怠慢等）	21要素	21%
④ 物理的・時間的要因（担任・保護者の都合）	8要素	8%
⑤ その他	34要素	33%

(4) 要素集計結果のまとめ

重要度第1位～第3位ともに、カテゴリー「児童の実態把握（捉え方）の認識相違」が要素数が最大でした。

続いてカテゴリー「保護者が協力的でない（家庭の都合・怠慢等）」カテゴリー「家庭内の実態把握が困難」「物理的・時間的要因（担任・保護者の都合）」の順番になっています。

重要度第1位～第3位を通じて、その他の要素が多かったありますが、それらの多くは、①人間関係のこと（保護者や担任が遠慮して言えない、信頼関係ができない等）や②担任の力量不足、③保護者の家庭内での多岐にわたる問題等です。

カテゴリー「児童の実態把握（捉え方）の認識相違」における具体的な記述内容の傾向は、①保護者との指導方向が一致しない、②児童の評価の違い、等でした。

カテゴリー「保護者が協力的でない（家庭の都合・怠慢等）」における具体的な記述内容の傾向は、①保護者の忙しさから情報が一方通行、②懇談会などへの不参加、等でした。

カテゴリー「家庭内の実態把握が困難」における具体的な記述内容の傾向は、①家庭内のプライベートなことには踏み込めない、②父親の話が聞けない、等でした。

カテゴリー「物理的・時間的要因（担任・保護者の都合）」における具体的な記述内容の傾向は、①保護者が自営業や共稼ぎのために時間的余裕がない、②教師自身の時間的余裕がない、等でした。

3. 部分考察

- ・半数以上の学級（学校）において、保護者との間に何らかの課題があるようです。
- ・その主たる要因は、子どものことに関する担任（学校）側と保護者の認識の相違でしたが、その背景には、指導方針、内容・方法、やそれらに関するいわゆるインフォームドコンセントの在り方等、学校教育の大きな課題が存在するようです。
- ・また、これらの問題に関しては保護者の側にも、共働きや両親どちらかの不在による時間的余裕のなさ等、家庭の事情による非協力、理解不足等の課題があります。
- ・カテゴリーに含まれない要素が多くありましたが、これらは障害がある児童個々の家庭内の問題やそこから生起する人間関係等、学校側がなかなか踏み込めない保護者の課題が多くあることを示しています。

<学校全体の視点から>

「通常級との交流活動の内容と話し合いの頻度」について

1. 設問について

本設問は、通常の学級（交流学級）との間において日常的に行われている交流活動について、その内容とそのため話し合いの頻度について、選択肢の中から回答するものです。

2. 結果

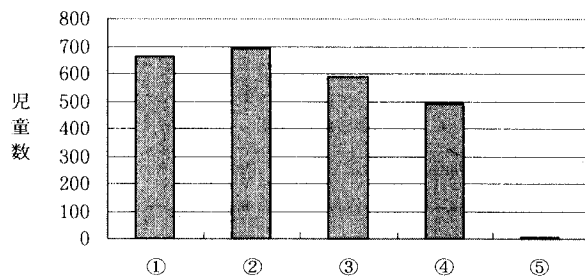
(1) 交流の内容

交流の内容に関する選択肢は、

- ① 同校の通常の学級と教科の交流を行っている
- ② 同校の通常の学級と日常の全校行事の交流を行っている
- ③ 同校の通常の学級と給食時間の交流を行っている
- ④ 同校の通常の学級と上記以外の交流を行っている
- ⑤ 同校の通常の学級とは交流を行っていない

以上ですが、複数回答です。

この結果は、以下のようになります。



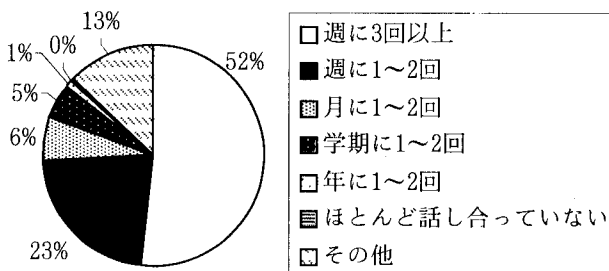
(2) 話し合いの頻度

話し合いの頻度に関する選択肢は、

- ① 週3回以上話し合いを行っている
- ② 週1～2回は話し合いを行っている
- ③ 月に1～2回は話し合いを行っている
- ④ 学期に1～2回は話し合いを行っている
- ⑤ 年に1～2回は話し合いを行っている
- ⑥ 通常学級の担任とは交流についてほとんど話し合っていない
- ⑦ その他

以上です。

この結果は、以下のようになります。



「肢体不自由特殊学級と交流対象通常学級担任との話し合いの内容」について

1. 設問について

本設問は、学校全体の視点から、肢体不自由特殊学級担任と交流対象通常学級担任との話し合いの内容について、頻度の高いものから順に上位3位までを自由記述形式で回答するものです。

2. 結果

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級アンケート回答校総数(448校)のうち、上記設問に関して、何らかの回答を行った学(級)校数の割合。

① 頻度第1位	432校(学級)	96%
② 頻度第2位	378校(学級)	84%
③ 頻度第3位	317校(学級)	71%

(2) 記述内容の要素

頻度第1位～第3位の記述内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。

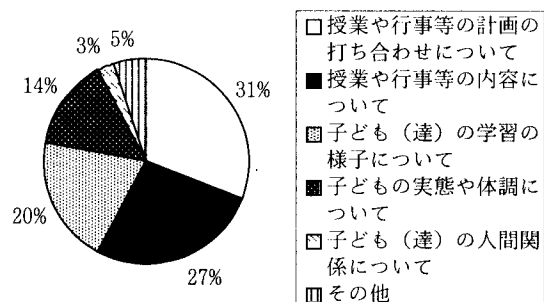
その結果、

- ① 授業や行事等の内容について
例：授業の内容・進め方、教科の進捗
- ② 授業や行事等の計画の打ち合わせについて
例：時間割の調整、行事の参加の仕方(形式)
- ③ 子ども(達)の学習の様子について
例：交流級での子どもの様子
- ④ 子どもの実態や体調について
例：健康面の情報交換、運動能力について
- ⑤ 子ども(達)の人間関係について
例：通常学級での友達関係
- ⑥ その他

以上のカテゴリーに分類することができました。

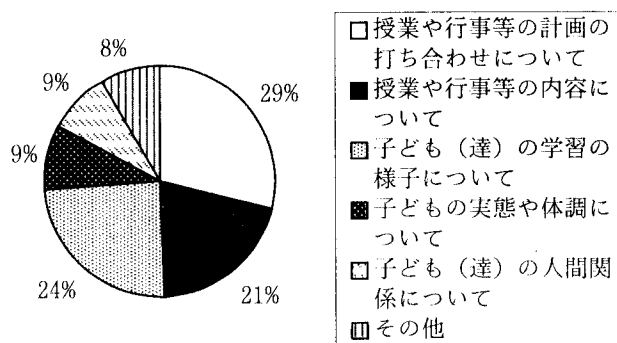
(3) 要素集計の結果

頻度第1位にランクされた各カテゴリー(要素総数 432)



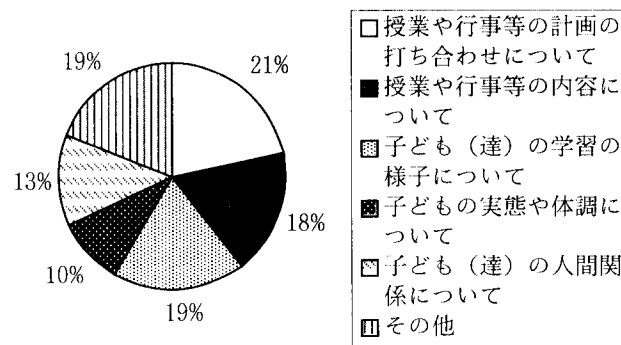
① 授業や行事等の計画の打ち合わせについて	133要素	31%
② 授業や行事等の内容について	117要素	27%
③ 子ども(達)の学習の様子について	86要素	20%
④ 子どもの実態や体調について	62要素	14%
⑤ 子ども(達)の人間関係について	12要素	3%
⑥ その他	22要素	5%

頻度第2位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 378)



① 授業や行事等の計画の打ち合わせについて	109要素	29%
② 授業や行事等の内容について	78要素	21%
③ 子ども(達)の学習の様子について	92要素	24%
④ 子どもの実態や体調について	35要素	9%
⑤ 子ども(達)の人間関係について	33要素	9%
⑥ その他	31要素	8%

頻度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 317)



① 授業や行事等の計画の打ち合わせについて	69要素	21%
② 授業や行事等の内容について	56要素	18%
③ 子ども(達)の学習の様子について	60要素	19%
④ 子どもの実態や体調について	31要素	10%
⑤ 子ども(達)の人間関係について	40要素	13%

⑥ その他 61要素 19%

(4) 要素集計結果のまとめ

頻度第1位では、カテゴリー「授業や行事等の計画の打ち合わせについて」「授業や行事等の内容について」「子ども(達)の学習の様子について」という順位でしたが、頻度第2位～3位ではカテゴリー「授業や行事等の計画の打ち合わせについて」「子ども(達)の学習の様子について」「授業や行事等の内容について」でした。

また、カテゴリー「子ども(達)の人間関係について」は、頻度第2位～3位において、増加しています。

「その他」は頻度第3位において要素数が大幅に増加していますが、それらの具体的な記述内容は、保護者の事柄が多く、例えば家庭での様子の情報交換や保護者からの要望等に関する話し合い、さらに通常級における担任の関わり方に関する話し合いが行われています。

3. 部分考察

- ・ほとんどの学級(学校)において、交流先通常学級の担任との話し合いが、何らかの形で行われています。それらの多くは、授業に関することや子ども(達)の様子のことです。
- ・しかしながら、交流先と当該学級の子どもたちを視野に入れた、具体的な人間関係に関する課題についての話し合いは、それほど行われてはいません。今後上記の話し合いの内容を踏まえ、もう一步踏み込んだ子どもたち全体の視野で人間関係のことを話し合う必要があるかと思われまます。

「上記話し合いがさらに充実するために必要なこと」について

1. 設問について

本設問は、学校全体の視点から、肢体不自由特殊学級担任と交流対象通常学級担任との話し合いがさらに充実したものとなるために必要なことを、重要度の高いものから順に上位3位までを自由記述形式で回答するものです。

2. 結果

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級アンケート回答校総数(448校)のうち、上記設問に関して、何らかの回答を行った学(級)校数の割合。

① 重要度第1位	371校(学級)	83%
② 重要度第2位	269校(学級)	60%
③ 重要度第3位	151校(学級)	34%

(2) 記述内容の要素

重要度第1位～第3位の記述内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。

その結果、

① 教師間の連携・協力、人間関係

例：担任同士の間で共通理解や支援の姿勢、意見交換ができる関係づくり、等

② 時間的な余裕

例：計画的な話し合いの時間の確保、等

③ 全校的な体制づくり

例：学年会・委員会(分掌部会)等の充実、担任の役割の明確化、等

④ 障害(児)理解

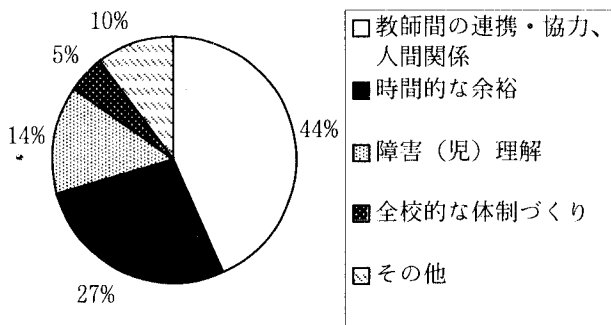
例：児童の実態把握、障害に関する理解、等

⑤ その他

以上のカテゴリーに分類することができました。

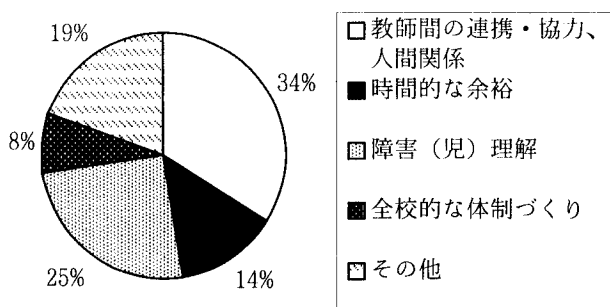
(3) 要素集計の結果

重要度第1位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 371)



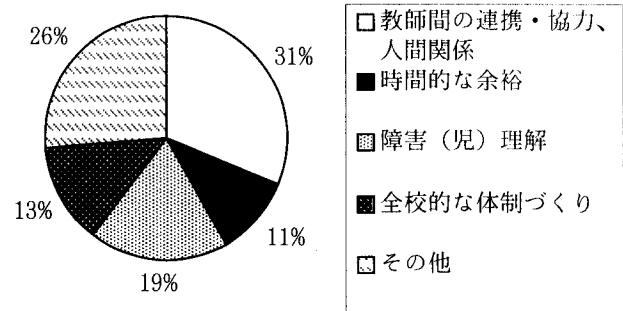
① 教師間の連携・協力、人間関係	161要素	44%
② 時間的な余裕	101要素	27%
③ 障害(児)理解	52要素	14%
④ 全校的な体制づくり	19要素	5%
⑤ その他	38要素	10%

重要度第2位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 269)



① 教師間の連携・協力、人間関係	31要素	34%
② 時間的な余裕	37要素	14%
③ 障害(児)理解	68要素	25%
④ 全校的な体制づくり	21要素	8%
⑤ その他	52要素	19%

重要度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 151)



① 教師間の連携・協力、人間関係	47要素	31%
② 時間的な余裕	16要素	11%
③ 障害(児)理解	28要素	19%
④ 全校的な体制づくり	20要素	13%
⑤ その他	40要素	26%

(4) 要素集計結果のまとめ

重要度第1位では、カテゴリー「教師間の連携・協力、人間関係」「時間的な余裕」「障害(児)理解」という順位でしたが、重要度第2位～3位では、カテゴリー「教師間の連携・協力、人間関係」「障害(児)理解」「時間的な余裕」でした。

また、「全体的な体制づくり」は、重要度の順位が下がるとともに要素数(%)とも増加しています。

「その他」は頻度第3位において要素の%が大幅に増加していますが、それらの具体的な記述内容は、①教職員(職員室)の席の配置(それぞれの担任が近接)、②保護者の理解が必要、③専門機関との連携、④日々の記録を取っておく、等の要素が多くありました。

3. 部分考察

- ・ 肢体不自由特殊学級と交流対象の通常学級担任との話し合い充実するために必要なことは、それぞれの教師間の連携・協力や人間関係の円滑さであることは言うまでもありません。しかしながら、それらの前提となる障害(児)の理解や物理的条件である時間的余裕について、今後どのように推進していくかが当面の課題と思われます。
- ・ 上記の課題を推進していくためには、全校的な体制づくりが必要ですが、重要度はまだ低い段階にとどまっています。

「全校児童との交わりを豊かにする工夫」について

1. 設問について

本設問は、交流級も含め、全校児童を対象として肢体不自由特殊学級が行っている交わりを豊かにするための工夫について、重要と思われるものから順に上位3位までを自由記述形式で回答するものです。

2. 結果

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級アンケート回答校総数(448校)のうち、上記設問に関して、何らかの回答を行った学(級)校数の割合。

① 重要度第1位	404校(学級)	90%
② 重要度第2位	322校(学級)	72%
③ 重要度第3位	239校(学級)	53%

(2) 記述内容の要素

重要度第1位～第3位の記述内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。

その結果、

① カリキュラムや教育課程上の工夫

例：学級の解放、行事への積極的参加、全校的交流を図る等

② 障害児(教育)の理解と認識を深める

例：障害に関する授業の展開、学級便りの配布等

③ 教師間の連携・協力を計る

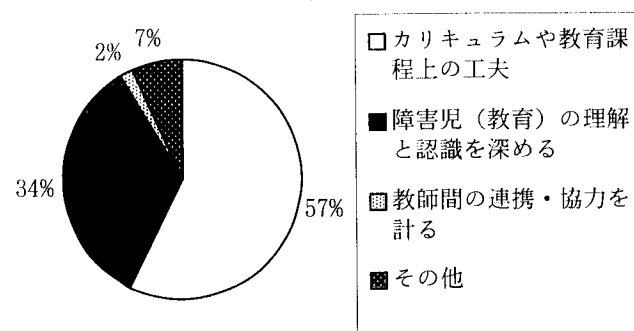
例：在籍児に対する全職員の共通理解を図る、

④ その他

以上のカテゴリーに分類することができました。

(3) 要素集計の結果

重要度第1位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 404)



① カリキュラムや教育課程上の工夫

231要素 57%

② 障害児(教育)の理解と認識を深める

138要素 34%

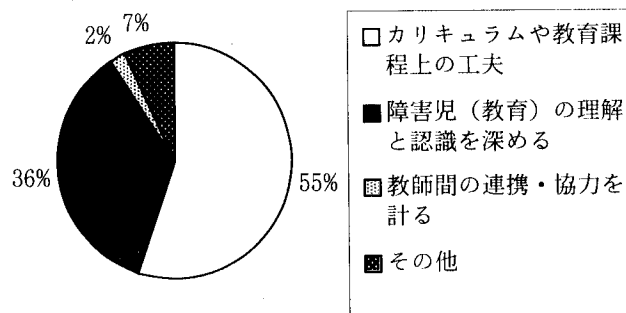
③ 教師間の連携・協力を計る

8要素 2%

④ その他

27要素 7%

重要度第2位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 322)



① カリキュラムや教育課程上の工夫

178要素 55%

② 障害児(教育)の理解と認識を深める

115要素 36%

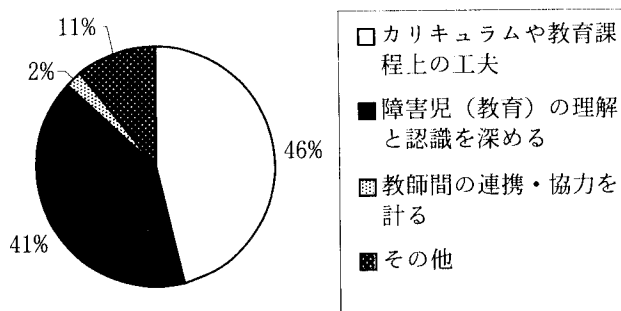
③ 教師間の連携・協力を計る

7要素 2%

④ その他

22要素 7%

重要度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 239)



① カリキュラムや教育課程上の工夫

110要素 46%

② 障害児(教育)の理解と認識を深める

98要素 41%

③ 教師間の連携・協力を計る

5要素 2%

④ その他

26要素 11%

(4) 要素集計結果のまとめ

重要度第1位～第3位において、ともにカテゴリー「カリキュラムや教育課程上の工夫」「障害児(教育)の理解と認識を深める」「教師間の連携・協力を計る」という順位で

したが、「カリキュラムや教育課程上の工夫」「障害児（教育）の理解と認識を深める」が圧倒的の要素数であったのに対し、「教師間の連携・協力を計る」は極めて少数でした。

「その他」は重要度第1位～3位においてそれぞれ7%、7%、11%ですが、要素の具体的記述内容は、①さまざまなチャリティー活動、②施設設備等の充実、③特殊学級児童に対する人間関係の指導や安全指導、④登校班での登校等が目立ちました。

カテゴリー「カリキュラムや教育課程上の工夫」における要素の具体的記述内容の傾向は、①全クラスとの交流や学校行事の参加、②縦割り班編制による活動への参加、③学級の解放等でした。

カテゴリー「障害児（教育）の理解と認識を深める」における要素の具体的記述内容の傾向は、①学級通信・ポスターの全校への配布、②学級活動の様子を全校的に発表する、③車椅子の体験学習会の開催等でした。

カテゴリー「教師間の連携・協力を計る」の要素数（%）は重要度第1位～3位ともに他のカテゴリーに比べ非常に少ない数値でした。このカテゴリーにおける要素の具体的記述内容の傾向は、①どの場面においても学級担任がパイプ役となる、②さまざまな教師に関わってもらう等でした。

3. 部分考察

- ・全校的な視野からは、やはりカリキュラムや教育課程上の工夫が行われていますが、その背景には、障害（児）の理解やその教育に関する理解を深めるといった目的があるようです。
- ・教師間の連携・協力を計るということについてはあまり重要度が高くなく、また、全校的な体制づくりに関する記述もあまりみられないことから、実際的な全校的体制づくりが十分に行われていないのではないかと考えられます。

「上記の工夫等がさらに充実するために必要なこと」について

1. 設問について

本設問は、交流級も含め、全校児童を対象として肢体不自由特殊学級が行っている交わりを豊かにするための工夫等が、さらに充実していくために必要なことから重要度順に上位3位まで自由記述形式で回答するものです。

2. 結果

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級が単独で設置されているアンケート回答校総数（448校）の内、上記設問に関して、何らかの回答を行った学（級）校数の割合。

① 重要度第1位	351校（学級）	78%
② 重要度第2位	261校（学級）	58%
③ 重要度第3位	172校（学級）	38%

(2) 記述内容の要素

重要度第1位～第3位の記述回答内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。

その結果、

① 指導者側のこと（指導的・人的側面）

<①に関する構成要素>

①-1 障害（児）の理解・啓発

①-2 体制づくり、連携・協力

①-3 指導上の工夫

② 子ども側のこと

例：通常学級の子どもへの指導、全校児童の意識向上等

③ 制度上のこと

例：指導者の増員・適正配置、予算等

④ 物理的・時間的なこと

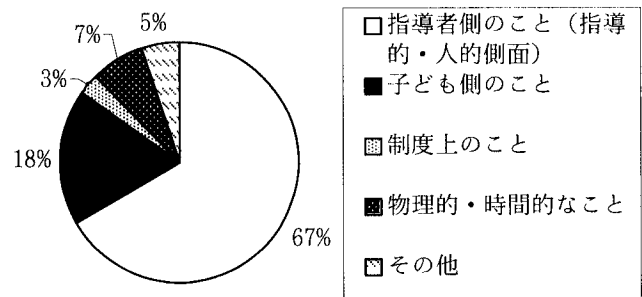
例：施設設備の充実、時間的にゆとり等

⑤ その他

以上のカテゴリーに分類することができました。

(3) 要素集計の結果

重要度第1位にランクされた各カテゴリー（要素総数 351）



① 指導者側のこと（指導的・人的側面）

234要素 67%

<①に関する構成要素>

①-1 障害（児）の理解・啓発

(97/234要素) (42%)

①-2 体制づくり、連携・協力

(38/234要素) (16%)

①-3 指導上の工夫

(99/234要素) (42%)

② 子ども側のこと

63要素 18%

③ 制度上のこと

11要素 3%

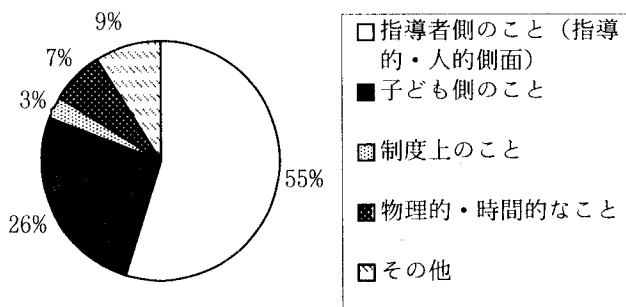
④ 物理的・時間的なこと

25要素 7%

⑤ その他

18要素 5%

重要度第2位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 261)

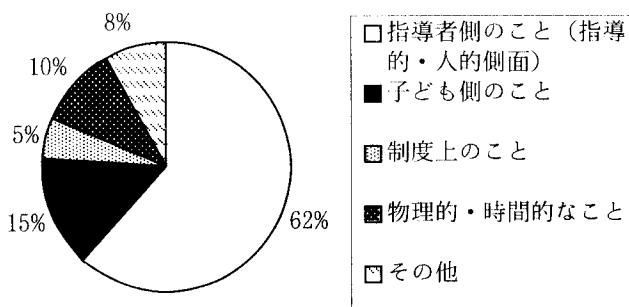


① 指導者側のこと (指導的・人的側面)
143要素 55%

<①に関する構成要素>

①-1 障害(児)の理解・啓発	(48/143要素)	(34%)
①-2 体制づくり、連携・協力	(27/143要素)	(19%)
①-3 指導上の工夫	(68/143要素)	(47%)
② 子ども側のこと	68要素	26%
③ 制度上のこと	8要素	3%
④ 物理的・時間的なこと	19要素	7%
⑤ その他	23要素	9%

重要度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 172)



① 指導者側のこと (指導的・人的側面)
106要素 62%

<①に関する構成要素>

①-1 障害(児)の理解・啓発	(29/106要素)	(27%)
①-2 体制づくり、連携・協力	(14/106要素)	(12%)
①-3 指導上の工夫	(63/106要素)	(59%)
② 子ども側のこと	25要素	15%
③ 制度上のこと	9要素	5%
④ 物理的・時間的なこと	18要素	10%
⑤ その他	14要素	8%

(4) 要素集計結果のまとめ

重要度ランク第1位～第3位まで「指導者側のこと (指導的・人的側面)」のカテゴリーが圧倒的多数を占めていました。このカテゴリーを構成している要素をさらに詳しく、

- ①-1 障害(児)の理解・啓発
- ①-2 体制づくり、連携・協力
- ①-3 指導上の工夫

以上のように分類しましたが、重要度第1位～第3位ともに要素数(カテゴリーに占める割合)は、「指導上の工夫」「障害(児)の理解・啓発」「体制づくり、連携・協力」という順番でした。

その他のカテゴリーである「子ども側のこと」「制度上のこと」「物理的・時間的なこと」については、重要度第1位～第3位ともに「指導者側のこと (指導的・人的側面)」について、「子ども側のこと」「物理的・時間的なこと」「制度上のこと」という順番でした。

カテゴリー「子ども側のこと」における具体的な要素の記述内容の傾向は、①通常学級の児童に障害(児)に関する理解、②子ども同士が意志疎通を図れること、等でした。

カテゴリー「物理的・時間的なこと」における具体的な要素の記述内容の傾向は、①のびのび交流ができる安全な場所(施設設備の充実)、②教師側のゆとりある時間確保、等でした。

カテゴリー「制度上のこと」における具体的な要素の記述内容の傾向は、①教員定数の改善、②ボランティアや介助員の配置、等でした。

「その他」では、①十分な研修、②保護者の理解と協力、③地域の理解と協力、等が取り上げられていました。

3. 部分考察

- ・全校的な視野からもやはり、指導者側の指導面での工夫や努力が必要と認識されていますが、指導者ばかりではなく子ども側(主として通常学級在籍児)もそれらの対象となっています。
- ・障害の理解やそのための啓発活動の重要性も強調されていますが、それらの対象は通常教育の教師や児童であることは言うまでもありません。
- ・指導者側の必要なこととして、全校的な体制づくりが挙げられていましたが、他の2構成要素である「指導上の工夫」「障害(児)の理解・啓発」に次ぐものでした。このことは、学校全体の組織体制が十分であるが故に、具体的な事柄である「指導上の工夫」「障害(児)の理解・啓発」に関する活動が必要とされているのか、あるいは単純に重要とは認識されていないのか、推測は困難です。

「全職員の全校的な規模でのシステムづくりや意識の改革に関する取り組み」について

1. 設問について

本設問は、児童同士の交わりを豊かにするために、全職員が全校的な規模で行っているシステム作りや意識の改革に関する取り組みについて、重要と思われるものから順に上位3位までを自由記述形式で回答するものです。

2. 結果

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級アンケート回答校総数(448校)のうち、上記設問に関して、何らかの回答を行った学(級)校数の割合。

① 重要度第1位	360校(学級)	80%
② 重要度第2位	258校(学級)	58%
③ 重要度第3位	122校(学級)	27%

(2) 記述内容の要素

重要度第1位～第3位の記述内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。

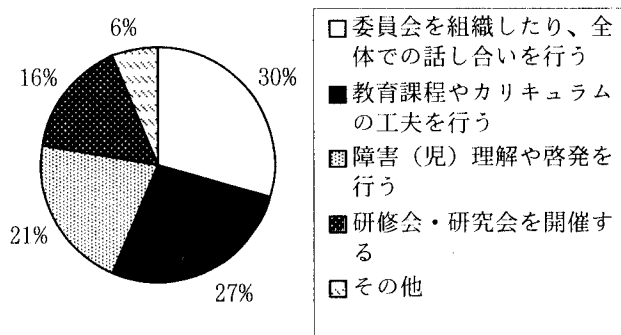
その結果、

- ① 委員会を組織したり、全体での話し合いを行う
- ② 研修会・研究会等を開催する
- ③ 教育課程やカリキュラムの工夫を行う
- ④ 障害(児)理解や啓発を行う
- ⑤ その他

以上のカテゴリーに分類することができました。

(3) 要素集計の結果

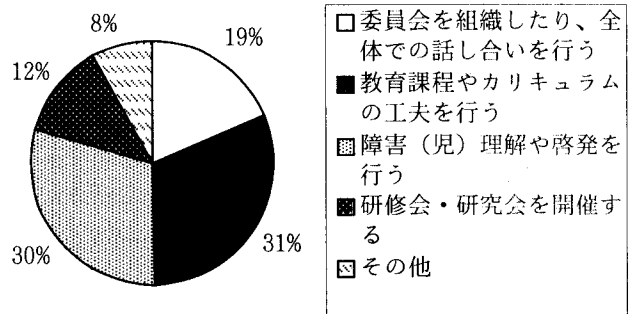
重要度第1位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 360)



- ① 委員会を組織したり、全体での話し合いを行う
106要素 30%
- ② 教育課程やカリキュラムの工夫を行う
97要素 27%

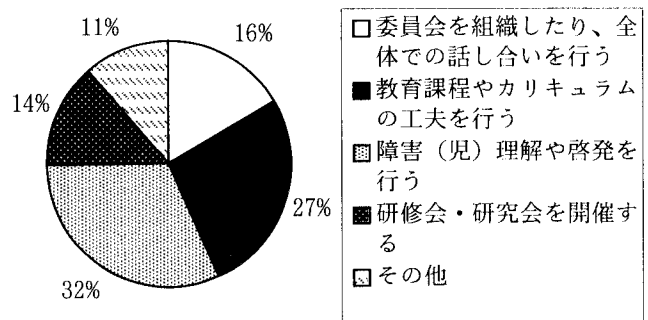
③ 障害(児)理解や啓発を行う	77要素	21%
④ 研修会・研究会を開催する	57要素	16%
⑤ その他	23要素	6%

重要度第2位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 258)



- ① 委員会を組織したり、全体での話し合いを行う
48要素 19%
- ② 教育課程やカリキュラムの工夫を行う
80要素 31%
- ③ 障害(児)理解や啓発を行う
77要素 30%
- ④ 研修会・研究会を開催する
32要素 12%
- ⑤ その他
21要素 8%

重要度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 122)



- ① 委員会を組織したり、全体での話し合いを行う
20要素 16%
- ② 教育課程やカリキュラムの工夫を行う
33要素 27%
- ③ 障害(児)理解や啓発を行う
38要素 32%
- ④ 研修会・研究会を開催する
17要素 14%
- ⑤ その他
14要素 11%

(4) 要素集計結果のまとめ

重要度第1位では、カテゴリー「委員会を組織したり、全体での話し合いを行う」「教育課程やカリキュラムの工

夫を行う」「障害(児)理解や啓発を行う」「研修会・研究会を開催する」でしたが、以下重要度第2位では、カテゴリー「教育課程やカリキュラムの工夫を行う」「障害(児)理解や啓発を行う」「委員会を組織したり、全体での話し合いを行う」「研修会・研究会を開催する」、重要度第3位では、カテゴリー「障害(児)理解や啓発を行う」「教育課程やカリキュラムの工夫を行う」「委員会を組織したり、全体での話し合いを行う」「研修会・研究会を開催する」というように、重要度の順位によって上位のカテゴリーがそれぞれ入れ替わっています。

「その他」における具体的な記述内容は、①T.Tの授業や教育相談活動を行っている、②特殊学級の取り組みに教職員が参加する、③避難訓練の体制づくり、④特殊学級教室を学校の中心に配置する、等がありました。

カテゴリー「教育課程やカリキュラムの工夫を行う」における要素の具体的な記述内容の傾向は、①縦割り班活動を行っている、②特殊学級の授業公開を行っている、③教師が一人一回特殊学級の授業を担当する、等でした。

カテゴリー「委員会を組織したり、全体での話し合いを行う」における要素の具体的な記述内容の傾向は、①障害児教育に関する委員会(部会)を設置している、②校内就学指導委員会を設置している、③交流委員会を設置している、④児童を語る会を全職員でもつ、等でした。

カテゴリー「障害(児)理解や啓発を行う」における要素の具体的な記述内容の傾向は、①職員会議で特殊学級や児童の様子を報告する、②特殊学級から職員向けの通信の発行を行う、等でした。

カテゴリー「研修会・研究会を開催する」における要素の具体的な記述内容の傾向は、①交流教育や障害児教育や事例研究発表等を校内で行う、②講師を招き職員研修を行う、③地域の人材を招き研修を行う、等でした。

3. 部分考察

・本設問に関して、重要度第1位に何らかの回答を行った学級(学校)は、約80%にのぼりますが、重要度が下がる毎に回答数が減少しています(第2位58%、第3位27%)。また、カテゴリーは「委員会を組織したり、全体での話し合いを行う」「教育課程やカリキュラムの工夫を行う」「障害(児)理解や啓発を行う」「研修会・研究会を開催する」「その他」となっていますが、それぞれが単独でかつ単発的に行われているのではないかと推測されます。

「肢体不自由特殊学級側から、通常級の教師に対する要望や意見」について

1. 設問について

本設問は、児童同士の交わりを豊かにするために、肢体不自由特殊学級側から、通常級の教師に対する要望や意見について、重要と思われるものから順に上位3位までを自由記述形式で回答するものです。

2. 結果

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級アンケート回答校総数(448校)のうち、上記設問に関して、何らかの回答を行った学(級)校数の割合。

① 重要度第1位	360校(学級)	80%
② 重要度第2位	218校(学級)	49%
③ 重要度第3位	121校(学級)	27%

(2) 記述内容の要素

重要度第1位～第3位の記述内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。

その結果、

① 積極的な協力

- ・本人に対する関わり・配慮
- ・担当クラス(児童)への関わり
- ・特殊学級(担任)との連携促進

② 障害(児)、特殊教育理解

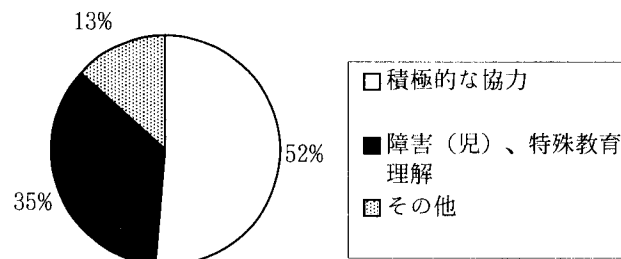
③ その他

以上のカテゴリーに分類することができました。

(3) 要素集計の結果

重要度第1位にランクされた各カテゴリー

(要素総数 320)



① 積極的な協力

164要素 51%

- ・本人に対する関わり・配慮

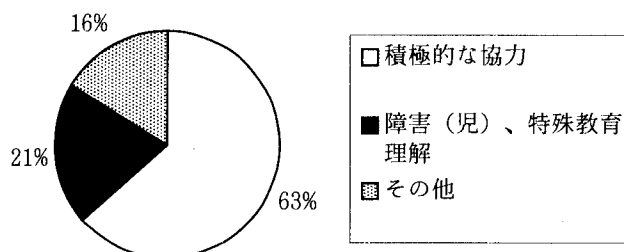
(58/164要素 35%)

- ・担当クラス(児童)への関わり

(45/164要素 28%)

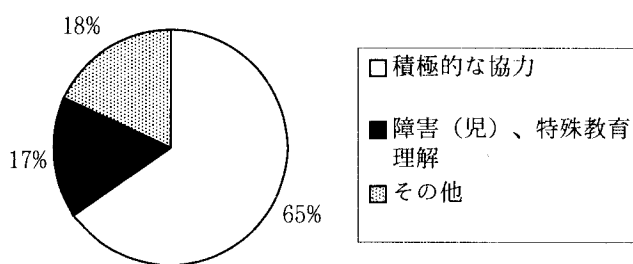
・特殊学級（担任）との連携促進	(61/164要素)	37%
② 障害（児）、特殊教育理解	113要素	35%
③ その他	49要素	14%

重要度第2位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 218)



① 積極的な協力	138要素	63%
・本人に対する関わり・配慮	(56/138要素)	41%
・担当クラス（児童）への関わり	(51/138要素)	37%
・特殊学級（担任）との連携促進	(31/138要素)	22%
② 障害（児）、特殊教育理解	45要素	21%
③ その他	35要素	16%

重要度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 121)



① 積極的な協力	79要素	65%
・本人に対する関わり・配慮	(37/79要素)	47%
・担当クラス（児童）への関わり	(24/79要素)	30%
・特殊学級（担任）との連携促進	(18/79要素)	23%
② 障害（児）、特殊教育理解	20要素	17%
③ その他	22要素	18%

(4) 要素集計結果のまとめ

本回答要素は、大きく「積極的な協力」と「障害（児）、

特殊教育理解」の二つのカテゴリーに分類されましたが、重要度ランク第1位～第3位まで「積極的な協力」のカテゴリーが圧倒的多数を占めていました。このカテゴリーを構成している要素をさらに詳しく、

①-1 本人に対する関わり・配慮

例：特別扱いをしない、体調や障害の状態への配慮、本人への積極的関わり等

①-2 担当クラス（児童）への関わり

例：通常学級の児童に対する啓発、仲間づくり指導等

①-3 特殊学級（担任）との連携促進

例：サポート意識の向上、意志疎通の向上、特殊学級への積極的来級

以上のように分類しましたが、重要度第1位では「特殊学級（担任）との連携促進」「本人に対する関わり・配慮」「担当クラス（児童）への関わり」であったものの、重要度2～第3位ではともに、「本人に対する関わり・配慮」「担当クラス（児童）への関わり」「特殊学級（担任）との連携促進」という順位でした。

重要度のランクが下位になるほど、カテゴリー「障害（児）、特殊教育理解」の割合が減少し、それとは対照的にカテゴリー「積極的な協力」の割合が増加していました。

「その他」における具体的な要素の記述内容は、①担任のリーダーシップの必要性、②一回は特殊学級を経験してみる、③人権感覚の向上、④介助員の導入、⑤学校全体の環境づくり、⑥全職員の自覚の必要性、等がありました。

3. 部分考察

・通常級の教師には、もっと積極的な関わり、そして障害（児）や特殊教育に関する理解をしてほしいとの要望が圧倒的でした。また、重要度第1位の回答校が80%であったのに対し、重要度が低くなるにしたがい、その回答校が減少している（第2位49%、第3位27%）という状況から見ても、通常学級の教師側に対する主たるものは上記2つの要望である、と推測されます。

「通常級の教師側から、肢体不自由特殊学級（担任）側に対する要望や意見」について

1. 設問について

本設問は、児童同士の交わりを豊かにするために、通常級の教師側から、肢体不自由特殊学級（担任）に対する要望や意見について、重要と思われるものから順に上位3位までを自由記述形式で回答するものです。

2. 結果

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級アンケート回答校総数（448校）

のうち、上記設問に関して、何らかの回答を行った学（級）校数の割合。

① 重要度第1位	220校（学級）	49%
② 重要度第2位	119校（学級）	27%
③ 重要度第3位	75校（学級）	17%

(2) 記述内容の要素

重要度第1位～第3位の記述内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。

その結果、

① 特殊学級（特殊教育）に関する情報提供

例：児童の障害についての情報提供、特殊学級での様子の紹介等

② 連携・協力への積極性

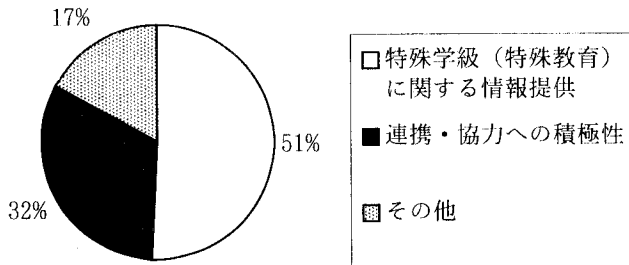
例：連携・協力できる関係づくり、通常学級へも関わる、校内活動への参加等

③ その他

以上のカテゴリーに分類することができました。

(3) 要素集計の結果

重要度第1位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 220)



① 特殊学級（特殊教育）に関する情報提供

112要素 51%

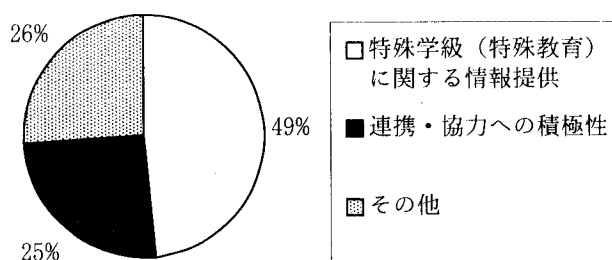
② 連携・協力への積極性

71要素 32%

③ その他

37要素 17%

重要度第2位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 119)



① 特殊学級（特殊教育）に関する情報提供

58要素 49%

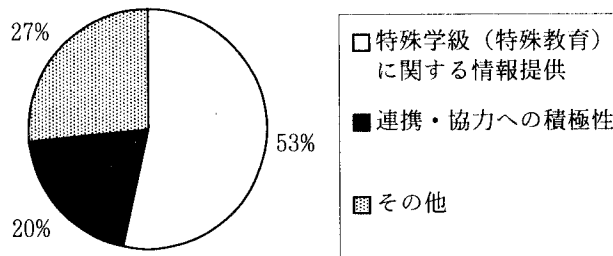
② 連携・協力への積極性

30要素 25%

③ その他

31要素 26%

重要度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 75)



① 特殊学級（特殊教育）に関する情報提供

40要素 53%

② 連携・協力への積極性

15要素 20%

③ その他

20要素 27%

(4) 要素集計結果のまとめ

本回答要素は、大きく「特殊学級（特殊教育）に関する情報提供」と「連携・協力への積極性」の二つのカテゴリーに分類されましたが、重要度第1位～第3位まで「特殊学級（特殊教育）に関する情報提供」のカテゴリーが圧倒的多数を占めていました。

「その他」の要素は、重要度第2位～3位において多数となっていますが、それらの内容は多岐にわたっています。具体的な要素の記述内容（一部）としては、①全体指導の場合の安全確保は特殊学級担任が行う、②一対一の指導体制がうらやましい、③通常学級の活動にそぐわない場合の交流に疑問（交流の目的を明確に）、④通常学級児童の学ぶ権利の確保、等でした。

カテゴリー「特殊学級（特殊教育）に関する情報提供」における具体的な記述内容は、①児童の実態・状況について理解したい、②担当クラスの児童とどのように関わらせてよいか知りたい、③本人に対する配慮や対応の仕方が知りたい、④児童の願いを教えてほしい、等でした。

カテゴリー「連携・協力への積極性」における具体的な記述内容は、①特殊学級を主張しすぎないように、②サポートの依頼を気軽に行ってほしい、③通常学級の授業にも担任が積極的に参加してほしい、④より緊密な連携を望む、⑤障害児を囲い込まない、等でした。

3. 部分考察

・回答学級（校）が他の設問に比べて極端に低かったのは、間接（伝聞）的な回答趣旨であったことによる、困難性

があったと推測されます。

- ・通常学級の教師も連携協力の意志があり、そのために特殊教育に関する情報を望んでいるということがうかがえます。

「肢体不自由特殊学級に在籍する児童の保護者の要望や意見」について

1. 設問について

本設問は、学校全体の児童や教師との豊かな交わりを進めていく活動に対して、肢体不自由特殊学級に在籍する児童の保護者からはどのような要望や意見があるか、重要と思われるものから順に上位3位までを自由記述形式で回答するものです。

2. 結果

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級アンケート回答校総数(448校)のうち、上記設問に関して、何らかの回答を行った学(級)校数の割合。

① 重要度第1位	396校(学級)	88%
② 重要度第2位	273校(学級)	61%
③ 重要度第3位	158校(学級)	35%

(2) 記述内容の要素

重要度第1位～第3位の記述内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。

その結果、

① 健常児との交わりの促進に関するもの

例：なるべく通常学級で学習をしてほしい、みんなと同じ学校生活をさせたい等

② 教師(学校)の指導や関わりに関するもの

例：安全面での配慮をしてほしい、本人の能力を配慮した指導を望む

③ 施設設備の充実にに関するもの

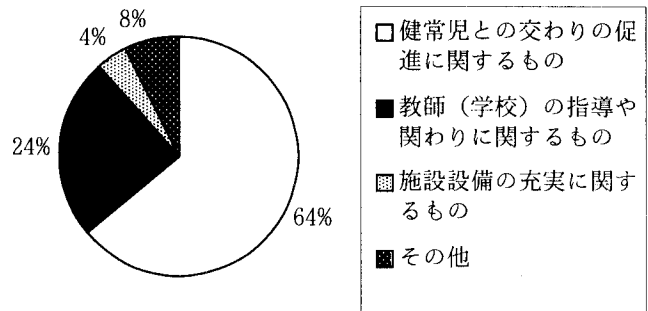
例：エレベータの設置を望む、交流級を近くに配置してほしい等

④ その他

以上のカテゴリーに分類することができました。

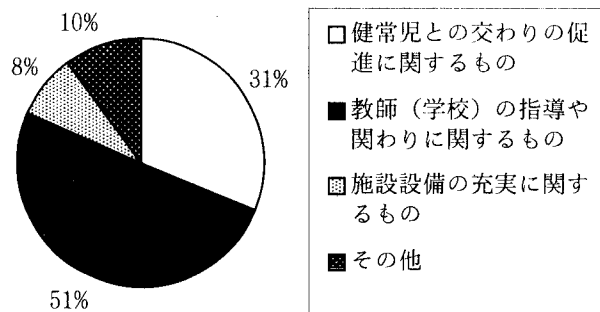
(3) 要素集計の結果

重要度第1位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 396)



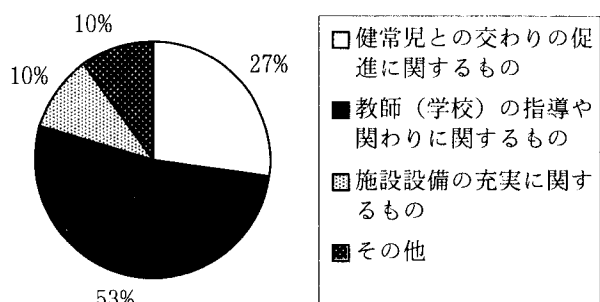
① 健常児との交わりの促進に関するもの	253要素	64%
② 教師(学校)の指導や関わりに関するもの	97要素	24%
③ 施設設備の充実にに関するもの	16要素	4%
④ その他	30要素	8%

重要度第2位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 273)



① 健常児との交わりの促進に関するもの	85要素	31%
② 教師(学校)の指導や関わりに関するもの	138要素	51%
③ 施設設備の充実にに関するもの	23要素	8%
④ その他	27要素	10%

重要度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 158)



① 健全児との交わりの促進に関するもの	43要素	27%
② 教師(学校)の指導や関わりに関するもの	83要素	53%
③ 施設設備の充実にに関するもの	16要素	10%
④ その他	16要素	10%

(4) 要素集計結果のまとめ

重要度第1位では、カテゴリー「健全児との交わりの促進に関するもの」の要素数が、他のカテゴリー「教師(学校)の指導や関わりに関するもの」「施設設備の充実にに関するもの」「その他」を大きく上回っていました。

重要度第2位～3位では、カテゴリー「教師(学校)の指導や関わりに関するもの」の要素数が他のカテゴリーを大きく上回っていました。

カテゴリー「施設設備の充実にに関するもの」の要素の全体に占める割合は、重要度第1位～第3位において、8%～10%程度でした。

「その他」の要素の具体的記述内容は、①保護種からの感謝のことば、②社会生活における地域での受け入れの充実を願う、③保護者に対する障害に関する理解や啓蒙を望む、④指導者数の充実、⑤友達がほしい、等でした。

カテゴリー「健全児との交わりの促進に関するもの」における要素の具体的記述内容の傾向は、圧倒的に学校(教育)活動において通常学級や通常学級の児童との交流を望むものが多く、しかも「できるだけ～してほしい」という表現が多くありました。

カテゴリー「教師(学校)の指導や関わりに関するもの」における要素の具体的記述内容は多岐にわたっていましたが、①児童本人の障害に応じた関わりをしてほしい、②人間関係を豊かにする関わりをしてほしい、③いろいろな体験をさせてほしい、④人権(プライバシーに関わること)に配慮してほしい、⑤学力をつけさせてほしい、⑥他の児童・教職員に対して子どもの障害理解をしてほしい、⑦無理はさせないでほしい、⑧連絡を詳細にしてほしい、等の要望や意見がありました。

3. 部分考察

・保護者は圧倒的に通常学級の児童との交わりを望んでいる、と担任に対して要望しています。そのための教師(学校)側の努力や工夫も望んでいる、と担任に対して要望していることがうかがえます。

「通常の学級に在籍する児童の保護者の要望や意見」について

1. 設問について

本設問は、学校全体の児童や教師との豊かな交わりを進めていく活動に対して、通常の学級に在籍する児童の保護者からはどのような要望や意見があるか、重要と思われるものから順に上位3位までを自由記述形式で回答するものです。

2. 結果

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級アンケート回答校総数(448校)のうち、上記設問に関して、何らかの回答を行った学(級)校数の割合。

① 重要度第1位	188校(学級)	42%
② 重要度第2位	95校(学級)	21%
③ 重要度第3位	46校(学級)	9%

(2) 記述内容の要素

重要度第1位～第3位の記述内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。

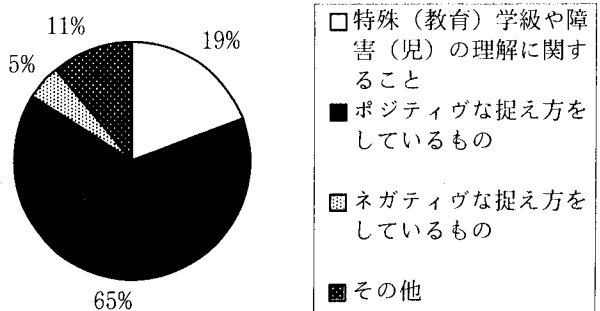
その結果、

- ① 特殊(教育)学級や障害(児)の理解に関すること
例：特殊学級児童の様子を知りたい、特殊学級についてもっと知りたい等
- ② ポジティブな捉え方をしているもの
例：我が子のためになる、交流の大切さを感じる等
- ③ ネガティブな捉え方をしているもの
例：学習の進度が遅れてほしくない、交流の意義を説明してほしい等
- ④ その他

以上のカテゴリーに分類することができました。

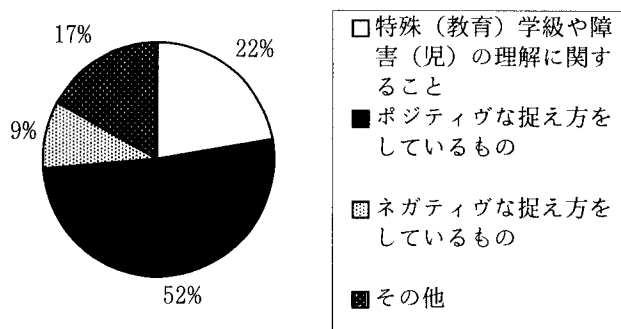
(3) 要素集計の結果

重要度第1位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 188)



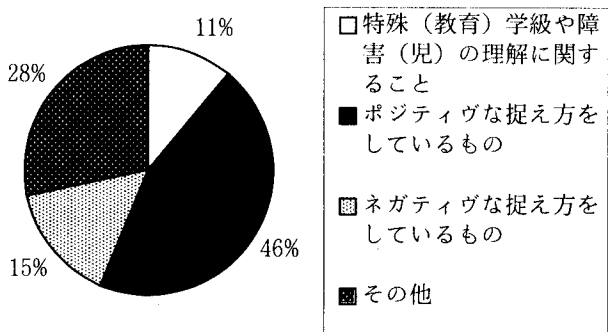
① 特殊（教育）学級や障害（児）の理解に関すること	36要素	19%
② ポジティブな捉え方をしているもの	122要素	65%
③ ネガティブな捉え方をしているもの	9要素	5%
④ その他	21要素	11%

重要度第2位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 95)



① 特殊（教育）学級や障害（児）の理解に関すること	21要素	22%
② ポジティブな捉え方をしているもの	49要素	52%
③ ネガティブな捉え方をしているもの	9要素	9%
④ その他	16要素	17%

重要度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 46)



① 特殊（教育）学級や障害（児）の理解に関すること	5要素	11%
② ポジティブな捉え方をしているもの	21要素	46%
③ ネガティブな捉え方をしているもの	7要素	15%
④ その他	13要素	28%

(4) 要素集計結果のまとめ

重要度第1位～第3位において、学校における児童や教師との豊かな交わりを進めていく活動に対して、カテゴリー「ポジティブ（好意的・積極的）に捉えているもの」の要素数が多くありました。とりわけ、重要度第1位～第2位では、それぞれの回答要素数全体の65%、52%と過半数を占めていました。

カテゴリー「特殊（教育）学級や障害（児）の理解に関すること」の要素数は、重要度第1位～第2位において、上記カテゴリー「ポジティブ（好意的・積極的）に捉えているもの」に次いで、多くありました。

カテゴリー「ネガティブな捉え方をしているもの」の要素数は、重要度第1位～第3位を通じて極めて少なかったものの、全体要素数に対する割合が重要度のランクが低くなるにつれ、高くなっていました。

「その他」の要素の具体的記述内容は、①保護者向けの研修（障害理解とも関連性あり）の必要性がある、②施設設備の充実（ポジティブな捉え方が前提となっているが）、③安全面での配慮、④通常学級にいる特別なニーズを持った子供の支援をどのようにするか、等の要望や意見がありました。

カテゴリー「ポジティブ（好意的・積極的）に捉えているもの」の要素に関する具体的記述内容の傾向は、①保護者の子どもにとって人間性を育てるために良いと評価している②、保護者自身がそのような活動を当然のことと評価している、③そのような活動を積極的に進めるよう学校に対しさまざまな提案を行う、というものでした。

カテゴリー「ネガティブな捉え方をしているもの」の要素に関する具体的記述内容の傾向は、①交流を行っているクラスの学習進度に関する不安、②特殊学級学在籍児に対して通常級在籍児が迷惑をかけないか（安全面・心理面）という不安、③交流に関する意義を明確に示してほしい、という要望や意見等でした。

3. 部分考察

- ・回答学級（校）が少なかったのは（重要度第1位42%、第2位21%第3位9%）、本設問が間接（伝聞）的回答趣旨であったこと、と思われます。
- ・障害がある子どもたちとの交わりについて、ほとんどの保護者は積極的に捉えている、そして、そのための情報提供も望んでいる、と担任によって理解されています。
- ・積極的ではない保護者においては、反対ではなく、まず不安が先に立つ、と理解されているようです。

「地域の機関や人々と学校との関わり」について

1. 設問について

本設問は、当該校が地域の人的社会的リソースとの交流を、交流先最大5カ所までについて、「どこ(だれ)と」「どのように(内容・方法)」「どれほどの頻度で」行っているか、それぞれ回答するものです。

2. 結果

第1欄目に何らかの形で回答のあった学級(学校)数、すなわち、本設問に回答した学級(学校)数は、254学級(校)でした。したがって、本設問の回答率は、57%(254/448)となります。

(1) 「どこ(だれ)と」に関して

交流先 総件数 492件

したがって、設問に回答のあった学級(学校)では、1学級(校)平均約2カ所(1.9:254/492)と交流を行っていることとなります。

また、本設問に対する記述内容の要素は、

1. 地域の個人

例：地域に住む人材(お年寄り、外国人、スポーツ選手、保護者)等

2. 地域の団体

例：老人施設、病院、公的機関(教育委員会、公立病院、社会福祉協議会等)等

3. 地域の学校

例：小中学校、特殊教育諸学校、幼稚園等

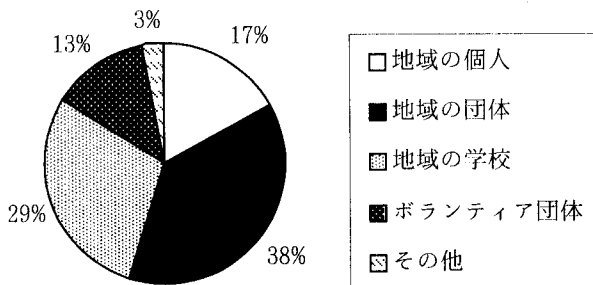
4. ボランティア団体

例：スポーツクラブ、趣味の会等

5. その他(固有名詞等で判断が困難であったもの)

以上のカテゴリーに分類することができました。

それぞれのカテゴリーが全体に占める割合は、以下の通りです。



(2) 「どのように」に関して

本設問に対する記述内容の要素は、

1. ボランティア活動を一緒に

例：ボランティア活動による、余暇活動(餅つき、ス

ポーツ、ゲーム)等への参加

2. 学校や教育委員会等公的機関主催による余暇活動

例：リンゴ狩り、スポーツ大会、ゲーム、夏祭り等への参加

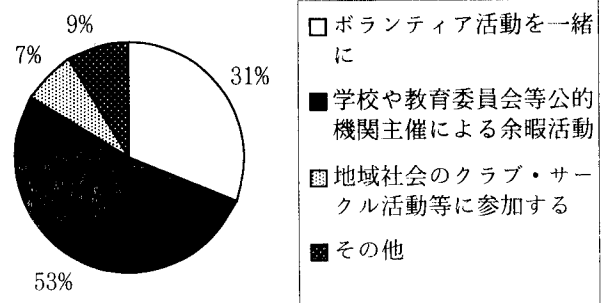
3. 地域社会のクラブ・サークル活動等に参加する

例：音楽サークル、盲導犬サークル、手話クラブ、和太鼓クラブ等

4. その他(内容から判断が困難であったもの)

以上のカテゴリーに分類することができました。

それぞれのカテゴリーが全体に占める割合は、以下の通りです。



(3) どれほどの頻度で

本設問に対する記述内容の要素を、頻度の多いものから、

1. 月数回以上

2. 月1回または学期に数回 程度

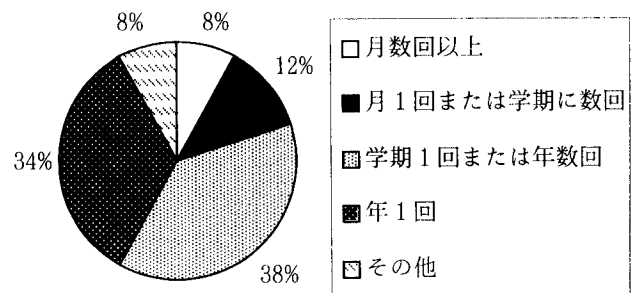
3. 学期1回または年数回 程度

4. 年1回 程度

5. その他(随時、不定期、学年によって異なる等の記述)

以上のようなカテゴリーに分類しました。

それぞれのカテゴリーが全体に占める割合は、以下の通りです。



3. 要素集計結果のまとめ

(1) 「どこ(だれ)と」に関して

地域の公共的機関(教育委員会、公立病院、社会福祉協議会、老人施設等)や地域の他の学校との交流が多くありました。個人やボランティア団体との交流は少ないようです。

(2)「どのようにして」に関して

公的な機関が主催したり、他の学校が主催する行事への参加が多くありました。地域社会におけるクラブやサークルの活動への参加は少ないようです。

(3)「どれほどの頻度で」に関して

年に数回、年に1回という頻度が多く、週に数回あるいはほぼ毎日という頻度での交流は数えるほどでした。

4. 部分考察

地域社会との交流を何らかの形で行っていると回答した学校(学級)は、60%弱であり、行っている学校(学級)が対象としている相手の平均は約2カ所でした。この数値が多いか少ないかの判断はできませんが、教育委員会や教育機関によるいわゆる公的な行事への参加という形式が多く、さらに地域との交流の促進を考える場合、例えば、もっと地域を構成している団体や個人との交流を活発に行なうべく、学校が積極的に働きかける余地があるように思われます。

Ⅲ 調査の結果

Ⅳ—2 人と人との交わりを豊かにする工夫等について

(中学校の部)

Ⅳ-2 人と人との交わりを豊かにする工夫等について（中学校の部）

<特殊学級内の視点から>

「教師と生徒あるいは生徒同士のつながりを豊かにするための工夫等」について

1. 設問について

本設問は、肢体不自由特殊学級が単独で設置されている場合と、その他の特殊学級が併設されている場合に分類し、それぞれ現在行われている上記「教師と生徒あるいは生徒同士のつながりを豊かにするための工夫等」について重要と思われるものから順に上位3位まで自由記述形式で回答するものです。

2. 結果

— 肢体不自由特殊学級が単独で設置されている場合 —

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級が単独で設置されているアンケート回答校総数(42校)の内、上記設問に関して、何らかの回答を行った学(級)校数の割合。

① 重要度第1位	60校(学級)	143%
② 重要度第2位	56校(学級)	133%
③ 重要度第3位	47校(学級)	112%

※ 上記回答率が100%を上回っている理由として、他の障害種別特殊学級併設校の回答も混入されている可能性が考えられます。

そのため、本設問に関する結果は真の状況を表現しているとは言えません。

(2) 記述内容の要素

重要度第1位～第3位の記述回答内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。すなわち、上記それぞれの重要度順位におけるアンケート回答校総数＝記述回答(要素)総数です。

その結果、それぞれの要素は、

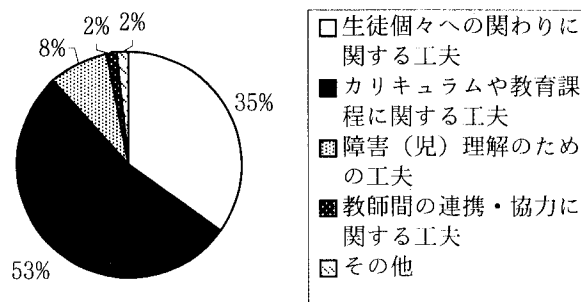
- ① 生徒個々への関わりに関する工夫
例：会話やスキンシップ等
- ② カリキュラムや教育課程に関する工夫
例：通常級との交流推進、特殊学級の解放等
- ③ 障害(児)理解のための工夫
例：特殊学級からの情報発信等
- ④ 教師間の連携・協力に関する工夫
例：交流級担任との連絡調整や話し合い等
- ⑤ その他

以上のカテゴリーに分類することができました。

※ このカテゴリー分類は他の障害種別特殊学級が併設されている肢体不自由特殊学級の場合も同様です。

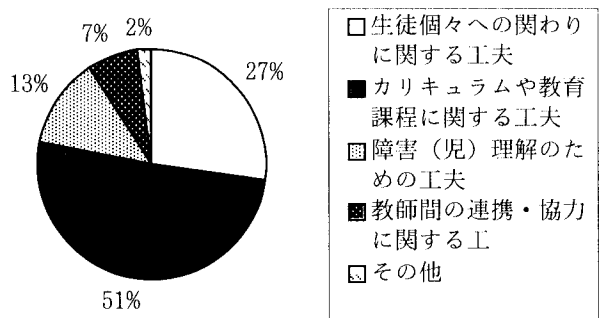
(3) 要素集計の結果

重要度第1位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 60)



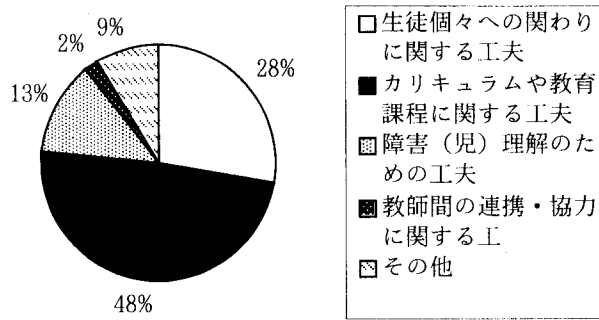
- ① 生徒個々への関わりに関する工夫 21要素 35%
- ② カリキュラムや教育課程に関する工夫 32要素 53%
- ③ 障害(児)理解のための工夫 5要素 8%
- ④ 教師間の連携・協力に関する工夫 1要素 2%
- ⑤ その他 1要素 2%

重要度第2位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 56)



- ① 生徒個々への関わりに関する工夫 15要素 27%
- ② カリキュラムや教育課程に関する工夫 28要素 50%
- ③ 障害(児)理解のための工夫 7要素 13%
- ④ 教師間の連携・協力に関する工夫 4要素 8%
- ⑤ その他 1要素 2%

重要度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 47)



- ① 生徒個々への関わりに関する工夫 13要素 28%
- ② カリキュラムや教育課程に関する工夫 23要素 49%
- ③ 障害(児)理解のための工夫 6要素 13%
- ④ 教師間の連携・協力に関する工夫 1要素 2%
- ⑤ その他 4要素 8%

(4) 要素集計結果のまとめ

重要度ランク第1位と～第3位において、「教師と生徒あるいは生徒同士のつながりを豊かにするための工夫等」においては、カテゴリー「カリキュラムや教育課程に関する工夫」や「生徒個々への関わりに関する工夫」が重要と考え、実行しているところが多いとの結果を得ました。

以下、カテゴリー「障害(児)理解のための工夫」「教師間の連携・協力に関する工夫」と続きますが、これらカテゴリー間の順位は、重要度第1位～第3位ランクまで不変でした。

最も重要と考えられているカテゴリー「カリキュラムや教育課程に関する工夫」における具体的な要素の記述内容の傾向は、①通常学級との交流の積極化、②学校行事への積極的参加、等が圧倒的な多数を占めていました。

カテゴリー「生徒個々への関わりに関する工夫」における具体的な要素の記述内容は、①担任が生徒や生徒同士のコミュニケーションの充実を図ること、②人間的な触れあいやスキニッップを多くとること、等でした。

カテゴリー「障害(児)理解のための工夫」における具体的な要素記述内容の傾向は、①全校生徒や教師を対象に学級(生徒)の紹介を行っている、等でした。

カテゴリー「教師間の連携・協力に関する工夫」における具体的な要素記述内容の傾向は、①親学級あるいは通常学級(交流級)の担任との話し合いを多くする、等でした。

「その他」における具体的な要素記述内容は、①保護者との連携・協力、等でした。

— 他の障害種別特殊学級が併設されている場合 —

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級が他の障害種別特殊学級と併設で設置されているアンケート回答校総数(143校)の内、上記設問に関して、何らかの回答を行った学(級)校数の割合。

- ① 重要度第1位 121校(学級) 85%
- ② 重要度第2位 99校(学級) 69%
- ③ 重要度第3位 81校(学級) 57%

(2) 記述内容の要素

肢体不自由特殊学級単独設置校の場合と同様重要度第1位～第3位の記述回答内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。

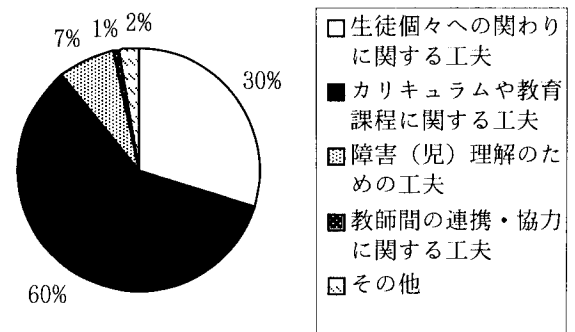
その結果、それぞれの要素は、肢体不自由特殊学級が単独で設置されている場合と同様に、

- ① 生徒個々への関わりに関する工夫
例：会話やスキニッップ等
- ② カリキュラムや教育課程に関する工夫
例：通常級との交流推進、特殊学級の解放等
- ③ 障害(児)理解のための工夫
例：特殊学級からの情報発信等
- ④ 教師間の連携・協力に関する工夫
例：交流級担任との連絡調整や話し合い等
- ⑤ その他

以上のカテゴリーに分類することができました。

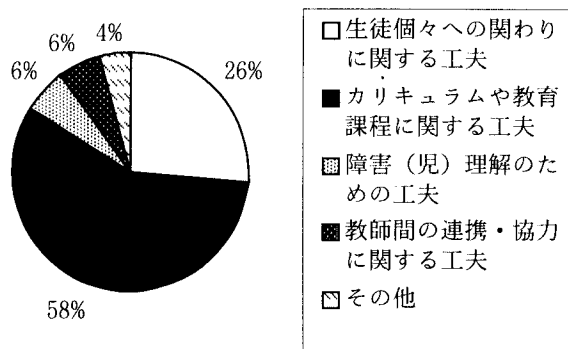
(3) 要素集計の結果

重要度第1位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 121)



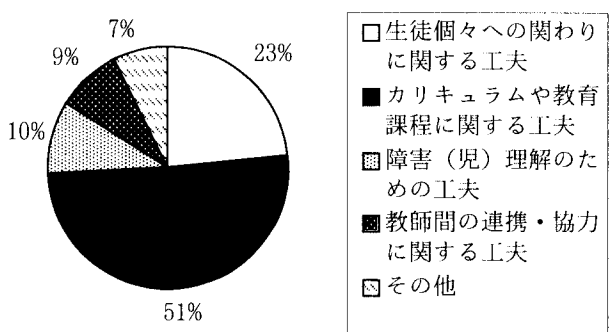
- ① 生徒個々への関わりに関する工夫 36要素 30%
- ② カリキュラムや教育課程に関する工夫 72要素 60%
- ③ 障害(児)理解のための工夫 9要素 7%
- ④ 教師間の連携・協力に関する工夫 1要素 1%
- ⑤ その他 3要素 2%

重要度第2位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 99)



- | | | |
|---------------------|------|-----|
| ① 生徒個々への関わりに関する工夫 | 26要素 | 26% |
| ② カリキュラムや教育課程に関する工夫 | 57要素 | 58% |
| ③ 障害(児)理解のための工夫 | 6要素 | 6% |
| ④ 教師間の連携・協力に関する工夫 | 6要素 | 6% |
| ⑤ その他 | 4要素 | 4% |

重要度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 81)



- | | | |
|---------------------|------|-----|
| ① 生徒個々への関わりに関する工夫 | 19要素 | 23% |
| ② カリキュラムや教育課程に関する工夫 | 41要素 | 51% |
| ③ 障害(児)理解のための工夫 | 8要素 | 10% |
| ④ 教師間の連携・協力に関する工夫 | 7要素 | 9% |
| ⑤ その他 | 6要素 | 7% |

(4) 要素集計結果のまとめ

肢体不自由特殊学級が単独で設置されている場合と同様に、重要度ランク第1位～第3位において、「教師と生徒あるいは生徒同士のつながりを豊かにするための工夫等」においては、カテゴリー「カリキュラムや教育課程に関する工夫」や「生徒個々への関わりに関する工夫」が重要と考え、実行しているところが多いとの結果を得ました。

以下、カテゴリー「生徒個々への関わりに関する工夫」「障害(児)理解のための工夫」「教師間の連携・協力に関する工夫」と続きますが、これらカテゴリー間の順位は、重要度第1位～第3位まで不変でした。

最も重要と考えられているカテゴリー「カリキュラムや教育課程に関する工夫」における具体的な要素の記述内容は、①他の障害種別特殊学級との合同学習(特殊学級同士の交流)であり、単独で設置されている場合において多数を占めていた要素「通常学級との交流」が極端に減少していました。

カテゴリー「生徒個々への関わりに関する工夫」における具体的な要素の記述内容の傾向は、①担任が生徒や生徒同士のコミュニケーションの充実を図ること、②人間的な触れあいやスキンシップを多くとること、等でした。

カテゴリー「障害(児)理解のための工夫」における具体的な要素記述内容の傾向は、①全校生徒や教師を対象に学級(生徒)の紹介を行っている、②生徒や教師がよりよく障害(児)を理解していく、等でした。

カテゴリー「教師間の連携・協力に関する工夫」における具体的な要素記述内容の傾向は、①他の障害種別特殊学級担任あるいは通常学級(交流級)の担任との人間関係の充実、等でした。

「その他」における具体的な要素記述内容は、①保護者との連携・協力が数多くありました。

「上記の工夫等がさらに充実するために必要なこと」について

1. 設問について

本設問は、肢体不自由特殊学級が単独で設置されている場合と、その他の特殊学級が併設されている場合に分類し、それぞれ現在行われている「教師と生徒あるいは生徒同士のつながりを豊かにする工夫等」がさらに充実していくために必要なことがらを重要度順に上位3位まで自由記述形式で回答するものです。

2. 結果

— 肢体不自由特殊学級が単独で設置されている場合 —

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級が単独で設置されているアンケート回答校総数(42校)の内、上記設問に関して、何らかの回答を行った学(級)校数の割合。

- | | | |
|----------|---------|------|
| ① 重要度第1位 | 50校(学級) | 119% |
| ② 重要度第2位 | 42校(学級) | 100% |
| ③ 重要度第3位 | 37校(学級) | 88% |

※ 上記重要度第1位～2位の回答率が100%以上ですが、他の障害種別特殊学級と併設の場合の回答が混入されている可能性が考えられます。

そのため、本設問の結果は、真の状況を表現しているとは言えない可能性があります。

(2) 記述内容の要素

重要度第1位～第3位の記述回答内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。すなわち、上記それぞれの重要度順位におけるアンケート回答校総数＝記述回答(要素)総数です。

その結果、

① 指導者側のこと(指導的・人的側面)

<①に関する構成要素>

- ①-1 カリキュラムや教育課程のこと
- ①-2 教師の関わり方のこと
- ①-3 教師間の連携・協力のこと
- ①-4 障害(児)理解のこと

② 物理的・時間的なこと

例：情報交換する時間の確保、安全設備の充実等

③ 制度上のこと

例：指導者の数的確保、補助教員の配置等

④ その他

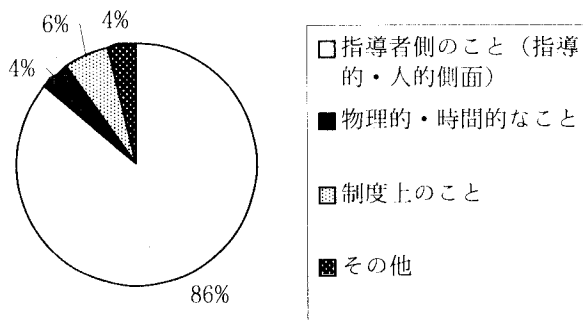
以上のカテゴリーに分類することができました。

※ このカテゴリー分類は他の障害種別特殊学級が併設されている肢体不自由特殊学級の場合も同様です。

(3) 要素集計の結果

重要度第1位にランクされた各カテゴリー

(要素総数 50)



① 指導者側のこと(指導的・人的側面)

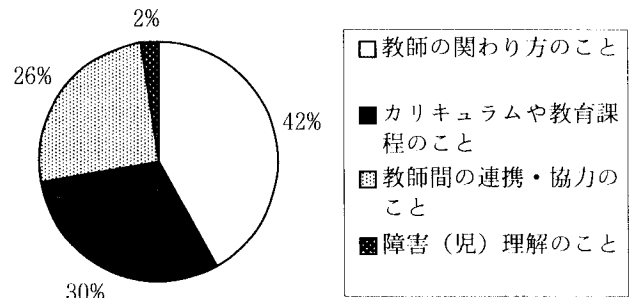
43要素 86%

<カテゴリー①に関する構成要素>

- ①-1 教師の関わり方のこと (18/43要素 42%)
- ①-2 カリキュラムや教育課程のこと (13/43要素 30%)
- ①-3 教師間の連携・協力のこと (11/43要素 26%)
- ①-4 障害(児)理解のこと (1/43要素 2%)
- ② 物理的・時間的なこと 2要素 4%
- ③ 制度上のこと 3要素 6%

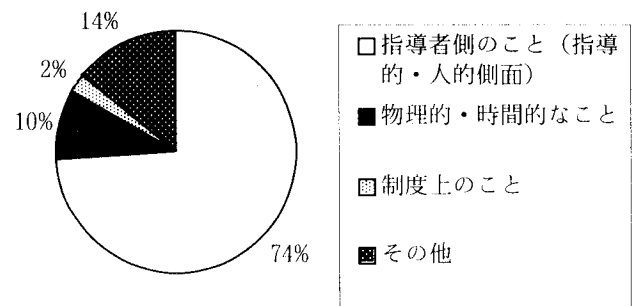
④ その他 2要素 4%

※ 上記カテゴリー①に関する構成要素のグラフ化



重要度第2位にランクされた各カテゴリー

(要素総数 42)



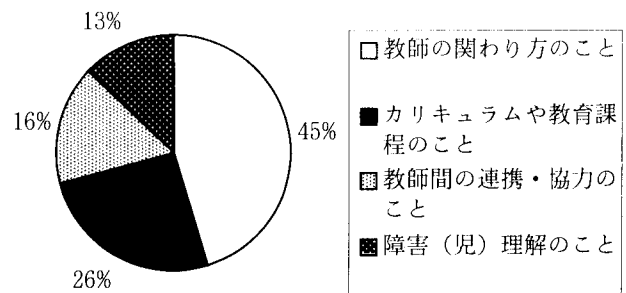
① 指導者側のこと(指導的・人的側面)

31要素 74%

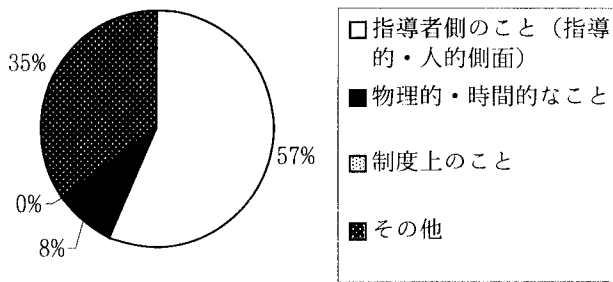
<カテゴリー①に関する構成要素>

- ①-1 教師の関わり方のこと (14/31要素 45%)
- ①-2 カリキュラムや教育課程のこと (8/31要素 26%)
- ①-3 教師間の連携・協力のこと (5/31要素 16%)
- ①-4 障害(児)理解のこと (4/31要素 13%)
- ② 物理的・時間的なこと 4要素 10%
- ③ 制度上のこと 1要素 2%
- ④ その他 6要素 14%

※ 上記カテゴリー①に関する構成要素のグラフ化

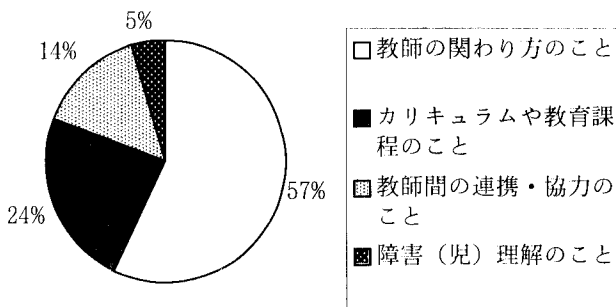


重要度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 37)



① 指導者側のこと (指導的・人的側面)	21要素	57%
＜カテゴリー①に関する構成要素＞		
①-1 教師の関わり方のこと	(12/21要素)	57%
①-2 カリキュラムや教育課程のこと	(5/21要素)	24%
①-3 教師間の連携・協力のこと	(3/21要素)	14%
①-4 障害(児)理解のこと	(1/21要素)	5%
② 物理的・時間的なこと	3要素	8%
③ 制度上のこと	0要素	0%
④ その他	13要素	35%

※ 上記カテゴリー①に関する構成要素のグラフ化



(4) 要素集計結果のまとめ

重要度ランク第1位～第3位まで「指導者側のこと (指導的・人的側面)」のカテゴリーが圧倒的多数を占めていました。このカテゴリーを構成している要素をさらに詳しく、

- ①-1 教師の関わり方のこと
- ①-2 カリキュラムや教育課程のこと
- ①-3 教師間の連携・協力のこと
- ①-4 障害(児)理解のこと

以上のように分類しましたが、このカテゴリーにおけるそれぞれの構成要素数は、重要度第1位～第3位ともに、「教師の関わり方のこと」「カリキュラムや教育課程のこと」「教師間の連携・協力のこと」「障害(児)理解のこと」とい

う順番でした。

カテゴリー「物理的・時間的なこと」における具体的な要素の記述内容の傾向は、①学校内外の施設の充実、②教室配置の工夫、等で時間的なこと (余裕やゆとり) に関するものではありませんでした。

カテゴリー「制度上のこと」における具体的な要素の記述内容の傾向は、①教員定数の改善 (増加) に関するのみでした。

「その他」では、①保護者や地域との連携、②次の担任への継続、等が取り上げられていました。

— 他の障害種別特殊学級が併設されている場合 —

(1) 設問回答率

他の障害種別特殊学級が併設されている場合の回答校総数 (143校) の内、上記設問に関して、何らかの回答を行った学 (級) 校数の割合。

① 重要度第1位	105校 (学級)	73%
② 重要度第2位	83校 (学級)	58%
③ 重要度第3位	52校 (学級)	36%

(2) 記述内容の要素

重要度第1位～第3位の記述回答内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。すなわち、上記それぞれの重要度順位におけるアンケート回答校総数=記述回答 (要素) 総数です。

その結果、

① 指導者側のこと (指導的・人的側面)

＜①に関する構成要素＞

- ①-1 カリキュラムや教育課程のこと
- ①-2 教師の関わり方のこと
- ①-3 教師間の連携・協力のこと
- ①-4 障害(児)理解のこと

② 物理的・時間的なこと

例：情報交換する時間の確保、安全設備の充実等

③ 制度上のこと

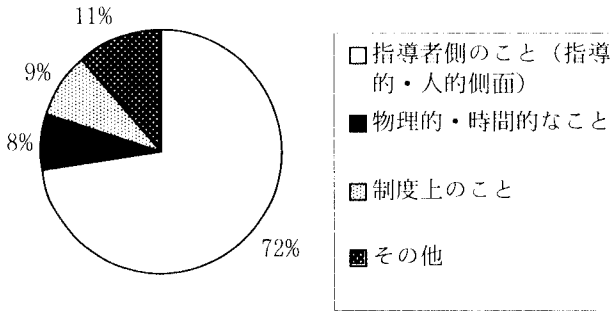
例：指導者の数的確保、補助教員の配置等

④ その他

以上のカテゴリーに分類することができました。

(3) 要素集計の結果

重要度第1位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 105)



① 指導者側のこと (指導的・人的側面)

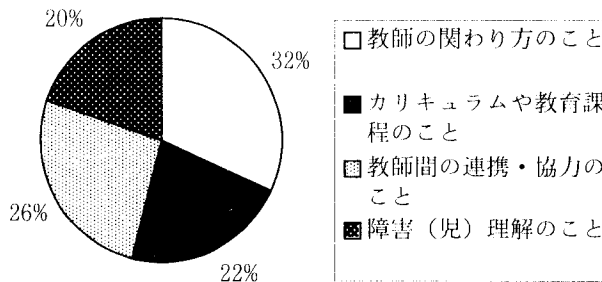
76要素 80%

<カテゴリー①に関する構成要素>

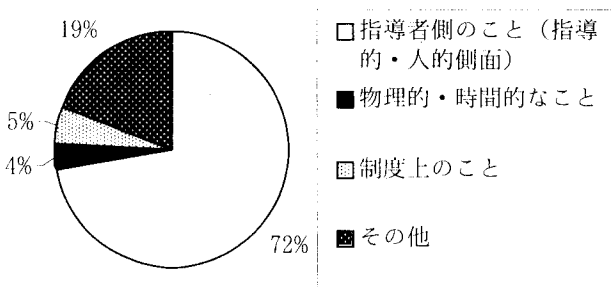
- ①-1 教師の関わり方のこと (24/76要素 32%)
- ①-2 カリキュラムや教育課程のこと (17/76要素 22%)
- ①-3 教師間の連携・協力のこと (20/76要素 26%)
- ①-4 障害(児)理解のこと (15/76要素 20%)

- ② 物理的・時間的なこと 8要素 9%
- ③ 制度上のこと 9要素 3%
- ④ その他 12要素 8%

※ 上記カテゴリー①に関する構成要素のグラフ化



重要度第2位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 83)



① 指導者側のこと (指導的・人的側面)

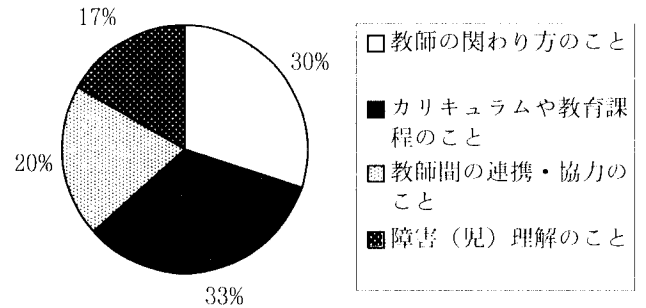
60要素 72%

<カテゴリー①に関する構成要素>

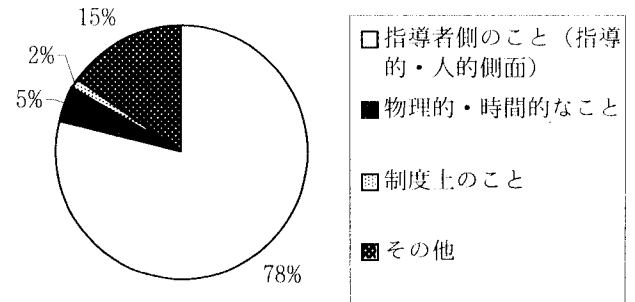
- ①-1 教師の関わり方のこと (18/60要素 30%)
- ①-2 カリキュラムや教育課程のこと (20/60要素 33%)
- ①-3 教師間の連携・協力のこと (12/60要素 20%)
- ①-4 障害(児)理解のこと (10/60要素 17%)

- ② 物理的・時間的なこと 3要素 4%
- ③ 制度上のこと 4要素 5%
- ④ その他 16要素 19%

※ 上記カテゴリー①に関する構成要素のグラフ化



重要度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 66)



① 指導者側のこと (指導的・人的側面)

52要素 79%

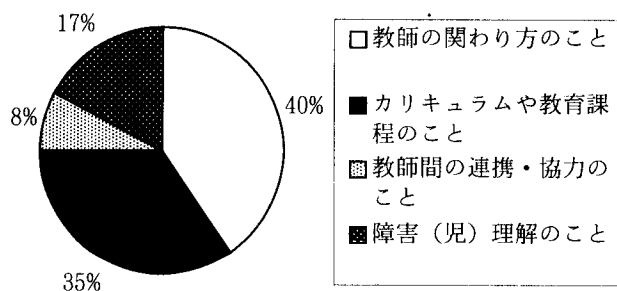
<カテゴリー①に関する構成要素>

- ①-1 教師の関わり方のこと (21/52要素 40%)
- ①-2 カリキュラムや教育課程のこと (18/52要素 35%)
- ①-3 教師間の連携・協力のこと (4/52要素 8%)
- ①-4 障害(児)理解のこと (9/52要素 17%)

- ② 物理的・時間的なこと 3要素 5%

③ 制度上のこと	1要素	1%
④ その他	10要素	15%

※ 上記カテゴリー①に関する構成要素のグラフ化



(4) 要素集計結果のまとめ

肢体不自由特殊学級が単独で併設されている場合と同様に、重要度ランク第1位～第3位まで「指導者側のこと(指導的・人的側面)」のカテゴリーが圧倒的多数を占めていました。このカテゴリーを構成している要素をさらに詳しく、

- ①-1 教師の関わり方のこと
- ①-2 カリキュラムや教育課程のこと
- ①-3 教師間の連携・協力のこと
- ①-4 障害(児)理解のこと

以上のように分類しましたが、これらの構成要素数やその順位については、重要度第1位～第2位ともに際だった変化はみられませんでした。重要度第3位において、「教師の関わり方のこと」「カリキュラムや教育課程のこと」に関する要素数が「教師間の連携・協力のこと」「障害(児)理解のこと」よりも非常に多くなっていました。

カテゴリー「物理的・時間的なこと」における具体的な要素の記述内容の傾向は、①学校内外の施設の充実、等で、やはり時間的なこと(余裕・ゆとり)に関する記述はありませんでした。

カテゴリー「制度上のこと」における具体的な要素の記述内容の傾向は、①教員定数の改善、②予算面の充実、等でした。

「その他」では、①保護者との連携・保護者の理解の充実、②地域や関係諸機関との連携、等が取り上げられていました。

3. 部分考察

本設問に関する回答数は、『併設の場合における「工夫等が充実するために必要なこと」』の場合を除く全てに、アンケート回答校(学級)数を上回るという結果となりました。

このことは、設問方式が特殊学級が単独の場合と、他の障害種別特殊学級が併設されている場合とに分割して回答することになっていたため、回答手続きが複雑となり、それぞれの場合の回答が重複して存在したのではないかと推

測されます。

(1) 「教師と生徒あるいは生徒同士のつながりを豊かにするための工夫等」について

- ・肢体不自由特殊学級が単独で設置されている場合、他の障害種別の特殊学級が併設されている場合ともに、「カリキュラムや教育課程に関する工夫」が最も多く行われており、その具体的な記述内容は、双方ともに生徒同士の積極的な交流の推進を図ることでした。しかしながら、他の障害種別併設の場合には、通常学級とではなく、他の特殊学級との交流が多くなっています。このことから、他の障害種別特殊学級が併設されている肢体不自由特殊学級においては、交流対象が通常学級ではなく併設の特殊学級となっていることが推測されます。
- ・肢体不自由特殊学級が単独で設置されている場合、他の障害種別の特殊学級が併設されている場合ともに、教室解放の工夫が少ないのは、小学校とは異なる中学校の特性がその要因となっているように思われます。
- ・肢体不自由特殊学級が単独で設置されている場合、他の障害種別の特殊学級が併設されている場合ともに、「障害(児)理解のための工夫」と「教師間の連携・協力に関する工夫」があまり行われていません。これらの要因にも中学校の特性が顕在化していると考えられます。
- ・教師と生徒、生徒同士のつながりを豊かにするための工夫には、保護者も大きく関与していることが伺えます。

(2) 「上記の工夫がさらに充実するために必要なこと」について

- ・肢体不自由特殊学級が単独で設置されている場合、他の障害種別の特殊学級が併設されている場合ともに、まずは指導者側の努力や工夫が必要であると考えられています。
- ・肢体不自由特殊学級が単独で設置されている場合、他の障害種別の特殊学級が併設されている場合ともに、時間的な余裕やゆとりの必要性について記述が全くありませんでしたが、その要因についてはわかりません。
- ・肢体不自由特殊学級が単独で設置されている場合、教師の関わり方に関する努力や工夫の必要性が強調されていますが、他の特殊学級が併設されている場合とは異なり、特殊教育という範囲で孤独な活動を強いられるという環境的な要因が推測されます。
- ・保護者や地域との連携・協力が必要と考えていることが示されています。

「保護者とのつながりを豊かにするための工夫」について

1. 設問について

本設問は、特殊学級内の視点から、保護者との日常的な情報交換や連絡の方法について、頻度の高いものから順に上位3位までを自由記述形式で回答するものです。

2. 結果

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級アンケート回答校総数（185校）のうち、上記設問に関して、何らかの回答を行った学（級）校数の割合。

① 頻度第1位	176校（学級）	95%
② 頻度第2位	162校（学級）	88%
③ 頻度第3位	130校（学級）	70%

(2) 記述内容の要素

頻度第1位～第3位の記述内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。

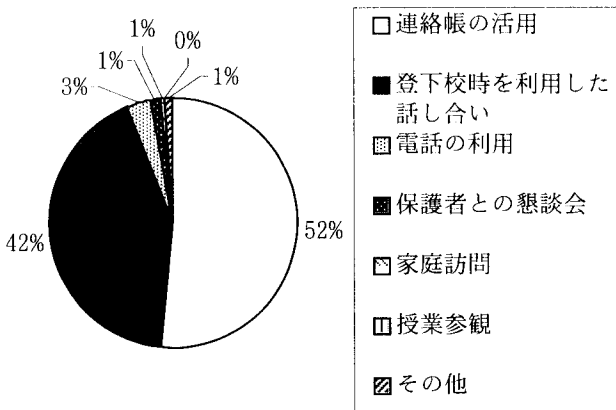
その結果、

- ① 連絡帳の活用（頻度の少ない学級通信等もこのカテゴリーに含めました）
- ② 登下校時を利用した話し合い
- ③ 電話の利用
- ④ 保護者との懇談会
- ⑤ 家庭訪問
- ⑥ 授業参観
- ⑦ その他

以上のカテゴリーに分類することができました。

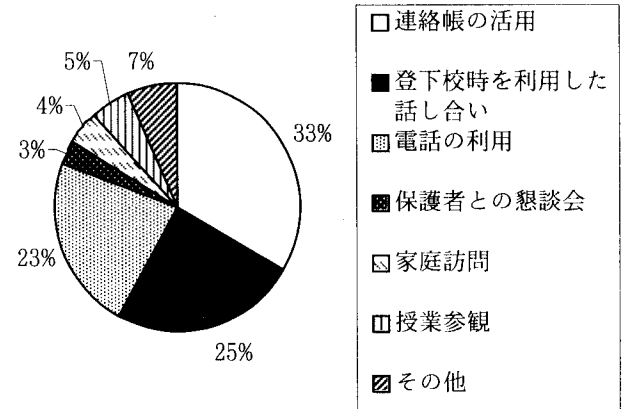
(3) 要素集計の結果

頻度第1位にランクされた各カテゴリー
（要素総数 176）



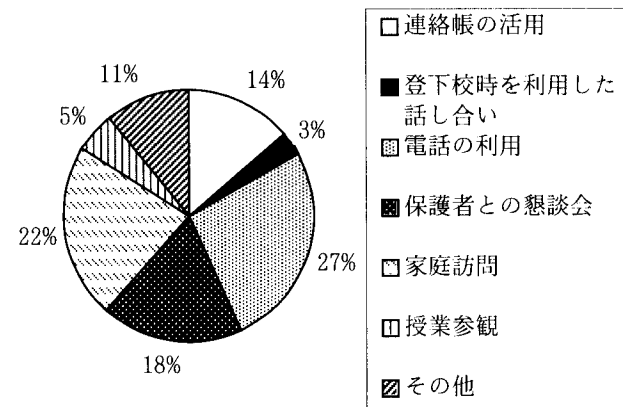
① 連絡帳の活用	91要素	52%
② 登下校時を利用した話し合い	74要素	42%
③ 電話の利用	6要素	3%
④ 保護者との懇談会	2要素	1%未満
⑤ 家庭訪問	1要素	1%未満
⑥ 授業参観	0要素	0%
⑦ その他	2要素	1%

頻度第2位にランクされた各カテゴリー
（要素総数 162）



① 連絡帳の活用	54要素	33%
② 登下校時を利用した話し合い	40要素	25%
③ 電話の利用	37要素	23%
④ 保護者との懇談会	5要素	3%
⑤ 家庭訪問	7要素	4%
⑥ 授業参観	8要素	5%
⑦ その他	11要素	7%

頻度第3位にランクされた各カテゴリー
（要素総数 130）



① 連絡帳の活用	18要素	14%
② 登下校時を利用した話し合い	4要素	3%
③ 電話の利用	34要素	26%
④ 保護者との懇談会	24要素	19%
⑤ 家庭訪問	29要素	22%

⑥ 授業参観	7要素	5%
⑦ その他	14要素	11%

(4) 要素集計結果のまとめ

頻度第1位～第2位では、カテゴリー「連絡帳の活用」と「登下校時を利用した話し合い」が大多数を占めています。

頻度大3位以下では、カテゴリー「電話の利用」「家庭訪問」「保護者との懇談」の順です。特に、カテゴリー「電話の利用」に関しては、頻度第3位では要素数が最多でした。

「その他」では、①病院での研究会に保護者と一緒に参加、②療育センターの訓練に参加する、③親の会での意見交換、等のような校外での活動を一緒に行う活動が多くありました。

3. 部分考察

- ・ほぼ、全ての学級(学校)が保護者とのつながりについて、何らかの活動や工夫を行っています、その方法に関し、頻度の多かったものは当然のことながら、日々の連絡帳や登下校時を活用した話し合いでした。
- ・頻度第3位の結果から、家庭訪問や懇談会がよく行われています。
- ・電話の利用がかなり多くありましたが、地域性や緊急連絡等に関する活用との関連が考えられます。

「保護者とのつながりがなかなかはかれない場合」について

1. 設問について

本設問は、保護者との豊かなつながりがなかなか計れないという場合について、切実と思われるものから順に上位3位までを自由記述形式で回答するものです。

2. 結果

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級アンケート回答校総数(185校)のうち、上記設問に関して、何らかの回答を行った学(級)校数の割合。

① 重要度第1位	113校(学級)	61%
② 重要度第2位	69校(学級)	37%
③ 重要度第3位	45校(学級)	24%

(2) 記述内容の要素

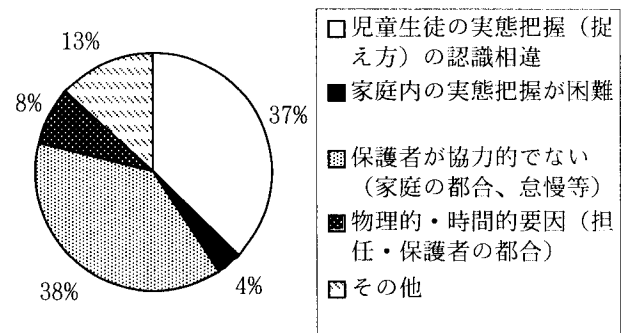
重要度第1位～第3位の記述内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。

その結果、

- ① 児童生徒の実態把握(捉え方)の認識相違
例:保護者の願いと学級(学校)の方針の齟齬等
 - ② 家庭内の実態把握が困難
例:家庭での問題に入っていくけない等
 - ③ 保護者が協力的でない(家庭の都合、怠慢等)
例:学級の話聞いてもらえない、連絡が一方通行等
 - ④ 物理的・時間的要因(担任・保護者の都合)
例:双方に時間的余裕がない、話し合うための校内の体制が整っていない等
 - ⑤ その他
- 以上のカテゴリーに分類することができました。

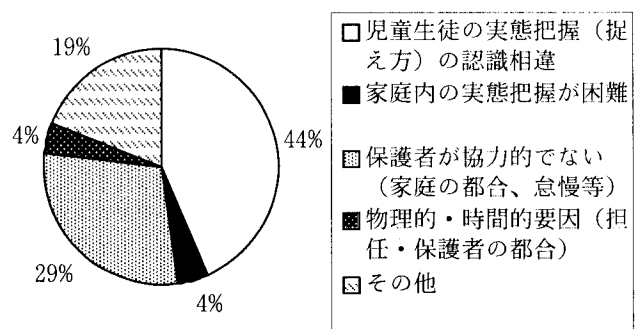
(3) 要素集計の結果

重要度第1位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 113)



- ① 児童生徒の実態把握(捉え方)の認識相違
42要素 37%
- ② 家庭内の実態把握が困難
4要素 4%
- ③ 保護者が協力的でない(家庭の都合、怠慢等)
43要素 38%
- ④ 物理的・時間的要因(担任・保護者の都合)
9要素 8%
- ⑤ その他
15要素 13%

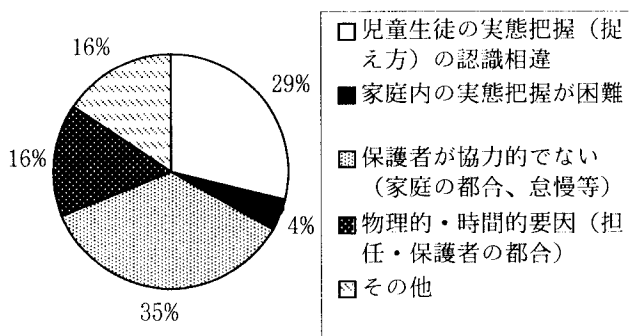
重要度第2位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 69)



- ① 児童生徒の実態把握(捉え方)の認識相違
30要素 44%
- ② 家庭内の実態把握が困難
3要素 4%

- ③ 保護者が協力的でない(家庭の都合、怠慢等) 20要素 29%
- ④ 物理的・時間的要因(担任・保護者の都合) 3要素 4%
- ⑤ その他 13要素 19%

重要度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 45)



- ① 児童生徒の実態把握 (捉え方) の認識相違 13要素 29%
- ② 家庭内の実態把握が困難 2要素 4%
- ③ 保護者が協力的でない(家庭の都合、怠慢等) 16要素 35%
- ④ 物理的・時間的要因(担任・保護者の都合) 7要素 16%
- ⑤ その他 7要素 16%

(4) 要素集計結果のまとめ

重要度第1位～第3位の中で、カテゴリー「児童生徒の実態把握 (捉え方) の認識相違」と「保護者が協力的でない(家庭の都合・怠慢等)」が特に多い結果となっています。

その他では①障害児に対する専門的な知識が足りない、②(保護者の体や心の負担悩み)を教師がサポートとしまれていない、③指導力不足などがありました。

カテゴリー「児童生徒の実態把握 (捉え方) の認識相違」における具体的な記述内容の傾向は、①進路先の問題、②生徒の障害の実態と親の願い違い、等でした。

カテゴリー「保護者が協力的でない(家庭の都合・怠慢等)」における具体的な記述内容の傾向は、①保護者が多忙で時間取れない、②保護者の教育に関する無関心などでした。

カテゴリー「家庭内の実態把握が困難」における具体的な記述内容の傾向は、①家庭内立ち入った話には踏み込めない、②心を開いてもらえない等でした。

カテゴリー「物理的・時間的要因(担任・保護者の都合)」における具体的な記述内容の傾向は、①保護者に時間的余裕がない、②教師自身に時間的余裕がない、等でした。

3. 部分考察

- 半数以上の学級(学校)において、保護者との間に何らかの課題があるようです。
- その主たる要因は、子どものことに関する担任(学校)側と保護者の認識の相違でしたが、その背景には、指導方針、内容・方法について、説明のための話し合いをどう持つのか等の課題が存在するようです。
- また、これらの問題に関しては保護者の側にも、両親の共働きや父親又は母親の不在等の家庭の事情による物理的・時間的な困難さ、さらに保護者の非協力、理解不足等の課題があります。
- カテゴリーに含まれない要素が多くありましたが、これらは障害がある生徒個々の家庭内の問題やそこから生じる人間関係等、学校側がなかなか踏み込めない保護者の課題が多くあるようです。
- 小学校と比較して、カテゴリー「保護者が協力的でない」の割合が高く示されました。中学校では、保護者と話し合いを持つことが困難な状況であることが推測されます。

<学校全体の視点から>

「通常級との交流活動の内容と話し合いの頻度」について

1. 設問について

本設問は、通常の学級(交流学級)との間において日常的に行われている交流活動について、その内容とそのため話し合いの頻度について、選択肢の中から回答するものです。

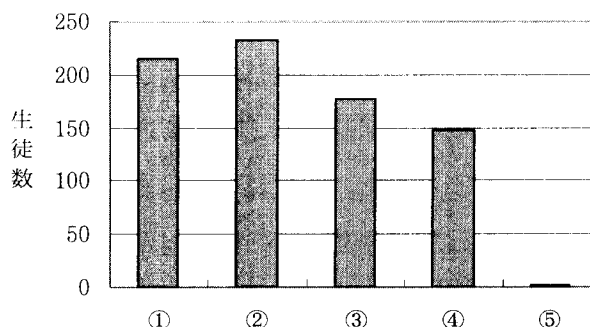
2. 結果

(1) 交流の内容

交流の内容に関する選択肢は、

- ① 同校の通常の学級と教科の交流を行っている
- ② 同校の通常の学級と日常の全校行事の交流を行っている
- ③ 同校の通常の学級と給食時間の交流を行っている
- ④ 同校の通常の学級と上記以外の交流を行っている
- ⑤ 同校の通常の学級とは交流を行っていない

以上ですが、複数回答です。

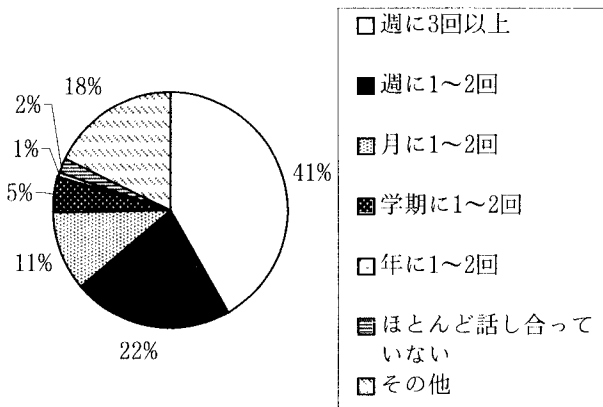


(2) 話し合いの頻度

話し合いの頻度に関する選択肢は、

- ① 週3回以上話し合いを行っている
- ② 週1～2回は話し合いを行っている
- ③ 月1～2回は話し合いを行っている
- ④ 学期に1～2回は話し合いを行っている
- ⑤ 年に1～2回は話し合いを行っている
- ⑥ 通常学級の担任とは交流についてほとんど話し合っていない
- ⑦ その他

以上です。



「肢体不自由特殊学級と交流対象通常学級担任との話し合いの内容」について

1. 設問について

本設問は、学校全体の視点から、肢体不自由特殊学級担任と交流対象通常学級担任との話し合いの内容について、頻度の高いものから順に上位3位までを自由記述形式で回答するものです。

2. 結果

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級アンケート回答校総数(185校)のうち、上記設問に関して、何らかの回答を行った学(級)校数の割合。

① 頻度第1位	168校(学級)	91%
② 頻度第2位	143校(学級)	77%
③ 頻度第3位	109校(学級)	59%

(2) 記述内容の要素

頻度第1位～第3位の記述内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。

その結果、

- ① 授業や行事等の内容について

例：授業の内容・進め方、教科の進度

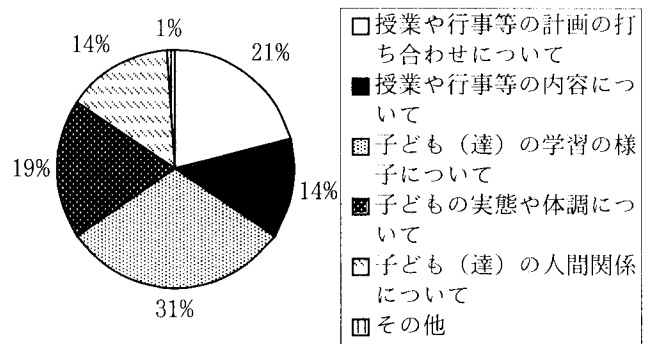
- ② 授業や行事等の計画の打ち合わせについて
例：時間割の調整、行事の参加の仕方(形式)
- ③ 子ども(達)の学習の様子について
例：交流級での子どもの様子
- ④ 子どもの実態や体調について
例：健康面の情報交換、運動能力について
- ⑤ 子ども(達)の人間関係について
例：通常学級での友達関係
- ⑥ その他

以上のカテゴリーに分類することができました。

(3) 要素集計の結果

頻度第1位にランクされた各カテゴリー

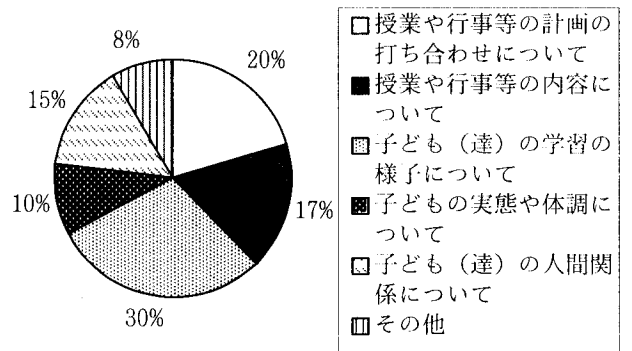
(要素総数 168)



① 授業や行事等の計画の打ち合わせについて	35要素	21%
② 授業や行事等の内容について	23要素	14%
③ 子ども(達)の学習の様子について	52要素	31%
④ 子どもの実態や体調について	32要素	19%
⑤ 子ども(達)の人間関係について	24要素	14%
⑥ その他	2要素	1%

頻度第2位にランクされた各カテゴリー

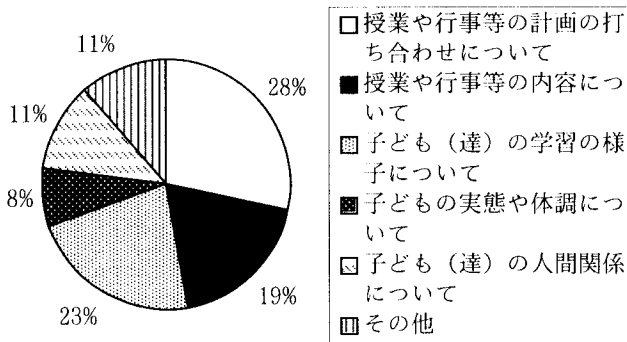
(要素総数 143)



① 授業や行事等の計画の打ち合わせについて	29要素	20%
② 授業や行事等の内容について	25要素	18%

③ 子ども(達)の学習の様子について	42要素	29%
④ 子どもの実態や体調について	14要素	10%
⑤ 子ども(達)の人間関係について	21要素	15%
⑥ その他	12要素	8%

頻度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 109)



① 授業や行事等の計画の打ち合わせについて	30要素	28%
② 授業や行事等の内容について	20要素	18%
③ 子ども(達)の学習の様子について	24要素	22%
④ 子どもの実態や体調について	8要素	7%
⑤ 子ども(達)の人間関係について	12要素	11%
⑥ その他	12要素	11%

(4) 要素集計結果のまとめ

頻度第1位では、カテゴリー「子ども(達)の学習の様子について」「授業や行事等の計画の打ち合わせについて」「子どもの実態や体調について」という順位でした。頻度第2位では、カテゴリー「子ども(達)の学習の様子について」「授業や行事等の内容について」「授業や行事等の計画の打ち合わせについて」でした。頻度3位では、カテゴリー「授業や行事等の計画の打ち合わせについて」「子ども(達)の学習の様子について」「授業や行事等の内容について」でした。

「その他」は頻度第2位と3位において要素数が増加していますが、それらの具体的な記述内容は、保護者の事柄が多く、例えば①保護者の願い、②保護者との話し合い、③家庭での様子、などです。

3. 部分考察

- ほとんどの学級(学校)において、交流先通常学級の担任との話し合いが、何らかの形で行われています。それらの内容の多くは、行事や授業の打ち合わせ、授業内容、授業における子ども(達)の様子です。
- 特殊学級の子どもと交流先の子どもたちがどのように共

に活動し、関係を形成していくかの人間関係に関する課題についての話し合いは、わずかに行われている程度ようです。

「上記話し合いがさらに充実するために必要なこと」について

1. 設問について

本設問は、学校全体の視点から、肢体不自由特殊学級担任と交流対象通常学級担任との話し合いがさらに充実したものとなるために必要なことを、重要度の高いものから順に上位3位までを自由記述形式で回答するものです。

2. 結果

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級アンケート回答校総数(185校)のうち、上記設問に関して、何らかの回答を行った学(級)校数の割合。

① 重要度第1位	128校(学級)	69%
② 重要度第2位	76校(学級)	41%
③ 重要度第3位	60校(学級)	32%

(2) 記述内容の要素

重要度第1位～第3位の記述内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。

その結果、

① 教師間の連携・協力、人間関係

例：担任同士の共通理解や支援の姿勢、意見交換ができる関係づくり、等

② 時間的な余裕

例：計画的な話し合いの時間の確保、等

③ 全校的な体制づくり

例：学年会・委員会(分掌部会)等の充実、担任の役割の明確化、等

④ 障害(児)理解

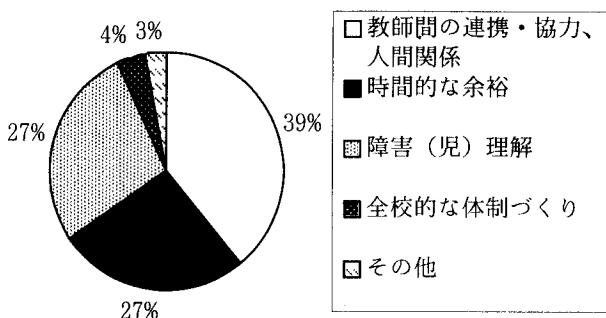
例：児童の実態把握、障害に関する理解、等

⑤ その他

以上のカテゴリーに分類することができました。

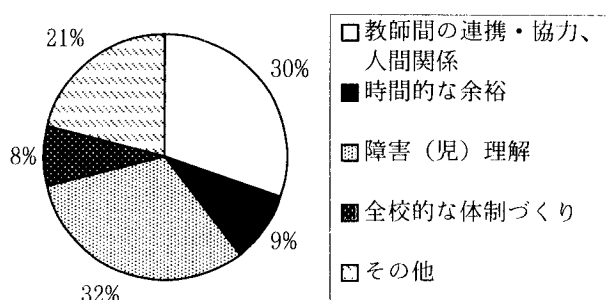
(3) 要素集計の結果

重要度第1位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 128)



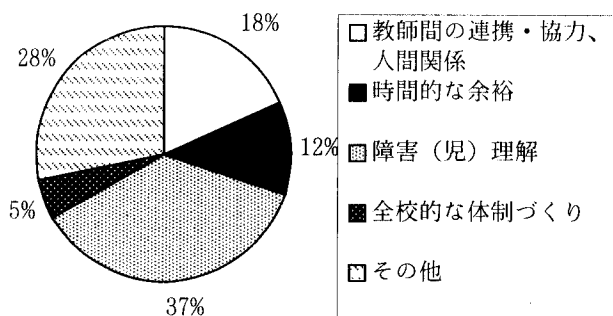
① 教師間の連携・協力、人間関係	50要素	39%
② 時間的な余裕	34要素	27%
③ 障害(児)理解	35要素	27%
④ 全校的な体制づくり	5要素	4%
⑤ その他	4要素	3%

重要度第2位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 76)



① 教師間の連携・協力、人間関係	23要素	30%
② 時間的な余裕	7要素	9%
③ 障害(児)理解	24要素	32%
④ 全校的な体制づくり	6要素	8%
⑤ その他	16要素	21%

重要度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 60)



① 教師間の連携・協力、人間関係	11要素	18%
② 時間的な余裕	7要素	12%
③ 障害(児)理解	22要素	37%
④ 全校的な体制づくり	3要素	5%
⑤ その他	17要素	28%

(4) 要素集計結果のまとめ

重要度第1位では、カテゴリー「教師間の連携・協力、人間関係」「障害(児)理解」「時間的な余裕」という順位でした。重要度第2位では、カテゴリー「障害(児)理解」「教師間の連携・協力、人間関係」でした。重要度第3位では、カテゴリー「障害(児)理解」「その他」でした。また、カテゴリー「全校的な体制づくり」は、各重要度でも5%程度でした。

「その他」の具体的な記述内容は、①保護者との連携を密にする、②記録を残す、③個別の指導計画の充実、④専門知識、などでした。

3. 部分考察

- ・ 肢体不自由特殊学級と交流対象の通常学級担任との話し合い充実するためには、それぞれの教師間の連携・協力や人間関係の円滑さが重要です。それらの前提となる障害(児)の理解について、今後どのように推進していくかが課題と思われます。
- ・ 上記の課題を推進していくためには、全校的な体制づくりが必要ですが、重要度の上位にはランクされていません。今後の課題となると思われます。

「全校児童生徒との交わりを豊かにする工夫」について

1. 設問について

本設問は、交流級も含め、全校児童生徒を対象として肢体不自由特殊学級が行っている交わりを豊かにするための工夫について、重要と思われるものから順に上位3位までを自由記述形式で回答するものです。

2. 結果

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級アンケート回答校総数(185校)のうち、上記設問に関して、何らかの回答を行った学(級)校数の割合。

① 重要度第1位	157校(学級)	85%
② 重要度第2位	115校(学級)	62%
③ 重要度第3位	75校(学級)	41%

(2) 記述内容の要素

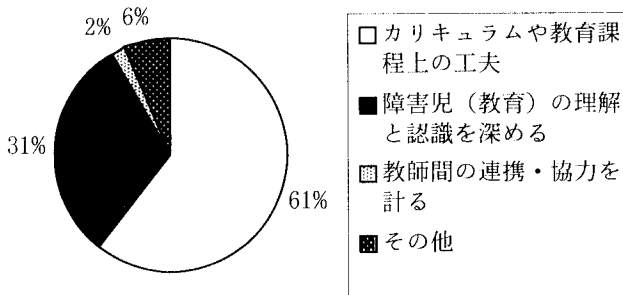
重要度第1位～第3位の記述内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。

その結果、

- ① カリキュラムや教育課程上の工夫
例：学級の解放、行事への積極的参加、全校的な交流を図る等
 - ② 障害児（教育）の理解と認識を深める
例：障害に関する授業の展開、学級便りの配布等
 - ③ 教師間の連携・協力を計る
例：在籍児に対する全職員の共通理解を図る、
 - ④ その他
- 以上のカテゴリーに分類することができました。

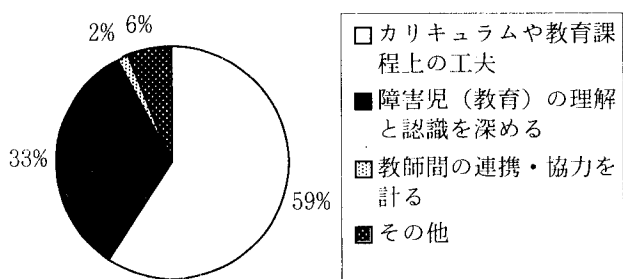
(3) 要素集計の結果

重要度第1位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 157)



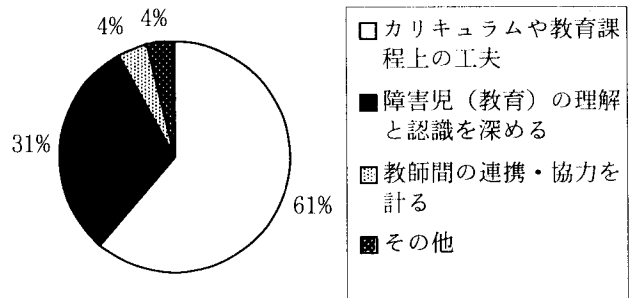
- ① カリキュラムや教育課程上の工夫 95要素 61%
- ② 障害児（教育）の理解と認識を深める 49要素 31%
- ③ 教師間の連携・協力を計る 3要素 2%
- ④ その他 10要素 6%

重要度第2位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 115)



- ① カリキュラムや教育課程上の工夫 68要素 59%
- ② 障害児（教育）の理解と認識を深める 38要素 33%
- ③ 教師間の連携・協力を計る 2要素 2%
- ④ その他 7要素 6%

重要度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 75)



- ① カリキュラムや教育課程上の工夫 46要素 61%
- ② 障害児（教育）の理解と認識を深める 23要素 31%
- ③ 教師間の連携・協力を計る 3要素 4%
- ④ その他 3要素 4%

(4) 要素集計結果のまとめ

重要度第1位～第3位において、ともにカテゴリー「カリキュラムや教育課程上の工夫」「障害児（教育）の理解と認識を深める」という順位でした。カテゴリー「教師間の連携・協力を計る」は極めて少数でした。

「その他」は重要度第1位～3位においてそれぞれ6%、6%、4%ですが、要素の具体的記述内容は、①さまざまなチャリティー活動、②施設設備等の充実、③特殊学級児童生徒に対する人間関係の指導や安全指導、④登校班での登校等が目立ちました。

カテゴリー「カリキュラムや教育課程上の工夫」における要素の具体的記述内容の傾向は、①交流教育に積極的に参加、②すべての学校行事に参加、③教室の開放等でした。

カテゴリー「障害児（教育）の理解と認識を深める」における要素の具体的記述内容の傾向は、①障害の理解を深める授業、②車椅子の体験学習、③通信の発行でした。

カテゴリー「教師間の連携・協力を計る」における要素の具体的記述内容の傾向は、①障害・児者理解のために道徳と特活の時間に担任から指導をしてもらう、②情報交換、③交流の引率、等です。

3. 部分考察

- ・結果からは、いずれの重要度においても、「カリキュラムや教育課程上の工夫」と「障害児（教育）の理解と認識を深める」のカテゴリーが9割を占めました。
- ・教師間の連携・協力を計るということについて、また、全校的な体制づくりに関する記述が少ないことから、実際的な全校的体制づくりが十分に行われているかどうかについては、分かりませんでした。

「上記の工夫等がさらに充実するために必要なこと」について

1. 設問について

本設問は、交流級も含め、全校児童生徒を対象として肢体不自由特殊学級が行っている交わりを豊かにするための工夫等が、さらに充実していくために必要なことがらを重要度順に上位3位まで自由記述形式で回答するものです。

2. 結果

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級が単独で設置されているアンケート回答校総数(185校)の内、上記設問に関して、何らかの回答を行った学(級)校数の割合。

① 重要度第1位	93校(学級)	50%
② 重要度第2位	88校(学級)	48%
③ 重要度第3位	33校(学級)	18%

(2) 記述内容の要素

重要度第1位～第3位の記述回答内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。

その結果、

① 指導者側のこと(指導的・人的側面)

<①に関する構成要素>

- ①-1 障害(児)の理解・啓発
- ①-2 体制づくり、連携・協力
- ①-3 指導上の工夫

② 子ども側のこと

例：通常学級の子どもの指導、全校児童生徒の意識向上等

③ 制度上のこと

例：指導者の増員・適正配置、予算等

④ 物理的・時間的なこと

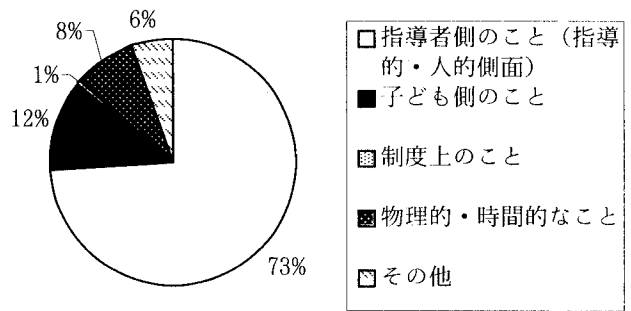
例：施設設備の充実、時間的にゆとり等

⑤ その他

以上のカテゴリーに分類することができました。

(3) 要素集計の結果

重要度第1位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 126)



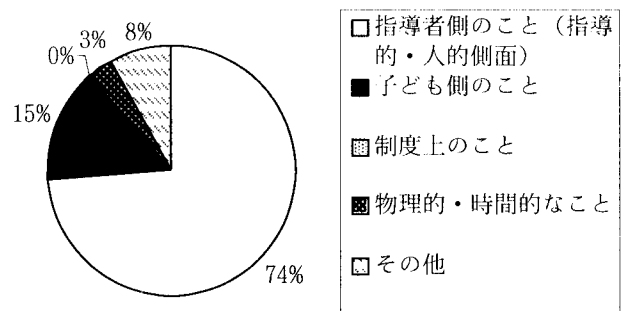
① 指導者側のこと(指導的・人的側面)

93要素 73%

<①に関する構成要素>

①-1 障害(児)の理解・啓発	(27/93要素)	(29%)
①-2 体制づくり、連携・協力	(10/93要素)	(11%)
①-3 指導上の工夫	(56/93要素)	(60%)
② 子ども側のこと	15要素	12%
③ 制度上のこと	1要素	1%
④ 物理的・時間的なこと	10要素	8%
⑤ その他	7要素	6%

重要度第2位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 88)



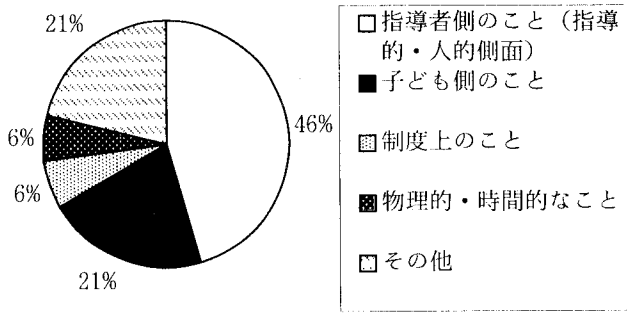
① 指導者側のこと(指導的・人的側面)

65要素 74%

<①に関する構成要素>

①-1 障害(児)の理解・啓発	(13/35要素)	(20%)
①-2 体制づくり、連携・協力	(9/65要素)	(14%)
①-3 指導上の工夫	(43/65要素)	(66%)
② 子ども側のこと	13要素	15%
③ 制度上のこと	要素	0%
④ 物理的・時間的なこと	3要素	3%
⑤ その他	7要素	8%

重要度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 33)



① 指導者側のこと (指導的・人的側面)	15要素	46%
＜①に関する構成要素＞		
①-1 障害(児)の理解・啓発	(2/15要素)	(13%)
①-2 体制づくり、連携・協力	(1/15要素)	(7%)
①-3 指導上の工夫	(12/15要素)	(80%)
② 子ども側のこと	7要素	21%
③ 制度上のこと	2要素	6%
④ 物理的・時間的なこと	2要素	6%
⑤ その他	7要素	21%

(4) 要素集計結果のまとめ

重要度ランク第1位～第3位まで「指導者側のこと (指導的・人的側面)」のカテゴリーが多数を占めていました。このカテゴリーを構成している要素をさらに詳しく、

- ①-1 障害(児)の理解・啓発
- ①-2 体制づくり、連携・協力
- ①-3 指導上の工夫

以上のように分類しましたが、重要度第1位～第3位ともに要素数(カテゴリーに占める割合)は、「指導上の工夫」「障害(児)の理解・啓発」「体制づくり、連携・協力」という順番でした。

他のカテゴリーである「子ども側のこと」「制度上のこと」「物理的・時間的なこと」については、重要度第1位では「指導者側のこと (指導的・人的側面)」について、「子ども側のこと」「物理的・時間的なこと」「制度上のこと」という順番でした。

カテゴリー「子ども側のこと」における具体的な要素の記述内容の傾向は、①通常学級の生徒に障害(児)に関する理解、②生徒同士の仲間作りをする、等でした。

カテゴリー「物理的・時間的なこと」における具体的な要素の記述内容の傾向は、①交流学級との交流を考えた教室配置、②時間的なゆとりの確保、③施設設備の充実、等でした。

カテゴリー「制度上のこと」における具体的な要素の記述内容の傾向は、①生徒に関わる教員の確保、②ボランティアの人材確保、等でした。

「その他」では、①職員全体の研修、②保護者の意識の変化、③地域の理解と協力、④専門家との意見交換、等が取り上げられていました。

3. 部分考察

- ・この設問への回答率は50% (小学校 78%) と低く、全校生徒との交わりについての取り組みについて、教師の関心が高くないことが推測されます。
- ・結果からは、指導者側の指導面での工夫や努力が必要とされています。さらに、指導者ばかりではなく生徒側(主として通常学級在籍児)への働きかけも重要な要素となっています。
- ・障害の理解やそのための啓発活動の重要性も強調されています。
- ・指導者側の必要なこととして、全校的な体制づくりが挙げられていましたが、他の2構成要素である「指導上の工夫」「障害(児)の理解・啓発」に次ぐものでした。このことは、学校全体の組織体制が十分であるが故に、具体的な事柄である「指導上の工夫」「障害(児)の理解・啓発」に関する活動が必要とされているのか、あるいは単純に重要とは認識されていないのか、推測は困難です。

「全職員の全校的な規模でのシステムづくりや意識の改革に関する取り組み」について

1. 設問について

本設問は、生徒同士の交わりを豊かにするために、全職員が全校的な規模で行っているシステム作りや意識の改革に関する取り組みについて、重要と思われるものから順に上位3位までを自由記述形式で回答するものです。

2. 結果

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級アンケート回答校総数(185校)のうち、上記設問に関して、何らかの回答を行った学(級)校数の割合。

① 重要度第1位	113校(学級)	61%
② 重要度第2位	67校(学級)	36%
③ 重要度第3位	35校(学級)	19%

(2) 記述内容の要素

重要度第1位～第3位の記述内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。

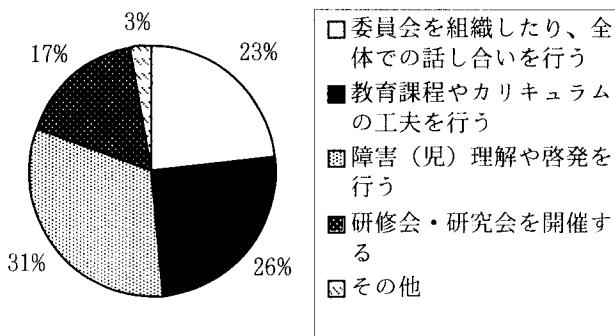
その結果、

- ① 委員会を組織したり、全体での話し合いを行う
- ② 研修会・研究会等を開催する
- ③ 教育課程やカリキュラムの工夫を行う
- ④ 障害（児）理解や啓発を行う
- ⑤ その他

以上のカテゴリーに分類することができました。

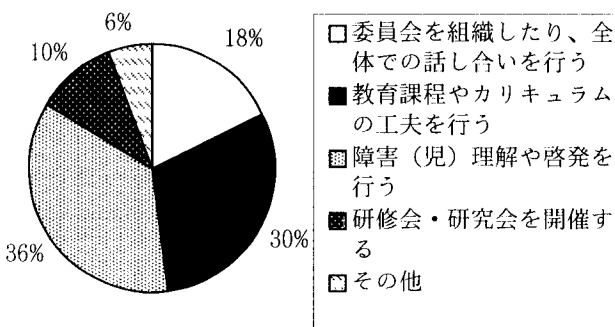
(3) 要素集計の結果

重要度第1位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 113)



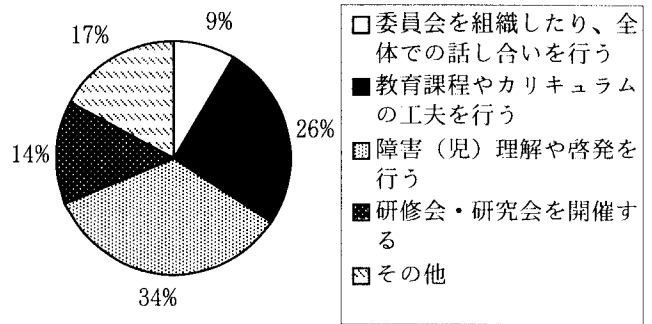
- | | | |
|-------------------------|------|-----|
| ① 委員会を組織したり、全体での話し合いを行う | 26要素 | 23% |
| ② 教育課程やカリキュラムの工夫を行う | 29要素 | 26% |
| ③ 障害（児）理解や啓発を行う | 36要素 | 31% |
| ④ 研修会・研究会を開催する | 19要素 | 17% |
| ⑤ その他 | 3要素 | 3% |

重要度第2位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 67)



- | | | |
|-------------------------|------|-----|
| ① 委員会を組織したり、全体での話し合いを行う | 12要素 | 18% |
| ② 教育課程やカリキュラムの工夫を行う | 20要素 | 30% |
| ③ 障害（児）理解や啓発を行う | 24要素 | 36% |
| ④ 研修会・研究会を開催する | 7要素 | 10% |
| ⑤ その他 | 4要素 | 6% |

重要度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 35)



- | | | |
|-------------------------|------|-----|
| ① 委員会を組織したり、全体での話し合いを行う | 3要素 | 9% |
| ② 教育課程やカリキュラムの工夫を行う | 9要素 | 26% |
| ③ 障害（児）理解や啓発を行う | 12要素 | 34% |
| ④ 研修会・研究会を開催する | 5要素 | 14% |
| ⑤ その他 | 6要素 | 17% |

(4) 要素集計結果のまとめ

重要度第1と2位では、カテゴリー「障害（児）理解や啓発を行う」「教育課程やカリキュラムの工夫を行う」「委員会を組織したり、全体での話し合いを行う」「研修会・研究会を開催する」の順でしたが、重要度第3位では、カテゴリー「障害（児）理解や啓発を行う」「教育課程やカリキュラムの工夫を行う」「研修会・研究会を開催する」「委員会を組織したり、全体での話し合いを行う」の順で、重要度の順位によってカテゴリーの順番がそれぞれ入れ替わっています。

「その他」における具体的な記述内容は、①緊急な場合の対応の確認、②教員同士の交流、③餅つき大会、④日常的な情報交換等がありました。

カテゴリー「障害（児）理解や啓発を行う」における要素の具体的記述内容の傾向は、①職員会議で特殊学級や児童生徒の様子を報告する、②特殊学級から職員向けの通信の発行を行う、等でした。

カテゴリー「教育課程やカリキュラムの工夫を行う」における要素の具体的記述内容の傾向は、①縦割り班活動を行っている、②特殊学級の授業公開を行っている、教師が一人一回特殊学級の授業を担当する、等でした。

カテゴリー「委員会を組織したり、全体での話し合いを行う」における要素の具体的記述内容の傾向は、①障害児教育に関する委員会（部会）を設置している、校内就学指導委員会を設置している、②交流委員会を設置している、児童を語る会を全職員でもつ、等でした。

カテゴリー「研修会・研究会を開催する」における要素の具体的記述内容の傾向は、①交流教育や障害児教育や事

例研究発表等を校内で行う、②講師を招き職員研修を行う、地域の人材を招き研修を行う、等でした。

3. 部分考察

・本設問に関して、重要度第1位に何らかの回答を行った学級(学校)は、約61%ですが、重要度が下がる毎に回答数が減少しています(第2位36%、第3位19%)。カテゴリーは「障害(児)理解や啓発を行う」「教育課程やカリキュラムの工夫を行う」「委員会を組織したり、全体での話し合いを行う」「研修会・研究会を開催する」「その他」となっていますが、それぞれが単独でかつ単発的に行われているのではないかと推測されます。

「肢体不自由特殊学級側から、通常級の教師に対する要望や意見」について

1. 設問について

本設問は、生徒同士の交わりを豊かにするために、肢体不自由特殊学級側から、通常級の教師に対する要望や意見について、重要と思われるものから順に上位3位までを自由記述形式で回答するものです。

2. 結果

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級アンケート回答校総数(185校)のうち、上記設問に関して、何らかの回答を行った学(級)校数の割合。

① 重要度第1位	110校(学級)	60%
② 重要度第2位	57校(学級)	31%
③ 重要度第3位	43校(学級)	23%

(2) 記述内容の要素

重要度第1位～第3位の記述内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。

その結果、

① 積極的な協力

- ・本人に対する関わり・配慮
- ・担当クラス(児童)への関わり
- ・特殊学級(担任)との連携促進

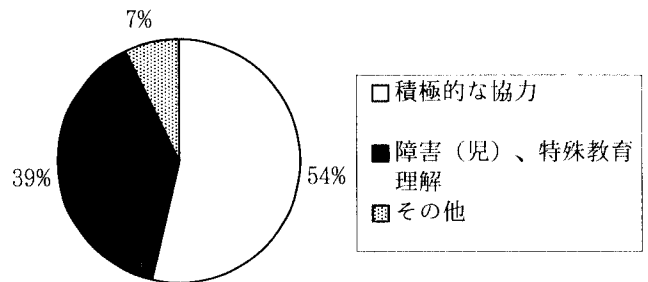
② 障害(児)、特殊教育理解

③ その他

以上のカテゴリーに分類することができました。

(3) 要素集計の結果

重要度第1位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 110)



① 積極的な協力

59要素 54%

- ・本人に対する関わり・配慮

(25/59要素 43%)

- ・担当クラス(児童)への関わり

(22/59要素 37%)

- ・特殊学級(担任)との連携促進

(12/59要素 20%)

② 障害(児)、特殊教育理解

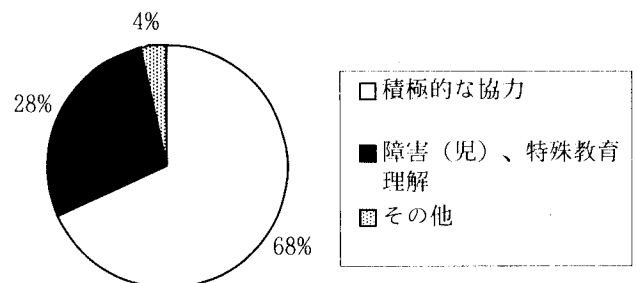
43要素 39%

③ その他

8要素 7%

重要度第2位にランクされた各カテゴリー

(要素総数 57)



① 積極的な協力

39要素 68%

- ・本人に対する関わり・配慮

(14/39要素 36%)

- ・担当クラス(児童)への関わり

(12/39要素 31%)

- ・特殊学級(担任)との連携促進

(13/39要素 33%)

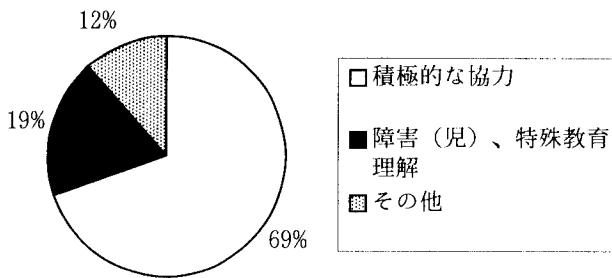
② 障害(児)、特殊教育理解

16要素 28%

③ その他

2要素 4%

重要度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 43)



① 積極的な協力	30要素	69%
・本人に対する関わり・配慮	(11/30要素)	37%
・担当クラス(児童)への関わり	(9/30要素)	30%
・特殊学級(担任)との連携促進	(10/30要素)	33%
② 障害(児)、特殊教育理解	8要素	19%
③ その他	5要素	12%

(4) 要素集計結果のまとめ

本回答要素は、大きく「積極的な協力」と「障害(児)、特殊教育理解」の二つのカテゴリーに分類されましたが、重要度ランク第1位～第3位まで「積極的な協力」のカテゴリーが多数を占めていました。このカテゴリーを構成している要素をさらに詳しく、

①-1 本人に対する関わり・配慮

例：特別扱いをしない、体調や障害の状態への配慮、本人への積極的関わり等

①-2 担当クラス(児童)への関わり

例：通常学級の児童に対する啓発、仲間づくり指導等

①-3 特殊学級(担任)との連携促進

例：サポート意識の向上、意志疎通の向上、特殊学級への積極的来級

以上のように分類しましたが、重要度第1位では「本人に対する関わり・配慮」「担当クラス(児童)への関わり」「特殊学級(担任)との連携促進」の順であったものの、重要度2～第3位ではともに、「本人に対する関わり・配慮」「特殊学級(担任)との連携促進」「担当クラス(児童)への関わり」という順位でした。

重要度のランクが下位になるほど、カテゴリー「障害(児)、特殊教育理解」の割合が減少し、それとは対照的にカテゴリー「積極的な協力」の割合が増加していました。

「その他」における具体的な要素の記述内容は、①施設の改善、②安全への配慮、等がありました。

3. 部分考察

・通常級の教師には、もっと積極的な関わりや障害(児)や特殊教育に関する理解をしてほしいとの要望が圧倒的であったことから、通常級の教師に特殊学級担任が求めているような協力が得られなかったことが推測されます。

「通常級の教師側から、肢体不自由特殊学級(担任)側に対する要望や意見」について

1. 設問について

本設問は、生徒同士の交わりを豊かにするために、通常級の教師側から、肢体不自由特殊学級(担任)に対する要望や意見について、重要と思われるものから順に上位3位までを自由記述形式で回答するものです。

2. 結果

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級アンケート回答校総数(185校)のうち、上記設問に関して、何らかの回答を行った学(級)校数の割合。

① 重要度第1位	79校(学級)	43%
② 重要度第2位	37校(学級)	20%
③ 重要度第3位	25校(学級)	14%

(2) 記述内容の要素

重要度第1位～第3位の記述内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。

その結果、

① 特殊学級(特殊教育)に関する情報提供

例：児童の障害についての情報提供、特殊学級での様子の紹介等

② 連携・協力への積極性

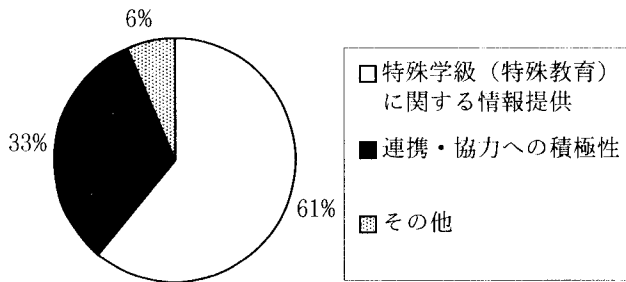
例：連携・協力できる関係づくり、通常学級へも関わる、校内活動への参加等

③ その他

以上のカテゴリーに分類することができました。

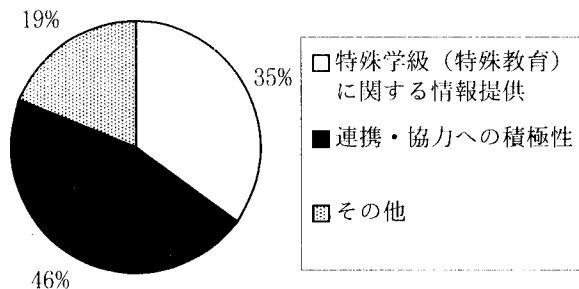
(3) 要素集計の結果

重要度第1位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 79)



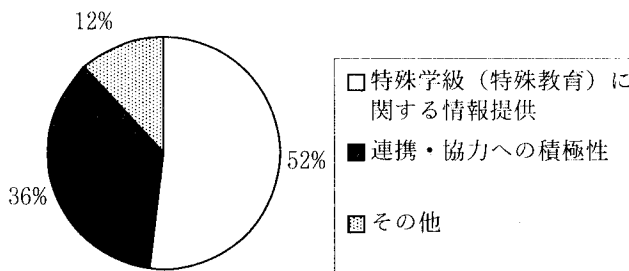
① 特殊学級（特殊教育）に関する情報提供	48要素	61%
② 連携・協力への積極性	26要素	33%
③ その他	5要素	6%

重要度第2位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 37)



① 特殊学級（特殊教育）に関する情報提供	13要素	35%
② 連携・協力への積極性	17要素	46%
③ その他	7要素	19%

重要度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 25)



① 特殊学級（特殊教育）に関する情報提供	13要素	52%
② 連携・協力への積極性	9要素	36%

③ その他 3要素 12%

(4) 要素集計結果のまとめ

本回答要素は、大きく「特殊学級（特殊教育）に関する情報提供」と「連携・協力への積極性」の二つのカテゴリーに分類されましたが、重要度第1位と第3位では、「特殊学級（特殊教育）に関する情報提供」のカテゴリーが多数を占めていましたが、重要度2位では、「連携・協力への積極性」が多数を占めました。

「その他」の要素の具体的な記述内容としては、①障害についての知識を得ておくこと、②保護者との連絡を密にすること、③保護者との十分な打ち合わせ、④教材・教具の充実、⑤目標を明確に持つこと、⑥特殊学級の生徒は特殊学級でみてほしい、等でした。

カテゴリー「特殊学級（特殊教育）に関する情報提供」の記述内容としては、①児童の実態・状況について理解したい、②担当クラスの児童とどのように関わらせてよいか知りたい、③本人に対する配慮や対応の仕方が知りたい、④児童の願いを教えてほしい、等でした。

カテゴリー「連携・協力への積極性」の記述内容としては、①特殊学級を主張しすぎないように、サポートの依頼を気軽に行ってほしい、②通常学級の授業にも担任が積極的に参加してほしい、③より緊密な連携を望む、等でした。

3. 部分考察

- ・回答学級（校）が他の設問に比べて低かったのは、間接（伝聞）的な回答趣旨であったことにより、記入が難しかったことが推測されます。
- ・通常学級の教師にも連携協力の意思があり、そのために特殊教育に関する情報を望んでいることが推測されます。

「肢体不自由特殊学級に在籍する児童生徒の保護者の要望や意見」について

1. 設問について

本設問は、学校全体の生徒や教師との豊かな交わりを進めていく活動に対して、肢体不自由特殊学級に在籍する生徒の保護者からはどのような要望や意見があるか、重要と思われるものから順に上位3位までを自由記述形式で回答するものです。

2. 結果

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級アンケート回答校総数（185校）のうち、上記設問に関して、何らかの回答を行った学（級）校数の割合。

① 重要度第1位 154校（学級） 83%

- ② 重要度第2位 111校(学級) 60%
- ③ 重要度第3位 60校(学級) 32%

(2) 記述内容の要素

重要度第1位～第3位の記述内容それぞれについて検討し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎の一つ選択しました。

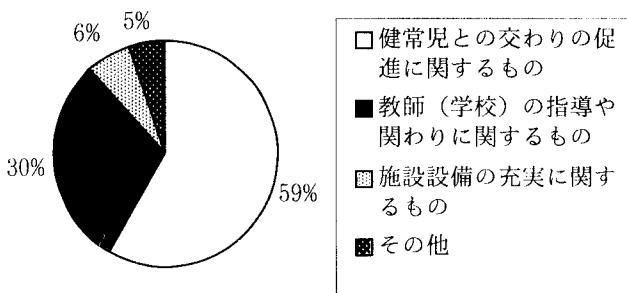
その結果、

- ① 健常児との交わりの促進に関するもの
例：なるべく通常学級で学習をしてほしい、みんなと同じ学校生活をさせたい等
- ② 教師(学校)の指導や関わりに関するもの
例：安全面での配慮をしてほしい、本人の能力を配慮した指導を望む
- ③ 施設設備の充実にに関するもの
例：エレベータの設置を望む、交流級を近くに配置してほしい等
- ④ その他

以上のカテゴリーに分類することができました。

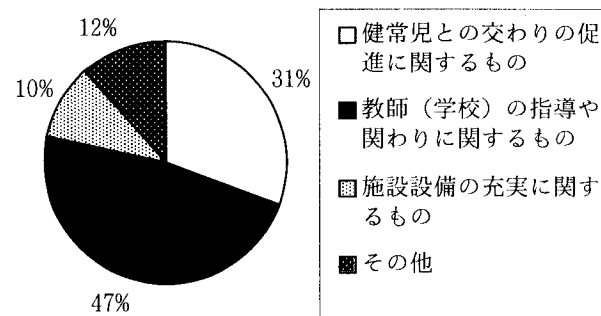
(3) 要素集計の結果

重要度第1位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 154)



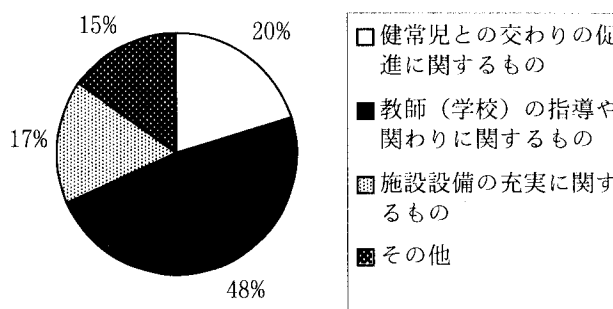
- ① 健常児との交わりの促進に関するもの 90要素 59%
- ② 教師(学校)の指導や関わりに関するもの 46要素 30%
- ③ 施設設備の充実にに関するもの 10要素 6%
- ④ その他 8要素 5%

重要度第2位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 111)



- ① 健常児との交わりの促進に関するもの 34要素 31%
- ② 教師(学校)の指導や関わりに関するもの 53要素 47%
- ③ 施設設備の充実にに関するもの 11要素 10%
- ④ その他 13要素 12%

重要度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数 60)



- ① 健常児との交わりの促進に関するもの 12要素 20%
- ② 教師(学校)の指導や関わりに関するもの 29要素 48%
- ③ 施設設備の充実にに関するもの 10要素 17%
- ④ その他 9要素 15%

(4) 要素集計結果のまとめ

重要度第1位では、カテゴリー「健常児との交わりの促進に関するもの」の要素数が、他のカテゴリー「教師(学校)の指導や関わりに関するもの」「施設設備の充実にに関するもの」「その他」を大きく上回っていました。

重要度第2位と3位では、カテゴリー「教師(学校)の指導や関わりに関するもの」の要素数が他のカテゴリーを大きく上回っていました。

カテゴリー「施設設備の充実にに関するもの」の要素の全体煮染める割合は、重要度第1位～第3位において、7%～15%程度でした。

「その他」の要素の具体的記述内容は、①些細なことでも連絡を密にしてほしい、②障害について正しく理解してほしい、③手伝いが必要な場合は依頼してほしい、④子どもの人権を大切にしてほしい、⑤安全確保、⑥人的配備を充実させてほしい、等でした。

カテゴリー「健全児との交わりの促進に関するもの」における要素の具体的記述内容の傾向は、①学校（教育）活動において通常学級や通常学級の児童生徒との交流を望む声が多くありました。

カテゴリー「教師（学校）の指導や関わりに関するもの」における要素の具体的記述内容は多岐にわたっていましたが、①児童生徒本人の障害に応じた関わりをしてほしい、②人間関係を豊かにする関わりをしてほしい、③いろいろな体験をさせてほしい、④人権（プライバシーに関すること）に配慮してほしい、⑤学力をつけさせてほしい、⑥他の児童生徒・教職員に対して子どもの障害理解をしてほしい、等の要望や意見がありました。

3. 部分考察

- ・多くの保護者が通常学級の生徒との交わりを望んでいると、捉えていることが分かりました。そのための教師（学校）側の努力や工夫も望んでいることがうかがえます。
- ・中学校に進学すると、交流よりも個別に応じた指導を望むのではと予測しましたが、結果は違っています。

「通常の学級に在籍する児童生徒の保護者の要望や意見」について

1. 設問について

本設問は、学校全体の生徒や教師との豊かな交わりを進めていく活動に対して、通常の学級に在籍する生徒の保護者からはどのような要望や意見があるか、重要と思われるものから順に上位3位までを自由記述形式で回答するものです。

2. 結果

(1) 設問回答率

肢体不自由特殊学級アンケート回答校総数（185校）のうち、上記設問に関して、何らかの回答を行った学（級）校数の割合。

① 重要度第1位	53校（学級）	29%
② 重要度第2位	23校（学級）	12%
③ 重要度第3位	9校（学級）	5%

(2) 記述内容の要素

重要度第1位～第3位の記述内容それぞれについて検討

し、その文脈から最も強調されている要素をそれぞれの順位毎に一つ選択しました。

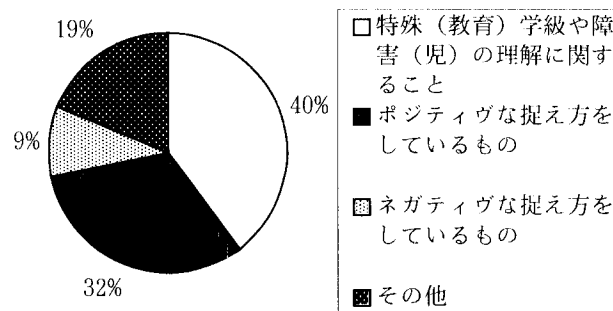
その結果、

- ① 特殊（教育）学級や障害（児）の理解に関すること
例：特殊学級児童の様子を知りたい、特殊学級についてもっと知りたい等
- ② ポジティブな捉え方をしているもの
例：我が子のためになる、交流の大切さを感じる等
- ③ ネガティブな捉え方をしているもの
例：学習の進度が遅れてほしくない、交流の意義を説明してほしい等
- ④ その他

以上のカテゴリーに分類することができました。

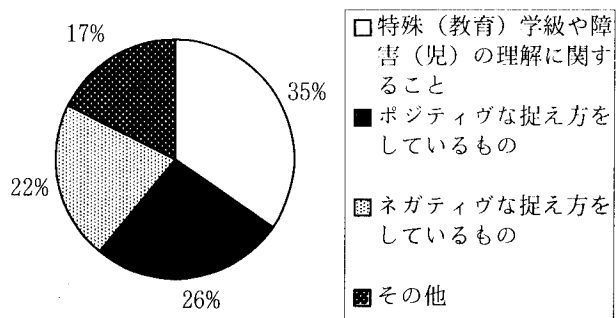
(3) 要素集計の結果

重要度第1位にランクされた各カテゴリー（要素総数53）



- | | | |
|---------------------------|------|-----|
| ① 特殊（教育）学級や障害（児）の理解に関すること | 21要素 | 40% |
| ② ポジティブな捉え方をしているもの | 17要素 | 32% |
| ③ ネガティブな捉え方をしているもの | 5要素 | 9% |
| ④ その他 | 10要素 | 19% |

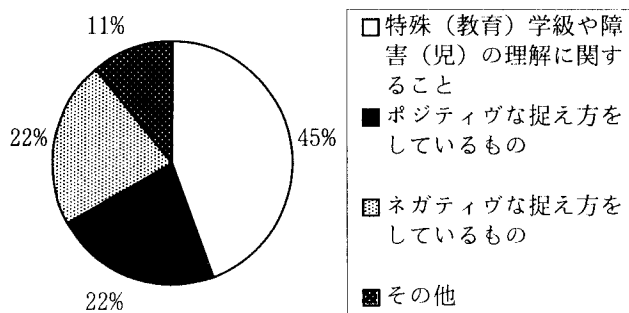
重要度第2位にランクされた各カテゴリー（要素総数23）



- | | | |
|---------------------------|-----|-----|
| ① 特殊（教育）学級や障害（児）の理解に関すること | 8要素 | 35% |
|---------------------------|-----|-----|

② ポジティブな捉え方をしているもの	6 要素	26%
③ ネガティブな捉え方をしているもの	5 要素	22%
④ その他	4 要素	17%

重要度第3位にランクされた各カテゴリー
(要素総数9)



① 特殊(教育)学級や障害(児)の理解に関すること	4 要素	45%
② ポジティブな捉え方をしているもの	2 要素	22%
③ ネガティブな捉え方をしているもの	2 要素	22%
④ その他	1 要素	11%

(4) 要素集計結果のまとめ

重要第1位から第3位において、学校における児童生徒や教師との豊かな交わりを進めていく活動に対して、カテゴリー「ポジティブ(好意的・積極的)に捉えているもの」の要素数が多くありました。とりわけ、重要度第1位と第2位では、それぞれの回答要素数全体の32%、26%を占めていました。

カテゴリー「特殊(教育)学級や障害(児)の理解に関すること」の要素数は、重要度第1位～第2位において、上記カテゴリー「ポジティブ(好意的・積極的)に捉えているもの」に次いで、多くありました。

カテゴリー「ネガティブな捉え方をしているもの」の要素数は、重要度第1位～第3位を通じて少なかったものの、全体要素数に対する割合が重要度のランクが低くなるにつれ、高くなっていました。

「その他」の要素の具体的記述内容は、①バリアフリーが必要、②担任は継続した方がいい、等でした。

カテゴリー「ポジティブ(好意的・積極的)に捉えているもの」の要素に関する具体的記述内容の傾向は、①保護者の子どもにとって人間性を育てるために良いと評価している、②保護者自身がそのような活動を当然のことと評価している、③そのような活動を積極的に進めるよう学校に

対しさまざまな提案を行う、というものでした。

カテゴリー「ネガティブな捉え方をしているもの」の要素に関する具体的記述内容の傾向は、①交流を行っているクラスの学習進度に関する不安、②特殊学級学在籍児が通常級在籍児に迷惑をかけている、等でした。

3. 部分考察

- ・回答学級(校)が少なかったのは(重要度第1位29%、第2位12%、第3位5%)本設問が間接(伝聞)的回答趣旨であったために、記入が難しかったことと思われる。
- ・障害がある子どもたちとの交わりについて、ほとんどの保護者は積極的に捉えている、と認識されています。そして、そのための情報提供も望んでいる、と考えています。
- ・交流に積極的ではない保護者は、交流に反対なのではなく、不安が先に立つようです。
- ・重要度2と3位では、ネガティブな捉え方をしている割合が20%を超えますが、全体での要素数も少なく、正確に実態を示しているとは考えられません。しかしながら、10%程度は、そのような意見があることも事実です。
- ・小学校と比較すると、「ポジティブ(好意的・積極的)に捉えている」の割合が低く、「特殊(教育)学級や障害(児)の理解に関すること」が高く示されました。

「地域の機関や人々と学校との関わり」について

1. 設問について

本設問は、当該校が地域の人的、社会的リソースとの交流を、交流先最大5カ所までについて、「どこ(だれ)と」「どのように(内容・方法)」「どれほどの頻度で」行っているか、それぞれ回答するものです。

2. 結果

第1欄目に何らかの形で回答のあった学級(学校)数、すなわち、本設問に回答した学級(学校)数は、81学級(校)でした。したがって、本設問の回答率は、44%(81/185)となります。

(1) 「どこ(だれ)と」に関して

交流先 総件数 143件

したがって、設問に回答のあった学級(学校)では、1学級(校)平均約1.8カ所(143/81)と交流を行っていることとなります。

また、本設問に対する記述内容の要素は、

1. 地域の個人

例：地域に住む人材（お年寄り、外国人、スポーツ選手、保護者）等

2. 地域の団体

例：老人施設、病院、公的機関（教育委員会、公立病院、社会福祉協議会等）等

3. 地域の学校

例：小中学校、特殊教育諸学校、幼稚園等

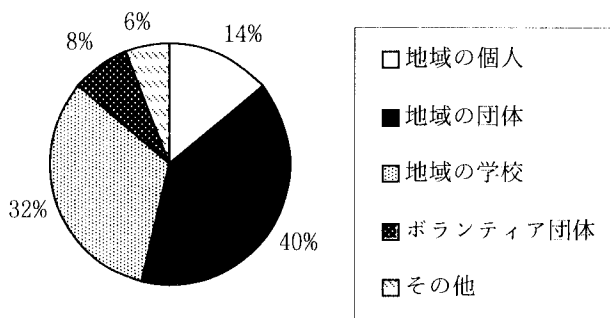
4. ボランティア団体

例：スポーツクラブ、趣味の会等

5. その他（固有名詞等で判断が困難であったもの）

以上のカテゴリーに分類することができました。

それぞれのカテゴリーが全体に占める割合は、以下の通りです。



(2) 「どのように」に関して

本設問に対する記述内容の要素は、

1. ボランティア活動を一緒に

例：ボランティア活動による、余暇活動（餅つき、スポーツ、ゲーム）等への参加

2. 学校や教育委員会等公的機関主催による余暇活動

例：リンゴ狩り、スポーツ大会、ゲーム、夏祭り等への参加

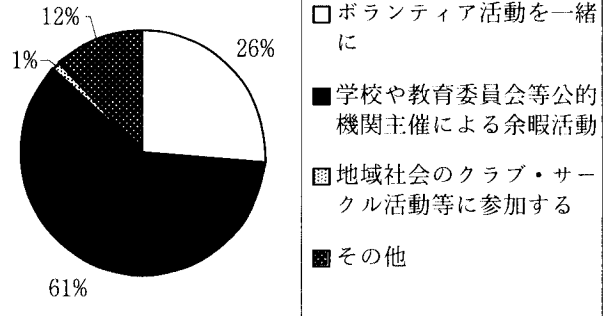
3. 地域社会のクラブ・サークル活動等に参加する

例：音楽サークル、盲導犬サークル、手話クラブ、和太鼓クラブ等

4. その他（内容から判断が困難であったもの）

以上のカテゴリーに分類することができました。

それぞれのカテゴリーが全体に占める割合は、以下の通りです。



(3) どれほどの頻度で

本設問に対する記述内容の要素を、頻度の多いものから、

1. 月数回以上

2. 月1回または学期に数回 程度

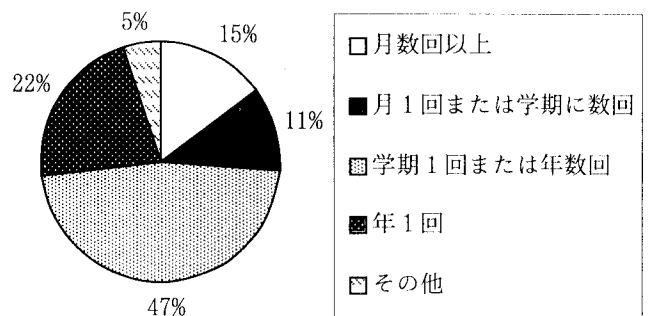
3. 学期1回または年数回 程度

4. 年1回 程度

5. その他（随時、不定期、学年によって異なる等の記述）

以上のようなカテゴリーに分類しました。

それぞれのカテゴリーが全体に占める割合は、以下の通りです。



3. 部分考察

・地域社会との交流を何らかの形で行っていると回答した学校（学級）は、44%と少なく、行っている学校（学級）が対象としている相手の平均は約1.8カ所でした。

・教育委員会や教育機関によるいわゆる公的な行事への参加という形式が多く、地域を構成している団体や個人との交流が少ない結果でした。

IV 全体考察 ～今後の課題を中心に～

私たちは、児童生徒～教師～保護者という人的対象と特殊学級内～学校～地域社会という空間的な広がりを視野に入れながら、小・中学校における肢体不自由特殊学級と通常学級が人と人との交わりをいかにして豊かなものにしていくか、ということに焦点を当てて調査を行いました。それぞれの学校において、さまざまな優れた工夫や努力が行われていました。ここでは今後の課題を中心に人的対象と空間的広がりを背景として考察を行います。

(1) 特殊学級の活動視野について

特殊学級単独設置と他の障害種別特殊学級との併設の場合では、その活動範囲に大きな違いがみられました。単独設置の場合の交わりの対象は学校全体（通常学級）ですが、併設の場合には、同じ特殊学級同士がそのための活動の視野として取り上げられる傾向がありました。今後全校的な視野（通常級）によるよりいっそうの活動を充実するための工夫が必要と思われる。そのためには、通常学級側、特殊教育側双方の連携・協力体制（共通理解を伴った）が今後ともますます必要となってくると考えられます。

(2) 教師集団の潜在的状況について

学校における教育活動の推進者は教師集団です。上記「人と人との豊かな交わり」を学校内で推進していくためには、この集団のパワーが中核となってさまざまな活動を行っていかねばならないことはいまでもありません。今回の調査によって、特殊学級と通常学級の教師集団間、特に特殊学級担任と交流級担任の間では頻りに話し合いが行われているという結果が示されています。しかしながら一方、特殊学級の担任が望むような協力が得られないというような双方の集団における距離感も存在が否めません。

ただし、それぞれの集団が特殊学級に在籍する子どもを中心に、それら（特殊教育や障害に関する）の情報交換や共通理解を望んでいるという状況も明らかになりました。このような潜在的状況を現実化していくためには、全校的な視野をもって障害や特殊教育に関する情報交換を行うとともに、全校的な体制の充実を図っていく必要があると思われます。

(3) 保護者と学校について

特殊学級に在籍する児童生徒の保護者の多くは、通常学級の児童生徒との交わりを望んでいる、と特殊学級の教師は捉えています。そして、通常学級に在籍する児童生徒の保護者の多くはそのことに肯定的である、とも捉えています。

これらを踏まえながら、学校側は教育活動を展開していかねばなりません。本人の実態把握や教育方針等について学校（特殊学級）側との相違が多くあります。この相違を埋めていくためには、保護者と学校（学級担任）との話し合いの充実が考えられますが、登下校時に頻りに行われている学校での子どもの様子や体調に関する話し合いの中で培われる信頼関係を基礎に、全校的な視野によるより十分な話し合いの機会が多くなることやその内容が深まっていくことが期待されます。また、地域の関係機関（医療機関、養護学校、福祉関連機関等）や人的資源の活用、そしてそれらとの連携・協力もそのための視野に入れる必要があるでしょう。

さらに、これらの背景には児童生徒個々の教育について、学校の在り方や教育目標を踏まえながら、保護者との十分な共通理解に基づき個々の学校において主体性のある指導の展開を行っていく、という教育全体に関

わる大きな課題が内包されていると思われます。

(4) 小学校・中学校の特殊学級の相違について

特殊学級設置小・中学校の在り方は特に学校内における工夫や課題に関する部分での異なりが多くみられました。これらの相違は、小学校と中学校との教育体制や目標（教科担任制や進学課題等）、学区の広さ等の相違に加え、児童生徒個々の行動面での在り方の相違にその要因があると考えられます。小学校における関わり、中学校における関わりの工夫は、今後これらの学校種別による特性を踏まえながら、その活動を充実させていかねばならないと考えられます。

(5) 地域社会との交流について

学校という物理的な枠を離れ、児童生徒が一丸となって活動できる環境を整えることが個々の児童生徒の「生きる力」を育む大きな推進力の一つとなります。個々の学校においても、地域におけるさまざまな人や機関等との交流を行っていることが分かりました。

しかしながら、活動の内容や頻度からすると、その実態は公共機関（学校、教育委員会、福祉機関等）が公的に行う、いわゆる設定された行事を享受するという状況であろうと思われます。学校が地域社会との交流を促進するに当たり、地域性や人的資源を生かした学校独自の積極的な地域社会への関わりを如何に実現化していくかが今後の課題である、と思われます。また、障害のある子どもたちの教育的支援という特性から、地域における養護学校との連携・協力もその視野に入れなければならないでしょう。

(6) 特殊学級における障害の重い子どもについて

今回の調査では、先生方が捉えた限りにおいて、いわゆる肢体不自由その他の障害の程度が重度の子どもが多く肢体不自由特殊学級に在籍していることが分かりました。このような場合、ケースバイケースで学校と保護者の連携や他の機関（医療、福祉、養護学校等）との連携が特に重要であることは言うまでもありません。また、担当教師自身の専門性も必要とされます。

謝辞とお詫び

この全国調査にご協力いただきました、肢体不自由特殊学校設置小・中学校関係者各位に対し、深く感謝いたします。

また、アンケート用紙が一部誤送付あるいは未送付の学校がありました。ご迷惑をかけたことをここにお詫び申し上げます。

調 査 票

調 査 票

I 学校・学級の概要について

1. 通常の学級の設置学級数及び在籍児童生徒数を、該当する欄に記入してください。

設置学級数	在籍児童または生徒数
()学級	()人

2. 肢体不自由特殊学級が開設されたのはいつですか。

昭和・平成()年

3. 貴校における肢体不自由特殊学級数および在籍児童生徒数を記入してください。また、その他の特殊学級が併設されている場合、()内にその種別、設置学級数、在籍児童生徒数を記入してください(通級学級の場合は、欄外に※を記してください)。

特殊学級の種別	設置学級数	在籍児童生徒数
肢体不自由特殊学級	学級	人
()特殊学級	学級	人
()特殊学級	学級	人
()特殊学級	学級	人
()特殊学級	学級	人

【調査票記入要領】

1. この調査票の取り扱いについては、学校名及び個人が特定されないように配慮いたしますので、率直なご記入をお願いします。
2. 記入者は貴校の特殊学級の状況について充分把握されている方をお願いします。
3. 設問に対しては、記入時点での状況についてお答えください。
4. 調査票は平成12年2月末日までにご返送ください。

この調査についてのお問い合わせは、下記をお願いします。

国立特殊教育総合研究所 肢体不自由教育研究部

TEL: 0468-48-4121(内線 331, 332) 担当 笹本、當島



II 肢体不自由特殊学級に在籍する児童生徒の状況について

1. 肢体不自由特殊学級に在籍する個々の児童生徒の状態について、該当する状況を下記のそれぞれのまとまりごとに、4つ組み合わせて個表に記入してください。

* その他感覚障害等を有する場合には、☆印の欄に

視・・・視覚障害（弱視等）

聴・・・聴覚障害（難聴等）

内・・・内臓疾患

と、記入してください。

* 診断名の欄には医師の診断に基づく疾病名を記入してください。

* 個表のA, B, C・・・は、後にでてくる個表のものと対応させてください。

日常生活動作について

- ① 日常生活動作をほとんど介助している
- ② 日常生活動作を部分的に介助している
- ③ 日常生活動作はほとんど介助しない

知的発達について

- ④ 知的に大変遅れがある
- ⑤ 知的な遅れがある
- ⑥ 知的にあまり問題がない

情緒的な発達について

- ⑦ 情緒的に非常に不安定である
- ⑧ 情緒的に不安定である
- ⑨ 情緒的にあまり問題がない

健康上の配慮について

- ⑩ 常に医療的配慮が必要
- ⑪ ある程度の配慮が必要
- ⑫ あまり配慮は必要としない

児童生徒	学年・性別	状 況	☆	診 断 名
記入例	小2・男	② ⑤ ⑨ ⑪	視	脳性マヒ
A				
B				
C				
D				
E				
F				

2. 肢体不自由特殊学級に在籍する児童生徒は、それぞれどこから就学・転学あるいは転級してきましたか。下記の該当するものから番号を選んで個表に記入してください。転学・転級の区別のある場合にはそのことを欄内に明記するとともに、それが何学年であったかも記してください。

* 個表のA, B, C・・・は前に記載されている個表と対応させてください。



1) 小学校特殊学級の場合

- ① 幼稚園から 就学
- ② 保育園から 就学
- ③ 通園施設から 就学
- ④ 在宅のままで直接 就学
- ⑤ 同小学校通常級から 転級
- ⑥ 同小学校他の特殊学級から 転級
- ⑦ 他の小学校通常級から 転学
- ⑧ 他の小学校特殊学級から 転学
- ⑨ その他 () から ()

2) 中学校特殊学級の場合

- ① 小学校通常級から 就学
- ② 小学校特殊学級から 就学
- ③ 同中学校通常級から 転級
- ④ 同中学校他の特殊学級から 転級
- ⑤ 他の中学校通常級から 転学
- ⑥ 他の中学校特殊学級から 転学
- ⑦ 養護学校中学部から 転学
- ⑧ その他 () から ()

児童生徒	どこから・学年	児童生徒	どこから・学年
記入例	⑤・小3	D	
A		E	
B		F	
C			



Ⅲ 肢体不自由特殊学級にかかわる教師等について

1. 肢体不自由特殊学級にかかわる教師に関して、それぞれの教師ごとに該当する欄に○あるいは数字を記入してください。

* 雇用形態の欄の常勤とは正規採用者、非常勤とは期限付き採用者の意味です。どちらかに○をしてください。

教員	雇用形態	教職経験年数
A	常勤・非常勤	教職経験（ ）年の内、特殊教育経験（ ）年
B	常勤・非常勤	教職経験（ ）年の内、特殊教育経験（ ）年
C	常勤・非常勤	教職経験（ ）年の内、特殊教育経験（ ）年
D	常勤・非常勤	教職経験（ ）年の内、特殊教育経験（ ）年
E	常勤・非常勤	教職経験（ ）年の内、特殊教育経験（ ）年
F	常勤・非常勤	教職経験（ ）年の内、特殊教育経験（ ）年
G	常勤・非常勤	教職経験（ ）年の内、特殊教育経験（ ）年

2. 肢体不自由特殊学級を運営するにあたり、上記教師以外に補助の役割をする人が特別に配置されている場合には、該当する欄に記入してください。

- 1) 補助の役割をする人は何人配置されていますか。 ()人
- 2) その人は制度上どのように呼ばれていますか。 ()
- 3) その人は学級内で通常どのように呼ばれていますか。 ()
- 4) その人の勤務は週にどのくらいですか・・・複数の場合には代表1名分
 定期的 月～金曜日 ()時間、土曜日 ()時間
 不定期 ()
- 5) その人は学級において主としてどのような活動をしていますか。
 - a. 直接に指導を行い、主に ()
 - b. 直接に指導を行わず、主に ()
 - c. その他 ()

3. ボランティアで、上記の5)以外に補助の役割をする人がいる場合には、該当する欄に記入してください。

- 1) ボランティアで補助の役割をする人は何人いますか。 ()人
- 2) 当てはまる () 内に○を記入してください。

その人(達)は、

- ・通常学級に在籍している児童生徒の保護者 ()
- ・特殊学級に在籍している児童生徒の保護者 ()
- ・直接学校とは関係のない(大学生・地域住民・その他< >)のボランティア活動グループ ()
- ・その他 ()・・・< >

IV 人と人との交わりを豊かにする工夫等について

学級内における人と人との交わりの基本は、個々の教師と児童生徒、児童生徒同士あるいは教師同士の人間関係に基づいていますが、それらを豊かなものにしていくための工夫や課題についておたずねします。

なお、以下の設問は、〈肢体不自由特殊学級内〉〈学校全体〉〈地域社会〉以上3つの視点から構成されています。

〈肢体不自由特殊学級内の視点から〉

貴学級が肢体不自由単独で設置されている場合には1.3.

他の障害種別特殊学級が併設されている場合には2.3.について回答してください。

1. 肢体不自由特殊学級が単独で設置されている場合

1-1. 教師と児童生徒、あるいは児童生徒同士のつながりを豊かにするために、日頃から工夫していることを具体的に重要だと思われる順番に3つ書いてください。

(1)

(2)

(3)

1-2. 上記の工夫が更に充実していくためには、どのようなことが必要ですか、重要だと思われる順番に3つ書いてください。

(1)

(2)

(3)

2. 他の障害種別特殊学級が併設されている場合

2-1. 教師と児童生徒、あるいは児童生徒同士人のつながりを豊かにするために、日頃から工夫していることを具体的に重要だと思われる順番に3つ書いてください。

(1)

(2)

(3)

2-2. 上記の工夫が更に充実していくためには、どのようなことが必要ですか、重要だと思われる順番に3つ書いてください。

(1)

(2)

(3)

□

3. 肢体不自由特殊学級においては、教師と保護者のつながりも重要なことと思われます。そこで、肢体不自由特殊学級に在籍する児童生徒の保護者とのつながりを豊かにするために行っている具体的な工夫について、以下の問いにお答えください。

3-1. 日々の子どもの学校での様子や、指導のこと等に関して、保護者との情報交換や連絡は必須のことと思われます。日常的にこのような情報交換や連絡は具体的にどのような形でどのような行われていますか、頻度の高い順番に3つ書いてください。

(1)

(2)

(3)

3-2. 保護者との豊かなつながりがなかなか計れないということもあろうかと思ひます。それは具体的にどのようなことですか、より切実と思われる順番に3つ書いてください。

(1)

(2)

(3)

<学校全体の視点から>

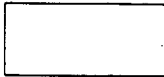
1. 子どもたちの交わりを豊かにするための日常的な取り組みとして、通常の学級（交流級）との交流活動がありますが、その状況についてお聞きします。

児童生徒個々の通常の学級との日常的な交流活動（運動会、文化祭、遠足等の活動は除く）について、下の選択肢から当てはまる番号を選び（複数回答可）、個表に記入してください。また、その具体的な内容を右の欄に書いてください。

- ① 同校の通常の学級と教科の交流を行っている。
- ② 同校の通常の学級と日常の全校行事の交流を行っている。
- ③ 同校の通常の学級と給食時間の交流を行っている。
- ④ 同校の通常の学級と上記以外の交流を行っている。
- ⑤ 同校の通常の学級とは交流を行っていない。

* 日常の全校行事とは：日常的に行われる全校朝会、全校集会等を指します。

* 個表のA, B, C・・・は、前に記載されている個表と対応させてください。



3-2. 上記3-1.の工夫が更に充実していくためには、どのようなことが必要ですか、重要だと思われる順番に3つ書いてください。

(1)

(2)

(3)

4. 学校全体で行う児童生徒同士の交わりを豊かにする取り組みについては、教員同士が全校的な規模で連携したシステム作りや意識の改革を進めていくことが必要と思われます。

4-1. そこで、上記のような取り組みについて具体的なものが行われているならば、書いてください。

(1)

(2)

(3)

4-2. 上記4-1.のような取り組みを進めていくなかで(肢体不自由) 特殊学級側からの通常級の教師を対象とした要望や意見について、重要と思われる順番に3つ書いてください。

(1)

(2)

(3)

4-3. 上記4-1.のことについて、通常級の教師側からの(肢体不自由) 特殊学級側からを対象とした要望や意見について、重要と思われる順番に3つ書いてください。

(1)

(2)

(3)

5. 保護者の要望等についてお聞きします。

5-1. 学校全体の児童生徒や教師との豊かな交わりを進めていく活動に対して、(肢体不自由) 特殊学級に在籍する児童生徒の保護者からはどのような要望や意見がありますか、重要と思われる順番に3つ書いてください。

(1)

(2)

(3)



5-2. 学校全体の児童生徒や教師との豊かな交わりを進めていく活動に対して、通常の学級に在籍する児童生徒の保護者からはどのような要望や意見がありますか、重要と思われる順番に3つ書いてください。

- (1)
- (2)
- (3)

<貴校の在る地域社会の視点から>

6. 貴校と交流（人と人との豊かな交わりを進める活動）を行っている地域のリソース（社会的な資源：機関や組織や人等）があれば、どこと（誰と）、どのように、どれほどの頻度で行っていますか、お教えてください。

どこ（だれ）と	どのように	頻 度

V そ の 他

<研修について>

1. (肢体不自由) 特殊学級の教師を対象とした研修会(講習会)の要望が非常に高いと聞き及んでいます。当研究部もそのようなご要望に将来的にはお応えできるようにと考えています。

そこで宿泊を伴う研修会(講習会)を行うならば、との仮定でお聞きします。

1-1. 研修の内容はどのようなものがいいですか。ニーズの高い順番に3つ書いてください。

(1)

(2)

(3)

1-2. 研修会(講習会)の開催時期はいつ頃なら参加しやすいですか。下の中から当てはまる番号と前半・後半いずれかを○で囲んでください。

(1) 1学期中 (前半・後半)

(2) 夏休み中 (前半・後半)

(3) 2学期中 (前半・後半)

(4) 冬休み中 (前半・後半)

(5) 3学期中 (前半・後半)

(6) 春休み中 (前半・後半)

1-3. 研修会(講習会)の開催期間は何日程度なら参加しやすいですか。下の中から当てはまる番号に○を付けてください。

(1) 1日～2日程度

(2) 3日程度

(3) 5日程度(1週間)

(4) 10日程度(2週間)

(5) 2週間以上



VI その他、ご意見ご要望が在ればご自由にお書きください。

* 記入者氏名・職名 ()

* 学 校 名 ()

* 所 在 地 (任所 〒 /TEL)

* 記入年月日 (平成12年 月 日)

ご協力ありがとうございました。

調査担当スタッフ

笹本 健 (肢体不自由教育研究部 部長)
滝坂 信一 (肢体不自由教育研究部 室長)
渡邊 章 (特殊教育情報センター 室長)
當島 茂登 (肢体不自由教育研究部 主任研究官)
徳永 豊 (肢体不自由教育研究部 主任研究官)

平成 11 年度, 12 年度

障害のある子どもの教育指導の改善に関する調査普及事業
全国小・中学校肢体不自由特殊学級実態調査報告書

平成 13 年 3 月 印刷・発行

編集 肢体不自由教育研究部

発行 国立特殊教育総合研究所

〒 239-0841 神奈川県横須賀市野比 5 丁目 1 - 1

電話 0468-48-4121 (代)

FAX 0468-49-5563

ホームページ <http://www.nise.go.jp>